
生存確率 0 %

勝田圭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生存確率0%

【Nコード】

N1206F

【作者名】

勝田圭

【あらすじ】

たかのりたち

高徳多一は平凡な中学生。ある日、クラス全員が地下での爆発に巻き込まれ、エレベーターで非難。しかしエレベーターは、本来存在しないはずの地下遙か深くへ。軍用コンピュータから次々とミッションが出題される。達成したところで地上へ戻れる保証はない。しかし達成出来なかったものには・・・死。

第一章 拝啓、素晴らしき麗らかで平和な日よ

1

「宿題ちゃんとやったの？」

母の声。

あとから思えばなんとも懐かしい、慈悲慈愛に満ちた優しい言葉であつたのか。

「やったつてば。もう昨日のうちに鞆に入れたよ」

それに対して、この不貞腐れたような反応はどうだ。

「あら、本当にちゃんとやるなんて珍しいわね」

「さんざん口やかましくいうからだろ」

毎日を過ごしていれば、たまには調子が悪いとかでちゃんとやることもある。

「お弁当、ちゃんと入れた？」

「だから、鞆に入れたつて。テーブルの上にないんだから、分かるだろ」

別に母に逆らうことがステータスだ、などと背伸びしてわざとひねくれてみせるような、そんな気持ちはまったくない。毎朝おんなじことばかりいわれるから、ついイライラしてしまうだけ。でもそれは平凡な日常であるが故だし、たまにはこんなことでイライラ出来ることを素直に感謝してしまう殊勝な気持ちになることもある。

「朝ご飯、早く食べちゃいなさいよ。よく噛んで食べるのよ」

でもやつぱり……うるさい。

「早く食べたいんだから、静かにしてろよな、細かいことはほっといてくれよ」

なんだろう。今日はやけにくどくどしいな。

たかのりたち

高德多一はまだ全く手をつけていなかった味噌汁のお碗を掴み、一気に飲み干そうという勢いで口の中に流し込む。想像していたより遙かに熱く、あやうくコメディ番組のワンシーンかのように激し

く吹き出してしまいそうになった。必死でおさえ、なんとか熱さを我慢し、口の中で冷めるのを待ち、ようやく飲み込むことが出来た。ちよつと口の中が、ヤケドした。

「まあ、母さんも多一のこと心配していつてるんだからさあ」

多一の向かいに母と並んで座っている父のワンテンポ遅れた発言。多一は答えず。ただ慥然とした表情で自己主張を決め込んだ。心配してくれるのは有り難いけど、「服着たか?」「靴下裏返しになってないか?」なんて、そこまで子供じゃないんだから。中学生は大人の世界に一步踏み込んでいるのだから、もつと自主性を尊重するとか、鍛えるべく突き放すとか、そういった対応が出来ないものか。子馬鹿もいいけど、度が過ぎると子供はろくな大人に成長しないぞ。などと思ってみるものの、やっぱり自分はまだ子供だ。さっきの母の言葉にムキになって、本来相反する二つの要望を同時に叶えるべく、どこかかと飯を口に放り込みながらも、もの凄い速度で咀嚼していく。ほつぺたが膨れて、餌を詰め込んだハムスターみたいだ。行儀の悪い、など小言をいわれるかなと思って、ちらりと母の顔をみてみると、予想に反して母は微笑ましそうな表情で自分の顔を見ているだけだった。隣の父もなんだか変な顔で自分のことを見ていた。

「おれ一人でなんだか馬鹿みたいじゃんかよ。なんか、調子狂うよなあ。どうしたの、今日は変だよ、もう。ひとにばっか、あれこれいつてないで、二人とも早く食べちゃいなよ。今日も仕事だろ」

最初荒らげていた口調は、だんだんおとなしくなり、音も小さくなって言葉の最後は完全に空気に溶けてどこかへ流れていつてしまった。何故だか自分でも分からないのだが、なんとなく、母の微笑みにとても「悲しみ」という気持ちを感じてしまったのだ。どっちの感覚なのかは分からない。母が悲しんでいると感じてしまったのか、自分が母の表情から勝手に悲しみを連想してしまったのか。

「そつだ、すっかり忘れてた。急がなきゃ」

母はちよつと肩をすくめるような仕草をし、立ち上がった。

なにも悲しいことなんかない。きつと気のせい。普段通りだ。

母は隣の和室に駆け込み、なにやら作業を始めた。

テーブルについたまま振り返って、何事かと様子を見る多一。母は背を向けているため、なんの作業をしているのか全く見えない。

「母さん、何やってんの？」

「あんたの、膝のところにはっかかりとあいたズボンの穴を縫っているのよ。あいたままじゃ格好悪いでしょ。どうせまた、制服でサッカーやっていて転んだんでしょ。さっき気付いて、朝食作ったら縫おうと思って忘れちゃった」

多一は咄嗟に立ち上がったて、数メートルの距離を猛然とダッシュ。まるでペナルティエリアに入ってボールを持ったりカルドのよう。母のそばに寄り、手にしているものを確かめた。

「なんだよ、縫ってるっていうより布を当てて継いでるじゃんか。格好悪いって。昭和時代じゃないんだから。それなら穴があいたままのほうがオシャレだよ」

母は手のひらにすっぽり収まるのが売りの、ハンドミシン機でズボンを縫っていた。ハンドミシンは母が今年になって通販で買った物の中で一番、いや唯一活躍している。

「なにいつてるの。中学生のくせに、制服の穴があいてるほうがオシャレなわけないでしょ。学生服は襟のホックまでピシッとして着るのが一番オシャレでかつこいいの」

「そんなこというなら、継ぎ接ぎしないで……やっべ、もう時間だ」
多一はまた全速力で食卓に戻り、残ったものを一気に口の中に詰め込んだ。再び頬袋パンパンのハムスターのような酷い顔になると、またまた折り返し、母のもとへ、

「母さん、ズボンはくから頂戴」

といったつもりだったがもごもとして全然言葉にならず。言葉の代わりにではないが、チーズの欠片が口から吹き出した。

「ちょうど縫いおわった」

もごもごでも親は子の喋っていることが分かるのか、それとも単

に自分の作業に没頭していてその結果報告をしただけなのか、その言葉からはさっぱりうかがい知れない。

ズボンを受け取る多一の顔は、ちよつとげんなりとしている。

「子供のズボンみたいでみつともないなあ。……でももう時間ないし、いいや」

多一は自室に行つて素早く着替えをすますと、靴と上着を持つて、靴を履き、玄関のドアを開けた。と同時に玄関の内側にある、エレベーターを呼ぶためのボタンを押した。

強い風とともに、広がる眺めが気持ちよく網膜を刺激する。ここはマンションの二十四階。周囲は少し古いマンションが多く、当時の建築基準法のため二十階までの建物ばかり。だから、百八十度の広がる眺めを心ゆくまで味わうことが出来るのだ。屋上に行けば当然、三百六十度の大パノラマだ。ずっと遠くには、いま多一が住んでいるような四十階程度のマンションもいくつか建っている。さらにその周囲を山々が連なつて取り囲んでいる。

そんな景観を横目に、通路を走り出す。

「行つて来ますは？」

母の声。玄関から叫んでいるのだ。

「行つてきまあす」

走りながら上着を着込む。制服のボタンを二つばかりとめる。

エレベータールームに着く。それほど待つこともなく、ドアが開いた。玄関にあるボタンを押して呼んでおいたからだ。エレベーターには誰も乗っていないかった。多一は素早く乗り込み、ドアを閉めた。「まるで落ちるような、もの凄い速度」、というのは変化していく階数表示から分かるのみで、乗っていると実感はない。少し揺れているかなと思う程度だ。最新型エレベーターとはいえもちろん万能ではない。若干の耳鳴りがしやすいことと、あまりの速度に、ボタンを押しても間に合わずに通過してしまうことがあるということが欠点だ。いまでも少し耳鳴りがしているが、これは慣れれば気にならないし、あつという間に二階に到着だ。昨年まで住んでいた築

三十年の二十階建てマンションとは大違いだ。

今日も空はどこまでも澄み渡るような晴天。

ここ何日かとても良い天気が続いている。

いまは六月。天気予報によれば梅雨入り前の最後の週だ。

二階のエントランスを出ると、そこは遊歩道と直結している。遊歩道の真ん中にはところどころ木々が植えられている。ほとんどのマンションが、遊歩道と繋がっており、しかも店や鉄道の駅も二階にメインとなる出入り口を置いているので、地に降りなくとも街の中ならどこへでも行くことが出来た。

だいたいのマンションは一階と地下一階が駐車場になっている。

遊歩道の下は何車線もある広い道路で、いまま無数の自動車が行き交っている。

多一は遊歩道を走り出した。

高德多一は中学二年生。今日もこうして平和で平凡な一日が始まるのだ。学校で適度に先生の話を聞いて、ちよつと気を抜いて前の生徒の背中に隠れて居眠りして、友達とばかばかしい話題で盛り上がった、放課後はサッカー部の練習で汗だくになって、家に帰る。そんな、退屈だけでも、でもそれなりに楽しい一日。多一は今日もそうであることを疑わなかった。

「清掃人」が、球形タイヤで八方自由自在に移動しながら、道のゴミをどんどん体内に吸い込んでいる。また新型になったようにデザインが少し変わって、丸っこくなっている。色も黒から白に変わった。白は清潔感があるが汚れが目立つということで黒い色だったはずだ。汚れにくい新素材が筐体に採用されたのだろうか。しかしお馴染みの、大昔の電子音のような単純なメロディは変わっていない。

「ご苦労さん」

多一は「清掃人」の白い胴体を手の甲で軽く叩いた。彼(?)は少し傾いた体勢を直そうとし、かえってバランスを失い、くるくると回転して、壁にぶつかってしまった。

「甘いな、新型」

「清掃人」は照れてでもいるのか電子音をがんがん鳴らし、でも何事もなかったように、またゴミを吸い込みはじめた。

サッカーのカウンターで駆け上がる時ほどではないが、それなりの速度で飛ばして五分ほども経つと、ようやく登校中の制服集団に合流することが出来た。

よく知った後ろ姿が見えた。

「吉野、おつす」

多一は吉野奈美の背中を思い切り叩いた。
よしのみ

「うわあ、びつくりした」

吉野奈美は飛び上がるように肩をびくりとさせると、振り向いた。驚きに大きく目を見開いている。

奈美は多一と同じクラス。ショートカットの髪と大きな二重まぶたの目が可愛らしい少女だ。

「なあんだ、高德かあ。脅かさないでよあ」

奈美は両手で心臓のあたりを押さえ、安堵の溜め息をつきながらも、きつと多一を睨みつけた。

「お前かならず思いっきり飛び上がるよな。いつも済ました顔してつから、ギャップが面白くてつい」

と楽しげに笑いながらも、走ってきた疲れに大きく肩で息をしている。

「別にぼくはそんな済ました顔なんかしてません、秦野さんじゃあるまいし。……もう、そんなに全力で走ってぜいぜい息を荒らげているくらいなら、あと十分早く起きればいいんだよ」

隙ありと判断した吉野奈美はさっきのお返しとばかり、多一の腹に拳で小突いた。軽い一撃ではあったけれども、すっかり油断していたために思い切りお腹にめり込み、激しく咽せ込んでしまった。

「簡単に早起き出来りゃ苦労はありませんっの」

母親は毎朝必ずゆとりを持って起こしてくれるのだが、あと五分あと五分と布団の中で繭のように閉じこもっているうちに、ぎりぎ

りの時間になつてしまふのだ。こればかりは、どんなに母の愛があるうと、どんなに目覚まし時計の技術が進歩しよう、どうにもならない永遠の課題かも知れない。

「寝坊ばかりするし、学校でも居眠りばかりだし、だからこの前だつて補習受けることになつちやつたんだよ」

「本当のことだからつてずけずけいいやつて。勉強が好きなやつには分かんねえよ」

「別に好きじゃないよ」

「きつとおれの勉強嫌いは、おれのDNAがもうそうなつちやつてるんだよ。おそらくは、代々ご先祖様がぐうたらだつたんだよ。でも、聞いて驚くなよ、なんとなんと今日はこの高德多一、宿題をちゃんとやってきましたぞ」

「驚くというよりあきれちゃうわよね。宿題をやるなんて、当たり前のことです。未来永劫褒めたたえろみたいな勢いで自慢するようなもんじゃない」

「おれには凄いことなの」

「わかつたわかつた。とにかく、高德のDNAも進歩はしてるってことだね、凄い」

奈美はくすりと笑った。

「おい、褒めてんのか貶してんのかよくわかんないぞ。あ、そうだそうだ、お前さ、志望校の希望、書いた？ 今度そのことで三者面談やるだろ。また先生と母さんとにボロクソいわれるかと思うと気が重いよな。あー、もうやだ。どっかに消えてしまいたい」

「勉強すればいいだけなのに。ぼくはS高を推薦で、つて前々から先生にいつてあるから、何も提出するものないよ。このままなら推薦は問題なさそうだつていわれたし」

「くそつ、いいなあ、頭のいいやつは。ところでお前さあ、自分のことをぼくつていうのやめろよ女のくせに」

「なにをいまさら。大きなお世話だよ」

奈美は腕を組み、ほっぺたを軽く膨らませた。

「スカートはいててぼくつて変だろ。聞いてて恥ずかしいぞ。自分で変と思わないか」

「お・も・わ・な・い。だからほつといてよ。なんとなく、ぼくはぼくが一番しつくりくるの。いいじゃん別に。ぼくはぼくだからぼくなのだ」

苦しそうな顔をしながらも一気に喋り終えると、大きく息を吸った。

頭がいくせに、すぐムキになったりと、情緒が子供っぽいところが可愛い。

「そりゃ失礼しましたなのだ」

遊歩道の支流から本流へ、次々と生徒たちが雪崩れ込んでくる。マンション群を抜け、視界が開け、多一たちの通う中学校が見えてきた。

地上六階地下二階建ての、大きな校舎。旧大戦時の設備を転用した無骨な造りの建物。中高一貫校であるもののそれでも広すぎて使い道に困るような校舎である。そんな校舎が何棟も建っている。

大勢がひしめきあうなか、二人はまたクラスメイトの姿を発見した。

「おつす、秦野」

「おはよう」

声をかけられた秦野^{はたのれい}怜は、横目でちらりと彼らのほうを見たが、そのまま視線を戻し、歩き続けた。クラスでも背の低いほうである彼女の姿はあつという間に生徒たちの流れの中に消えてしまった。

「さっきの話じゃないけど、あいつほんとに愛想のない顔してるよな。笑ったとこなんか、みたことないぜ」

「そうだね。でもね、ぼくたちは二年からだから以前の彼女をよく知らないけれど、去年までは結構活発でよく笑う明るい娘だったらしいよ」

「じゃ、なんであんななんだ」

「ぼくにいわれても知らないよ。なんか、辛いことでもあったのか

なあ」

2

教室の自動ドアが開き、中の光景が視界に飛び込んできた。脳を通らずに眼球から口へと情報のスルーパス、俗にいう条件反射的に高徳多一はため息をついた。

今日も普段と変わらず、桐野聡太きりのそうたが不良グループのいじめの的になっていた。やまだたかし山田敬、しまださとし島田敏、たじまけんいち多嶋健一の三人にプロレスの絞め技をかけられたり、殴られたりしている。形の上では二対二の戦いのようだが、多嶋健一は誤ったふりをして桐野聡太を殴ってしまった。り、励ますふりをして桐野聡太の背中を相手にむかって突き飛ばしたりしている。三人のボス的存在である遠山紀夫とあやまのりおが、その光景を面白そうに眺めている。

彼らはいじめなのか遊んでいるのかの境をあいまいに濁すのが非常に巧妙だった。だから他の生徒たちは、あきらかにいじめであることを知りつつも、先生に告げ口することもしにくかった。面とむかっていじめを注意する勇氣もなかった。みんな、自分が標的になるのは嫌なのだ。しかし、

「紀夫、手下どもに恥ずかしいことさせて喜んでんじゃねえよ、みっともない」

高徳多一だけは別だった。遠山紀夫とは、かつて友達だったことではないものの幼稚園の頃からの知った仲だ。遠山紀夫は小さい頃は泣き虫でおっかながりで、ことあることにおしっこを漏らしてしまっていた。多一はどんなに口喧嘩をして頭にきている時でも、そういうことを一切誰にもいわなかった。恩というのとも違うのだろうが、ともかくそのおかげですっかり不良となったいまも、どうにも多一に対して強気な態度に出ることが出来ない。

「うるせえな」

と凄んでみせるのが毎回やっとなのである。

山田敬たちも、手下呼ばわりされて腹立たしいが、ボスがこんな

調子なので勝手な行動に出るわけにもいかず、どうにもならなかった。

「桐野さあ、お前もいようにやられてんじゃないよ、男のくせに嫌なら嫌って、少しは歯向かえよ」

多一は桐野聡太にデコピンを食らわせた。

桐野聡太は目を白黒させ、口を開いたり閉じたりし、多一になにかいおうとしていたが、結局なにも言葉にならず、自己主張を諦めて逃げるように素早く自分の席へと着いてしまった。それきりうつむいたままだ。

だからいじめられるんだよ。と多一は呆れてしまう。別に礼をいってくれなくてもいいし、デコピン痛えな馬鹿でもいいから、なにが自分の考えを主張出来ないものか。

他の生徒たちはまったく関心なさげに友達と騒いでいる。下手にいじめの現場を直視してて、うつかり視線でも合おうものなら……と心配で、あえて見ぬ振りをして騒いでいるのだ。

不良グループらの憎々しげな視線などはどこ吹く風。多一は自分の机に鞆を置くと、近藤啓治、高木信二という仲の良い二人とお喋りをはじめた。

「しかし、お前勇氣あるよなあ。恥ずかしいけど、おれなんか駄目だ」

小声で近藤啓治がいう。

「ちっちゃい頃から知ってるからいいやすいだけだよ」

普通は不良生徒に堂々と注意なんか出来るわけない。それは多一も分かっているから、他の生徒たちにどうこういうつもりは全くない。ただ、桐野聡太にだけはつい文句をいいたくなる。いじめられている張本人のくせに、何故なにも自分なりの打開策を講じようとしないのか。黙ってなすがままにされて嵐が過ぎるのを待つのが回避策だとも思っているのだろうか。そんなことを、今後の人生でいつまでも続けていくつもりなのだろうか。

教室の自動ドアが微かな音とともに開き、秦野怜が入ってきた。

先ほど多一たちは登校中に会っているが、彼女は歩くのが遅いのでようやく教室に着いたのだ。

体が小さいのもあるかも知れないが、上履きが特注品かと思うほどに静かな足取りで、窓際にある自分の席へと歩き腰をおろした。教室外側の窓は強化ガラスで作られており、しかも二重になっている。透過性の非常に高い素材を使っているので厚みが判断しにくいのだが、なんと一枚で七センチもある。壁はなく、その巨大な窓ガラスが二重になっているだけだ。しかし、建物そのものをブラインドカーテンのような特殊合金製のシャッターが覆ってしまっているため、非常に眺めは悪い。

そのシャッターの隙間の向こうに、高層マンションが林立しているのが見える。

前述したように、この学校は以前、自衛隊の基地として利用していた建物を改修して校舎として利用している。

現在は地球規模での平和が謳歌されている時代であるが、時勢の変化などは誰にも予知出来るはずもなく、また前回のような世界規模の大戦がいつ起こるかかわからない。もしもそうなった場合には、ここがまた重要拠点の一つとなるかも知れない。

したがって季節毎に一度、自衛隊や警察から技術者が来て、設備に故障がないか点検をしていく。生徒たちには煩わしいことだが、ただし三日ほど学校が半休になるので、その点だけは誰もが得した気分になる。

俗に「要塞」と呼ばれていたこの地上六階地下二階の飾り気の無い無骨な建物は、本当に太古の要塞のような役割をしていたわけではない。銃や剣を手に、兵士が押し寄せてくるはずもない。

余談だが、現在の日本国憲法は、軍の名称の部分が改正されており、軍と自衛隊は同意語とされている。

要塞は指令基地、兵士の宿舎、研究室、などを一つの建物にまとめたものだ。戦争用の様々な設備も備わっており、衛星軌道上のミサイルを打ち落とすことなどは序の口である。まさに科学技術の粹

を結集した建物であった。現在はすっかりただの中学高校の校舎として、馴染んでしまっていたが。

3

吉野奈美は田子里美、北嶋秀子と話している。

三人は小学生の頃からの親友同士だ。

とりたてて詳しく話すほどでもない、他愛のない話だ。どここのパフェがおいしいとか、好きなドラマの話題、自分らの家族のこと。

退屈で素晴らしい日常だ。

「でね、そんな顔しながらも、ご飯つくってくれたのよ。普段は絶対そんなことしてくれないから、あたしもつぶりしちゃった」

北嶋秀子は父親と二人暮らし。昨夜、微熱が出て、念のため安静にしておこうと横になっていたところ父親が帰宅した。普段は彼女がどんな状態であろうと、構わずご飯を作らせるか、または出前を利用するはずなのに、父はいつものように不機嫌そうな顔をしながらも不器用な手で包丁をふるったというのだ。

「やっぱりさあ、お父さんタジちゃんのこと、可愛いんだよ。だって、たった二人きりの家族なんだもん。なのに、いつも文句ばかりいってさあ。お父さんに感謝しなきゃ駄目だよ」

と糾弾しつつも、そのなんとも不器用な親子の微笑まじさに奈美の顔は笑っている。

「だって、いつもは本当にムカつくことばかりいってんだよ」

「わかったわかった」

父親が普段しないようなことをしてくれた、という話が少し気にかかった。実は奈美も最近、両親の態度に対して同じようなことを感じていたのだ。不思議な偶然もあるものだ。と、それを切り出すとしたら、話題はすでに切り替わり、いま流行っているアイドルの話に移ってしまっていた。

アイドルの話になると奈美は完全に仲間から置いていかれてしま

う。

好きな男性アイドルがまったくいないのだ。むしろなんだか生理的に嫌い。女性アイドルは嫌いではないけれど、好きというわけでもないし、夢中になるのも恥ずかしいし、全体的に興味を持たないようになっている分野だ。

芸能人に限らない。そもそも奈美はあまり恋愛対象としての異性への関心がない。とはいえ、異性といえるのは好きだ。なんとなく気が休まるのだ。といっても相手は小学生の頃からたびたび同じクラスだった高德多一くらいしかいないが。もし前世来世というものがあるなら、自分の前世は男性で、きつとその思いを強く残したまま今生に生まれてきてしまったのだろう。

「おい、てめえ、金を早く払えよ！」

遠山紀夫の声が鼓膜に入ってくると、脳味噌があだこうだと考えるよりも前に顔の表情筋が反応してしまう。

奈美たち三人はしかめっ面のままそれぞれの顔を見合い、思わず笑ってしまった。

「今度はなによ。鬱陶しいなあ」

奈美は愚痴る。もちろん小声で決して本人には聞かれないように注意している。

遠山紀夫は橋田義人の胸ぐらを掴んで、大柄な体を駆使して筋力で強引に自分の眼前へと引き寄せていた。

「いや、いまさ、金がないんよ、ほんと。あとで、八塚に貸してもらえるか聞いてみるから、もうちょつと待っててくれよ」

必死に頼み込む橋田義人。話を聞いているとどうやら、賭の取り分でもめているらしい。

「どうせ自分が負けたって一円も払わないくせに」

奈美は彼のほうをちらりと見もせず小声で呟く。心の中だけで軽くため息をついた。

教室の自動ドアが開いた。

もう生徒全員揃っていて、あとは一時限目の担当教師を待つばかり

り。でもまだ予鈴も鳴っていないので先生が来るにはちょっと早い。見たことのない少年がそこに立っていた。

見たことのない、よその学校の制服。

この学校は詰め襟なのに対し、臍脂色のブレザーだ。ほっそりした長身で、髪はかなり癖のありそうな天然パーマを少し伸ばし気味にしている。少し垂れ気味の目と、ゆるんだ口元は、なんだか調子のよさそうな感じた。

彼は口を開いた。見ているみんなが顔から連想したとおりの声であり喋り方だった。

「おはようございます。あの、転校生なんですけど、二年A組はここでいいんですか」

彼は、まっさきに目があった遠山紀夫に微笑みながら話しかけた。「A組ってドアのところに大きく書いてあるだろうが。目か脳味噌のどっちかが不自由かお前は。それに、転校生なあ？ 転校生つてのはよ、先生が連れてくるもんじゃねえのか」

A組の生徒たちは口々に、「転校生だってよ」と騒がしい。

「先に教室みておいて、みんなとも顔なじみになっておこうと思つてね。ぼくの流儀だから。あ、紛らわしいいいかただね、何度も転校してるように思われちゃう。単にぼくの性格から、そうしところと思つたつてだけの話で、転校なんて今回初めてだよ。ずっと横浜に住んでいたんだ。横浜生まれの横浜育ちさ。いや、しかしまいったよ、いきなりさ、親の都合で転勤になっちゃったじゃん。しかも来てみたら、こんななんだか軍の基地みたいないかつい校舎でさあ。そっういや、聞いたけど昔は本当に基地だったんだつてね」

なんなんだこいつは、べらべらと、舌の回ること。高德多一はあきれてしまった。そもそも「転勤になったじゃん」なんて同意を求められても知るか、お前の事情など。みんなも同様で、たとえ口を開いても言葉も出ないといった様子だった。少し離れた席の多一は奈美と目が合い、互いの間抜け面にどちらからともなく吹き出してしまった。

「おいこら、先生のどこに来もせず勝手に教室に行くやつがあるか」
ブレザー少年のお喋りに気を取られているうちに、いつのまにか
ドアのところに担任の村上秀人先生が立っていた。先生のすぐ後ろ
に、これまた見かけない男子生徒がいた。詰め襟の学生服だが、ポ
ケットのデザインなどがこの学校指定のものと違っている。

男子生徒は、非常に背が高い。

村上先生も百八十センチと大きいのがそれを優に越えている。老け
た四角い顔には表情と呼べるものが片鱗すらなく、初めてみる者に
なんとなく漠然とした不安を抱かせるには十分だった。

「それじゃ、転校生を二人、紹介する」

やはりこの大男も転校生だったのである。そして、A組の生徒た
ちと同じ中二だったのだ。

二人、という点に生徒たちはみな驚いた。人数は七クラスほぼ均
等に割り振っているはずなのに、何故、このクラスに二人なのだろ
う。県の交流のためにたくさんの生徒が送り込まれてくるのならと
もなく、そういうわけでもなさそうだし。

軽い調子のブレザー少年、金本健次郎かねもとけんじろうはあらためて挨拶をした。

脱線した話がいつしか本線になっていて、それがまた脱線、と、ど
うでもいいお喋りが際限なく続くので、途中で先生がぶつたぎった。
もう一人の転校生、古柴座夢ふるしばぞむはくぐもった低い声で自分の名前を
いうくらいで、ほとんど喋らなかった。えらく対照的な二人だった。
それにしても、古柴座夢の体のなんとという大きさ。いままでクラ
スで一番背が高いのは、遠山紀夫の百七十五センチだった。それが
二番面になってしまいうけだから、これで少しはおとなしくなるだ
ろうか。多一はちょっと想像を楽しんでみた。

教室の一番後ろ、なにもなかった床に亀裂が入り、机と椅子がせ
り上がってくる。

二人はそれぞれの席に向かった。

古柴座夢はとにかく無表情で、なにを考えているのかどころか、
どこを見ているのかすらよく分からない。

何故か、秦野怜の席の前で足を止めた。彼女のことを見下ろしている。彼女はずっと、転校生になど興味ないといったふうに本を読んでいたが、すぐ目の前で見下ろされ、はじめて反応をした。

秦野怜は、古柴座夢の顔をちらりと見た。

それだけだった。

また彼女は、本へと視線を戻した。

気のせいかも知れないが、高德多一にはいまの一瞬、なにやら火花のぶつかり合いのようなものを感じた。

きつと気のせいだ。

古柴座夢は自分の席に座った。

立ち止まったのは、妙なやつ同士、仲間意識を感じたからかしら。高德多一は思った。妙なやつなどこのクラスに秦野怜だけで十分なのに。

そう、秦野怜は自他かどうかは分からないが少なくとも他人全てが認める変わり者である。誰ともほとんど口を利かない、必要最小限のことしかいわず動きしかない。いつも本ばかり読んでいる。

知的好奇心を満たすためではなく、死に向かいゆく人生の単なる暇つぶしだろうといわれている。

昼食の時間になると決まってどこかへ行ってしまう。どこに行っているのかは誰も知らない。食事しているところを誰も見たことがない。女子の話によると、この間の身体検査の時も逃げるように姿をくらましてしまったらしい。

午後の授業でお腹を鳴らしているのを誰も聞いたことがないわけだし、まさか昼食をとってないことはないだろう。昼休みにどこへ行っているのかあとをつきとめようと、柴本成明が尾行したことが何度かあるのだが、いつも見失ってしまう。

それほどまでに自分のことを頑なに知られたくないと思っているわりには、高木信二が「エイリアンの正体を暴いてやるぜ」とスカートをめぐりあげた時にはなんの抵抗もしなかった。冷たく一瞥をただけである。ただしそのあと高木信二は他の女子たちにぼこぼ

こにされてしまったわけだが。

シャッターの隙間から見える街並み。

青い空。

白い雲。

多一はあくびをした。

今日は転校生登場というイベントに少し心が忙しいけれど、それでもこうした天気を見ると、平凡な、悠々たる時の中の一日であることを疑わない。

4

昼食は学食派と弁当派に大別されるが、夫婦共働きの多い世相を反映してか学食派が圧倒的に多い。

高德多一も吉野奈美も少数たる弁当派であった。

多一の弁当は、肉や野菜がバランスよく入っていた。普段以上においしそうなおかずがぎゅちりと敷き詰められていた。

「うわ、凄い、おいしそう。作り方教えてもらいたいくらいだ」

弁当を自分でつくっている奈美が思わず声を上げた。

「うん、なんだろうな、今日は。えらい豪勢だ。よくわからんけど、ありがたいこっちゃ」

その言葉に、奈美の心は反応した。さきほどの北嶋秀子のいつていたことを思い出した。

「今日はなにか違う」

思っていたことを多一に口に出された。単なる偶然の一致かも知れないが、奈美は心臓の鼓動が少し速くなったのを感じていた。

やっぱり、高德も気づいているのかな。

ほら、なんだかそわそわして、きよろきよあたりを見回しているよ。

「わかった！」

「うわ！ 急に大きな声を出さないでよ！ びっくりしたあ……。牛乳こぼすところだった」

「あ、ごめん。それよか、あれ見ろよ」

多一の視線の先を奈美の視線が追っていく。
すぐに、奈美も気付いた。

秦野怜が自分の席で本を読んでいるのだ。

「いつもはこの時間に、こんなところじゃないのにね」

「弁当忘れたのかな」

「でも、なにも食べている様子がないよ」

秦野怜は本を読んでいる。

「弁当忘れたうえに、パンを買いそびれてしまったんだよ」

「学食行けばいいじゃない」

「じゃあきつと、弁当忘れて、財布も忘れたんだ」

「なんでさっきからそうお弁当忘れたことにしたがるのよ。今日は体調悪くてご飯どころじゃないのかも知れないじゃない」

「そもそもご飯食べているところ誰も見たことないからな。もしかしたら今日だけじゃなくて、いつもお昼食べてないのかもよ。だからあんなに小さいんだよ」

転校生は二人とも教室にはいなかった。クラスの誰かに案内されて学食にでも行ったのだろうか。

昼食をとりおわると、普段の多一ならば外へ運動に出してしまうのだが、今日は珍しくずっと机に向かっていた。サッカー部副キャプテンとして、修学旅行で三年生がいない間の練習予定表を作成しようと思ったのだ。

吉野奈美は他の生徒らに加わってお喋りを楽しんでいる。

多一は腕組をして、ペンを鼻の下にはさみ、練習内容を考えている。なかなか良い考えが閃かない。勉強が嫌いだから、ということとは関係ないとは思うのだが、どうも紙を目の前にとすると、思考がうまく働かない。閃かないのはそれだけが原因ではないようだ、斜め後ろの席にいる秦野怜のことが気になってしかたがないのだ。なんで今日に限って、昼休みにずっと教室にいるんだろう。それと、あの大きな転校生との視線のぶつけ合い。

しかし、彼女のやっていることは、授業以外の他の時間と全く変わらない。つまり、ただ本を読んでいるだけ。他にやることのないのだろうか。おれみたいになんか趣味を持っていないのだろうか。と、多一は他人事ながら余計な心配をしてしまう。まあ、彼女からいわせれば、大勢でボールを追っかけ回して蹴飛ばし合って転がり合い抱き合ってなにが楽しいのだ、というところなのだろうか。

予鈴が鳴った。五時限目開始五分前だ。

5

五時限目の授業は英語。地下二階にある視聴覚室で行う。予鈴にいったん教室に戻ってきた生徒たちは、教科書とノート、筆記用具を用意し、それぞれに移動を開始した。

「ねえ、ぼくのは？　ぼくの教科書はどうすんの？」

金本健次郎が誰にともなく大きな声で訴えている。

「隣の見せて貰うのが転校生のパターンだろ、アホ。ていうか、午前の授業ずっとそうだったろうが、学べよこの馬鹿野郎」

教室で金本健次郎の隣の席になった安本栄助は、馬鹿だの阿呆だのといいながらもニコニコと笑みを崩さない。育ちのせいで口は悪いが性格は善良かつ友好的で、金本健次郎ともすっかり打ち解けていた。

地下二階への移動はいくつかの方法がある。前述した通り、基地を改良した校舎である。普通の学校よりもふた周りほど大きな校舎が、キャンパス内に何棟も点在しており、中等部と高等部で利用している。地階は非常に広大で、全ての校舎と繋がっている。

中等部の校舎から視聴覚室に行くには、校門側にあるエレベーターか階段を利用するのが一番早く、他の方法だと遠回りになってしまう。みんな好きなルートを回り地下へと足を運んでいく。

地上階と違い、地下はそれほど校舎として利用するための改装をしていない。窓の無いことも手伝って、がらりとムードが変わる。何度足を運んでも慣れることのない独特の緊迫感がある。場数をこ

なしている生徒たちですらそんな様子である。転校生の金本健次郎などは、まるで戦時中かのようなこの雰囲気に興奮し、やれ凄いの格好いいのと一人でいつまでも喋っている。同じ転校生でも、古柴座夢は相変わらずの無表情。どこに連れていかれようと全然関心がなさそうだ。偏見かも知れないが、軍人にでもなったら黙々と平然と人を殺しそう。

公にされていないものの、さらに下の階があるという噂がある。どこかに隠し通路、隠し階段の類があるらしい。ずっと下の階は、核戦争時には要人を匿うシェルターの役割もするとのこと。しかし、生徒立ち入り禁止とされている部屋はいくつかあるものの、通路はどこへでも自由に行き来可能だし、どんなに探検してみてもどこにもそんな階段は見つからない。誰かの作り出した単なるデマ話だろう。

しかし、デマも広まれば一人歩きする。この学校の七不思議怪談のひとつに、階段を降りたきり二度と戻ってこなかった男子生徒の話がある。男子生徒は幽霊となり、永遠に地下を徘徊し続けているのだ。学校で肝試しを行う際は、この地下室を利用し、その会談話を材料に参加者を怖がらせるのが恒例化している。

地下二階の視聴覚室に生徒全員が集まった。それぞれ適当な場所に席をとり、ある者はお喋りし、ある者は机に伏せて仮眠をとり、秦野怜は相変わらず本を読み、金本健次郎は転校初日だというのにもうクラスに溶け込んで大きな声ではしゃいでいる。

高德多一はサッカーの試合のこと、練習のことを考えている。

吉野奈美は授業の予習をしている。

遠山紀夫は山田敬たちと雑談をしている。

桐野聡太は下を向いたまま、誰を見ようともしない。

北嶋秀子は田子里美と男性アイドルの話をしている。

本来、特に記すべきものでもない、日常的な光景だ。

しかし、これが彼らの人生最後の日常となったのである。

彼らの退屈だが愛すべき平凡な日々を永遠に引き裂いたものの、そ

れは突然の爆音から始まった。

立て続く爆音と同時に、ぐらぐらと地球そのものが激しく揺れた。
混乱。

女子の悲鳴。

一瞬にして全ての灯りが闇の中へと溶け失せ、肉体と意識とが区別もつかないまま漆黒の闇の中に自己の全てが放り込まれた。

彼らは視界のきかないなにがなんだか分からない状況のまま、ただ悲鳴をあげることしか出来なかった。

悲鳴が悲鳴をかき消し、悲鳴が悲鳴を呼ぶ。その都度、自己の脳味噌の意識の支配下と無意識の支配下とか揺さぶられ、かき乱され、原初の状態、混沌の状態へと堕ちていく。

「うるせえ、黙れ」

高德多一の鼓膜がびりびりと震えた。すぐ右横で、遠山紀夫の絶叫ともいえる怒鳴り声。それがみんなの心を現実へと引き戻した。騒々しかったのが、一瞬にして、不気味なまでに静かになった。すでに揺れはおさまっていた。

「へたに動くと、押しつぶされて死んじまうぞ。落ち着け、どうせ地震が起きて停電しただけだ。古い基地だから、その時になにかが爆発したんだ」

と、遠山紀夫は続けた。

不良のくせにこういう時にリーダーシップを発揮したがるタイプだ。

だがその効果は抜群で、みな不安な心理に変わりはないものの、落ち着きを取り戻してきていた。

高德多一は遠山紀夫にしみじみと感謝した。彼の根底にある良心が、こういう言動に走らせたのだと信じたかった。

現実を考えてみても、こういう場を仕切ってくれる者がいるのは有り難かった。本来は学級委員の役目かも知れないが、あの桐野聡太では……

遠山紀夫の命令により、点呼がとられ、男子女子に別れ、行方不

明にならないように手をつなぎ合った。そして先頭となった遠山紀夫自身が手探りでドアの場所を探りあてていく。

彼に率いられて、こんなことをする羽目になるとは、誰しも想像もしなかっただろう。

停電で動力はすっかり失われていたようだが、それ故かドアは簡単に開いた。

「えらい状態だな、こりゃ」

廊下も真っ暗でなにも見えないが、手探りですぐにそうと分かる。壁や天井が崩落し、通路に小高い山を築いていたのだ。しかしそれがために、進む方向に迷うことはなかった。瓦礫の山が分かれ道を完全に塞いでおり、まるで指示されるがごとく歩いていくしかなかった。

「行き止まりになってて身動きとれなかったらどうしよう」

近藤啓治が頼りなさそうな声をあげた。

「縁起でもないこというんじゃねえよ」

遠山紀夫の怒鳴り声が狭い通路を反響した。

彼の手が冷たい鉄の壁に触れた。

「どこだろう」

遠山紀夫がいう。

「あそこじゃないか、あの巨大エレベーター」

高德多一も同じく鉄の壁に触れた。彼は歩いてきた方向の予想と、頭の中にある地下の地図とを照らし合わせ、そう述べたのだ。

視聴覚質からは少し遠いが、エレベーターがある。外から、地下一階、二階、と戦車を運ぶためのもので、非常に大きい。人間なら五十人くらい入ってなお余裕があるだろう。生徒たちは単純に「巨大エレベーター」と呼んでいた。

「このへん確か階段ないだろ。来た道戻ってもどこも塞がってしまっているし、このエレベーターが動かなかったらやばいぞ。独立電源ならいいんだけど」

「高德、お前不安になるようなこというんじゃねえよ。近藤もお前

も臆病なのはいいけど、わざわざ口に出すんじゃない」

高徳多一の記憶によれば、確かこのエレベーターの制御盤は二カ所。扉の右横、それと扉があまりに大きいので扉自体の真ん中にも、カバーを開けるとスイッチがあつたはずだ。

みんなでスイッチらしき手がかりを探した。

遠山紀夫が発見した。

ボタンは一つしかなかった。通常、上行きと下行きのボタンがあるが、ここは地下二階で一番深いため、上向きしかないのである。

ボタンを押してみると、それに反応し、ボタンが光った。光ったといつても、それでなにが照らされるわけでもないごく微量な灯りだが、それでもようやく漆黒の闇の中に現れた光源に、みんなの心は少しだけ安堵した。

なにか巨大な装置が動き出す音。

静まり返った中、それは不気味に反響していた。

振動。

ごんごと、古くさい、しかし迫力のある駆動音。

音がだんだん大きくなっていく。

とまった。

彼らは沈黙した。

やがて、縦筋のような光が現れ、その光は広がっていった。

エレベーターの扉が左右に開いていく。

神々しい恵みの光だ。

彼らはお互いの顔と再会した。

「おう、久しぶり」

「懐かしいな、何分ぶりだよ」

橋田義人らか冗談をいつて笑っている。

みなも同様に、自然と笑みがこぼれた。

漆黒の闇がもたらすあまりの不安に、数分の出来事が無限の時間となっていたのだ。

みんななだれ込むように、競うように乗り込んだ。

クラス全体移動の際にたまに利用する、見慣れたエレベーターの中。ようやく自分たちの場所へと戻ってきたのだ。

昨日までの生徒人数二十九人＋転校生二人。全員が乗り込んでも、まだまだ余裕たっぷりだ。

「よし。じゃあ、一階のボタンを押すぞ」

「いちいちいつてねえで、とつとと押せや」

操作盤の一番近くにいた橋田義人は迷わず「1」を押した。内部側の操作盤も単純なボタン構成で、「B2」「B1」「1」「開」

「閉」「固定」「非常」これだけしかなかった。

扉がゆつくりと、重く機械的な音をたて閉まっていく。

完全に閉まった。

そして、彼らを載せた巨大な箱は動きだした。

浮遊感。

小さなモニターに「B2」とだけ表示されていたが、その数字が変化した。

「B3」

「B4」

「B5」

「B6」

「B7」

「B8」

「おい……」

「B9」

！

「橋田、てめえなにやってんだよ」

「知らねえよ。ていうか、こんなボタンないだろ。おれ知らねえよ」

「B16」

「B17」

「B18」

あんなに明るくなっていたみんなの表情が、予期せぬ事態にまた

緊迫、そして不安気なものに戻ってしまっていた。

誰も言葉が出てこない。

静寂の中、エレベーターのごんごんという音だけが響いた。

「ゲームが始まった」

気のせいだったのかも知れない。

だが高德多一には、すぐ後ろにいる秦野怜が確かにそう呟いた気がした。

第二章 ファーストミッション

1

ようやく音がとまった。

「ごんごんという規則的な機械の呻き声が、まだ彼らの頭蓋骨の内側で反響していた。

不安から来る恐れと、まるで無重力状態であるかのような容赦のない高速落下とに、すっかり心身共に感覚が麻痺してしまっていた。二本の足で立てないほどではないが、自らの肉体に、重力の枷という大地を踏みしめている実感が戻ってくるまでにはしばらくの時間を要した。

三十一人の生徒たちを載せた巨大な鉄の箱の中は、しんと静まり返っていた。互いの呼吸どころか心臓の音、血液の流れる音、肺の収縮する音まで聞こえてきそうなほど、静けさと、緊迫した雰囲気 が充滿していた。

これからいったいなにが起こる。

我々はいったいどこにいる。

この大きな扉の向こうにはなにがあるのだ。

ライトは眩しいまでに彼らの姿を照らしている。しかし彼らの脳味噌の意識の支配領域と無意識の支配領域のどちらにも深い霧が立ちこめて、それは一向に晴れる兆しを見せなかった。

「なんだよこれは」

遠山紀夫の呟きは、次いでやり場のない怒気を含んだ叫びへと膨れ上がった。

「なんだよ、この数字は。地下四十九階って、どこだよ。地球のどこだよ。表示が狂ってるんじゃないのか」

確かに操作盤の小さな画面には、「B49」と表示されていた。誤りでなければ、ここは地下四十九階ということになる。

この階に到着して何分、いや、何十秒経ったのだろうか。再び低

く呻るような機械音、全身がむず痒くなりそんな細かな振動、そしてついにエレベーターの扉が開きはじめたのである。

縦に裂けた闇が開いていく。

気圧や温度の差が軽い風を巻き起こした。暗闇の中から、咽せるようなカビの匂いが風に乗って吹き込んできた。

不意に灯りがともり、一瞬にして暗闇を打ち砕いた。

そこはこの、戦車を昇降させる軍用エレベーターと同じで高さ七メートルはありそうな、非常に天井の高い部屋であった。

兵器の格納庫というよりは、簡易的な整備室のようだ。戦車二、三台ほどなら楽に入れそうだし、動き回れそうだが、せいぜいその程度だ。エレベーターのある側を抜かした三方向に人間の出入りする大きさの扉がある。床には様々な計器類、工具が散乱している。壁にも無数の計器が埋め込まれているが、ほとんどガラスが割れて針も歪んでしまっている。

壁際には古い型の大型情報端末があった。横に長い机の上に、十五インチモニター、キーボード。脇にはタワー型のコンピュータがあり、中央コンピュータの情報を表示するだけでなく、ネットワークを必要としないパーソナルコンピュータも可能なタイプだ。壁に二百インチほどの巨大なモニターが埋め込まれている。十五インチモニターの内容を周囲にも見せることが出来る。その席には誰もついていない。長いこと使われていなかったらしく、座席は厚い埃に覆われていた。

橋田義人はエレベーターの操作ボタンを押したのが自分であるという責任を感じたのか、操作盤のボタンを色々と押してみる。しかし反応は皆無だった。

突然、エレベーター内の灯りが消えた。さきほど点灯したばかりの、部屋からの灯りのおかげで暗闇になってしまふことはなかったが、不意に灯りが失われたという事実が、条件反射的に本能から恐怖の感情を引き出させ、そしてみな不安げな顔を橋田義人へと向けた。

「なんでおれのこと見るんだよ。おれじゃねえぞ、おれ、知らねえぞ」

灯りのある側に行きたがるのは昆虫の本能だけではないようで、一人がエレベーターを出て恐る恐る部屋へ入ると、続いて一人、また一人と移動していった。

橋田義人は一人頑張ってエレベーターのボタンを操作していたが、まったく反応のないことについて諦め、最後にエレベーターを出た。念のため、エレベーターの「固定」ボタンを押してロックしておくことは忘れない。

鳥羽恵は部屋の扉まで行き、前に立って見たが自動ドアではないようで、全く反応がない。横に開閉ボタンのようなものがあり、押してみたが、それでも扉は動かなかった。

「電気が来てないから開かないのかな」

「おい、まさかこの部屋を出て探険しようってつもりじゃないだろうな。ここのエレベーターは地上に繋がっているんだぜ、絶対ここにいたほうがいいって」

近藤啓治は必死にここで待つことの利を唱えた。確かに一理あるのかも知れないが、表情がぎこちなく、足も遠目に分かるほど震えており、どうにもあまり説得力がなかった。単にドアの向こうに存在する未知のなにかを怖がっているだけだ、と。

「そんなこといっても、エレベーター、全く動かないじゃないの。進めば別のエレベーターとか、最悪でも階段くらいあるに決まっているよ」

「うるせえな。ここにいたほうがいいよな、高德」

近藤啓治の声に、クラス全員の視線が多一に集中した。

「おれに相づち求められても困るよ。……おれには分からない。確かに、進めばエレベーターや階段があるかも知れないし。でも地下二階での事故を考えれば、ここで待っていれば助けが降りてくるかも知れないし」

なんだか全員に、自分の決断力の無さ、独創的な発想力の無さを

責められている気がして、少し不快な気持ちを味わった。なんだよ、こんな時にそんなことをいわれたら、誰だってこうなるだろ。

「進むもなにも、そもそも扉が開かねえじゃねえかよ高德。馬鹿野郎」

「おれに食ってかかれても知らないって」

「うるせえな、ここが一番安全なんだよ。行きてえやつは行って死んじまえばいいんだよ。高德、お前も死んじまえよ」

高德多一と近藤啓治は普段はとても仲が良い。だから多一は親友の態度にちよつと驚いていた。確かに臆病な面を多分に持つてはいたが、緊迫した状態というものが人をこんなにも変えてしまうなんて。

「なあに、あの近藤の態度。あつたまくる。なんか、無性にこの部屋出て行きたくなった。……ね、奈美、情報処理の成績ダントツのトップでしょ。ちよつとこの機械見てみなよ。地図表示したり、ドア開けたり、いろいろと出来るんじゃない」

北嶋秀子は吉野奈美の肩を叩きながら、もう片方の手で壁際の大形情報端末を指差した。「ダントツトップって、頭痛が痛いじゃないんだから」などと普段の奈美なら面白みのない堅苦しい軽口を返すところだが、今は当然そんな気分ではない。奈美は渋々とだが、埃まみれの端末装置に触れてみるものの、すぐに諦めたように首を横に振った。

北嶋秀子は吉野奈美の肩を叩きながら、もう片方の手で壁際の大形情報端末を指差した。奈美は渋々とだが、埃まみれの端末装置に触れてみるものの、すぐに諦めたように首を横に振った。

「駄目だ、タジちゃん。機械は古いけど、実習で触ったことのあるのと似てるから操作出来ると思うんだけど、電源をどうやって入れればいいのか分かんない。これかなと思うスイッチはあるんだけど反応ないし、電気が来てないのかも知れない」

「電気、来てるじゃない。こんなに明るいんだから」

「そうだけど、非常用電源なんかで電灯にだけ供給されているのか

も知れないし。そんなの、ぼくだって分かんないよ。情報処理なんて、要はキーの叩き方なんであって、電源がどうか難しいこと知らないよ」

などと会話しながらも、奈美は端末の電源スイッチを探していたが、結局どれを押してみても電源は入らなかった。

「やつぱり駄目だ」

諦めた。小さくため息。

みんなの興味が奈美の作業に向けられていたが、駄目と聞くとみんな落胆した。

今度は金本健次郎が端末を触りはじめる。

「無駄だよ」と、多一。「あいつは謙遜してああいつてたけど、機械知識全般に詳しいんだから、女のくせに」

「ぼくだって詳しいさ。塾で情報処理も習ってたんだから」

金本健次郎はしばらく機械をいじっていたが、お手上げの万歳をするまで三分とかからなかった。

「こんな古い端末、塾で触ってない！」

「よかったな、触ってなくて」

「ちよつと、どういう意味？」

などと多一と転校生とが漫才をしていると、突然、低く大きな機械の音。音のほうを振り返ると、エレベーターの巨大な扉が閉まりはじめていた。

「ロツクしといたのに！」

橋田義人は走った。

「閉まるな！ おれを乗せてから閉まれ！」

近藤啓治も走った。

扉の閉まる速度はそれほど速いものではないが、なにしろ広大な部屋の端から端だ。しかし、橋田義人がなんとかぎりぎり間に合い、閉まる直前に操作盤の「開」ボタンを押した。それなのに扉はそのまま重い音を立て、閉じてしまった。

「間に合っただろうがよ。なんで閉じるんだよ」

「開」を連打。その他のボタンも押してみるが、閉じた扉が開く様子は全くなかった。

「おい、開けよ。てめえ、閉まるんじゃないやねえよ、開けよ、ふざけんなよ」

近藤啓治も一緒になってボタンを叩いた。

みんな、集まっていた。不安げに、扉を見上げていた。振動を感じた。

ごんごんと鳴る低い駆動音。

操作盤の画面に表示されている数字が変化していく。

「B 4 8」

「B 4 7」

「B 4 6」

みな言葉も出ず、ただ呆然とした表情でその変化を見ていることしか出来なかった。

冷静に考えてみるまでもない。自分たちは想像も出来ないほどの地下深くにおいてきぼりをくらってしまったのである。孤島に閉じこめられてしまったような絶望感。いや、それ以上の恐怖があった。もしこのまま電灯が消えてしまったら……。もし酸素の供給が停止してしまったら……。もし地震などによる壁の亀裂があり、浸水してきたら……。

「ハッシー、てめえ閉まっちゃったじゃないか。エレベーター、上に行っちゃったじゃないやねえかよ。ふざけんじゃないやねえぞ。そもそも、こんな地下深くに連れてきたのだって、お前じゃないか」

「おれのせいだったのかよ、近藤。冗談じゃないぞ。おれはただ近くにいたからボタン押したただけだろ。他の奴が押してたら、ちゃんと一階に着いてたともいうのかよ。いまだって、おれはちゃんとロック押してたんだ。だからいまのいままで開いてたじゃないか。

このエレベーターが全部おかしいんだよ。おれはなんにも悪くねえ」

「いや、お前が変な操作をしたに違いない」

「おれは間違った操作なんてしてねえよ。つつか無いだろ、ボタン

無いだろ。一階、地下一階、地下二階、開く、閉じる、これでなにを間違えば地下四十九階に来るんだよ、出来るってんならお前やつてみせろや。それにな、おれは別にエレベーター係じゃねえぞ、最初に一番近いとこいたから押したただけだ。エレベーターが不良品かどうかなんて、そんなこと知らねえよ」

「おい、喧嘩はやめろよ二人とも。近藤、お前のいつてること無茶苦茶だぞ。橋田のほうが正しいよ」

多一は二人の間に割って入った。

「高德、お前おれの親友じゃなかったのかよ。なにハッシーの味方してんだよ」

近藤啓治は激しい形相で、多一に掴み掛かってきた。

「親友だと思ってるよ。だからほっとけないんだよ。怖いのが分かるけど、お前ちよっとおかしくなっちゃってるぞ。落ち着けよ」

「おれは別に怖くなんかねえ」

「馬鹿。みんな怖いんだよ、お前だけじゃないんだよ。だから落ち着けよ」

「高德、おれたちこの場所に、ずっとこのままってことないかなあ」
多一になだめられた近藤啓治は、急に弱気な表情になった。

「大丈夫。地下二階での凄い爆発音や、崩れた壁、それにあの状況からこのエレベーターに乗るしかなかったこと、先生たちも気づいてくれるはずだよ。きっと、いまごろ自衛隊だか警察だかに連絡しているだろ。もうじき助けがくるよ」

「そうだよな。もうじき助けが来るよな」

近藤啓治は涙ぐんでしきりに繰り返していた。

「みんな、ちよっとあれ見て」

北嶋秀子の叫び声が広い部屋の中を反響した。

先ほどまで吉野奈美や金本健次郎が格闘していた情報端末。その巨大なモニターに変化が起きていた。

「文字が……」

画面全体は相変わらず黒いままだったが、中央に緑色のゴシック

体でメッセージが表示されていた。

それは、こう書いてあった。

地下四十九階 トレーニングフロアにて、訓練に参加する者へ

その文字の下には、トレーニングプログラムの参加者として、クラス全員の名前が小さくローマ字で書かれていた。

「おい、北嶋、吉野、どこに電源があったんだ」

遠山紀夫が走り寄って来る。子分格の島田敏たちも続く。

「知らない。ぼくもタジちゃんもどこも触っちゃいないんだ。なんにもしていないのに、急にこんな文字が出てきたんだよ。きっと電源ずつと入ってたんだ」

みんな、駆け寄ってきた。

書いてあるメッセージの不可解さに驚き、そして自分の名前のあることの不可解さにさらに驚いた。

「訓練だつてよ」

「なんでおれたちの名前が書いてあんだよ」

「避難訓練みたいに、いざって時のための練習なんじゃないのか」

「なんのだよ」

「知らねえよ」

文字が全て消え、また真っ暗な画面に戻った。

数秒後、また別の文字が表示された。

【トレーニング内容概略】

出題されるミッションを攻略すること

脱出ポイントを発見し、このフロアから逃れること

【注意】

制限時間は無限だが、各ミッションには制限時間が設けられている
ミッションを攻略出来なかった者は死亡者として登録から抹消さ

れる

抹消されたものは回収され地上へと送られる

「意味がわかんねえ」

「サバイバルゲームみたいなもんか」

「おれたちの名前が出ているんだから、それをやれってことか」

「なんだよ、ミッションて」

「なにをやれってんだよ」

また画面が切り替わった。

MISSION

ミッション。

次にいったいなにが表示されるのか。

どんな運命が自分らを待ち構えているのか。

襲い来る不安に、全員が唾を飲み、画面から目をそらすことが出来なかった。

そして、次の文字が表示された。

SDルームへ移動すること

制限時間 十分

多一は安堵の溜め息をついた。多一だけでなく、大半がそうだった。溜め息のハーモニに、思わずみんな笑い合った。

「ようするに軍隊のトレーニングプログラムだろ。だからてっきり、特殊技能のいるような難しい問題が出るかと思ったらさ、他の部屋に移動すりゃいいだけか。心配して損したよ。やっぱり、避難訓練とかなんとか、そういう類なんだろうな。まったく、転校初日から、馬鹿馬鹿しいイベントに巻き込まれちゃったよ」

金本健次郎は不安だった心をみすかされないよう、精一杯強がつ

てみせた。

「こんなのやる必要ねえよ」

と近藤啓治。

「ここにいりゃ、助けが来るんだから」

「そうだよ。なんだか凄く馬鹿馬鹿しく思えてきたよ、いままで大騒ぎしてたのがさ。ここにいりゃあいんだよ。なんだよSDルームなんて知るかよ」

安本栄助が吐き捨てるようにいった。

「移動しといて損はないんじゃないか。もしかしたら、そうしないと出口に辿り着けないのかも知れないし」

犬田高仁が呟くようにいう。

「でも、このドア開かないし。それに、SDルームってどこだよ」

「この情報端末で検索してみたら」

転校生以外の全員がその声にびっくりした。なんと、秦野怜が口を開いたのである。自ら口を開いてなにかを提案することなど決してないはずの彼女が。

彼女は、吉野奈美の顔に視線を向けていた。

奈美はその視線に気づいたが、黙っていた。黙っていたが、いつこうにそれることのない秦野怜の視線に、奈美の忍耐は数秒と保たず臨界点に達して。

「……ぼくに、やれっていうの？」

「情報処理の成績が一番優秀なのだから」

二人はしばらく見つめ合った。

吉野奈美はあえて無言でいたが、結局、ぶつけられる秦野怜の視線と、この沈黙とに耐えられず、根を上げた。溜め息をついた。

「分かりましたよ。……端末の電源は入っていたわけだし、ま、ここでもしないでもいいよね。やってみるよ」

奈美は椅子の埃を払うと、席に着いた。

「ついでにこのドアも開けてくれよ」

「それは多分、操作盤の回路のショートだと思う」

また、秦野怜が口を開いた。

「じゃ、接触を直さないと駄目ってことか」

高德多一は爪を食い込ませるように操作盤のカバーを掴み、外した。中の回路や配線がむき出しになる。感電しないよう、ポケットに入っていた鉛筆を取り出して、つつき始めた。

と、ふと疑問に思った。

なんであいつ、回線のショートが原因とか、そんなことが分かったんだろう。

タタタ…と、リズムカルな音が聞こえてくる。

奈美の細い指がしなやかに動き、情報端末のキーを叩いている。画面はテキストだけのシンプルなもの。コンピュータの起源後、それほど時期を隔てずに誕生した、CUIと呼ばれているものだ。データベースアプリのコマンドは基本規格に従っているものだったので、操作自体にはあまり困ることはなかった。しかしアクセス権限の問題から、なかなか必要と思われるデータブロックへ入り込むことが出来ない。なにを入力してもブロックされエラーが表示される。

十分間という制限時間のリミットが刻々と迫っている。

それが過ぎたからといって、どうなるとも思っていない。しかし、ここを抜け出すための手段として、指示されるままにミッションとやらをクリアしようと決めたわけである。容赦なく時間が減っていくことに、段々と腹が立ってきた。自分の情報処理の技能を否定されている気がして。

「奈美」

北嶋秀子が声をかけた。

「なによ」

きつい口調に言葉を発した本人のほうがびっくりした。慌てて笑顔をつくろうとしたが、表情筋の柔軟性がない、なんともぎくしゃくとした顔になってしまった。

「ごめん。……ばく、ちょっとイライラしちゃって。どうしたの、

タジちゃん」

「気にしてないよ。……足下の、それ見てよ」

奈美は自分の足下を見た。ヘルメットが転がっている。こまごまとした部品が無数に取り付けられた、非常に無骨な形をしている。

「もしかして……思走機？」

「多分、そうだと思う」

思走とは、単純に言えば脳波によるコンピュータコントロールだ。操作命令を送ることがメインだが、反対にサイコフィードバックシステムによって、ある程度はコンピュータの情報を脳で受け取って理解することも出来る。一般に命令の送信はやさしい。コンピュータが柔軟に信号を処理してくれるからだ。受信は人間が解釈しなければならぬため、非常に技術のいる作業である。この「思走を行うための脳波の変換及び入出力のための技術仕様」に従ったプロトコルを実装した装置を、俗に思走機と呼ぶのである。奈美たちが情報処理実習で見慣れているのはゴーグルのようなコンパクトなものだ。このヘルメットのようなものが思走機であるなら、おそらく技術が生まれたばかりの初期の頃のものだろう。

思走の成績はセンドとレシーブの能力の合計で決まる。センドは前述の理由により生徒らの成績にあまり大差ないのだが、レシーブはかなり個人差がある。どちらもダントツなのが吉野奈美である。奈美は体育と音楽、美術を抜かせばどの成績も優秀だったが、なかでも群を抜いて良いのが情報処理だ。逆に情報処理の成績ワーストトップは秦野怜だ。思走機を使う授業になると、ゴーグル装着を嫌がって逃げてしまうのだから話にならない。大幅減点である。しかしそれ以外の情報処理の授業は非常に真面目で熱心な態度で受けていた。だから、キータイプによる情報検索は秦野怜が一番成績が良い。このあたりの価値観も、秦野怜がみんなに変人と思われる要素の一つである。

奈美は転がっている無骨な形のヘルメットを拾った。とてもカビ臭く、ちよつとためらいながらも軽く埃を払い、頭にかぶった。

脳味噌の神経細胞の一つ一つがWANにコネクしていく時の、いつもの感覚。全身がぶるぶると震える。

やはりこれは思走機に間違いない。

脳波を 波に変える微電流。

トリップ。

深く、沈んでいく。

いや。

違う。

なんだろう、これは。

むき出しの感情。

触手のように、天に手を伸ばし、

ぼくの肉体を、

精神をからめとろうとしている。

むき出しの感情。

無数の、

怒り、

悲しみ、

驚き、

絶望、

恐怖、

闇……

こないで。

ぼくには、なんにも出来ないよ。してあげられないよ。

そんなこといわれても、なんにも出来ないんだって。

駄目だよ。

こないで。

来るな！

波誘導の際に、自動的に心の中にある種の障壁が作られるはず。初期の思走機から実装されている規格のはずだ。いや、実際、障壁は出来ていた。WAN越しに入り込んできた無数の情報が雪崩のよ

うに一瞬にして障壁を砕き、丸裸となった奈美の精神を襲ったのである。

それは様々な意識の集合であったが、共通していえることは、どれもが助けをもとめていた。

奈美の心の障壁をばりばりと剥がしながらも、助けてくれと懇願していたのである。

「ごめん、ぼくにはなんにも出来ないから！」

奈美は浮上した。

呼吸が荒い。肩が大きく上下している。

頬を涙がつたっていた。

「奈美！」

浮上してなお朦朧としている奈美の精神を、田子里美の甲高い叫び声が完全に現実へと引き上げた。

「なんだ、田子ちゃんか」

田子里美と北嶋秀子が並んで不安そうな視線を奈美に向けていた。「なんだじゃないよ。大丈夫？ どうしたの？ とっても変だったよ」

「この思走機、デフォルト設定のままじゃないのかな。誰か用にチューニングされているのかな。初期値デフォルトになっていること、確認したつもりだったんだけどな。なんだか凄く変な意思がどつと流れてきて……。でも、もう大丈夫だから。心配してくれてありがとう、田子ちゃん、タジちゃん」

奈美は再び思走に意識を集中させる。

さきほどの無数の意識から逃れるために急浮上したが、そもそも潜水とは、波効果により機械との脳波同調力を高めるためのものであり、もともと同調率の高い奈美にはあまり必要のないものだった。

ヘルメットをすっぽりかぶってしまうと、顔はもう口しか見えな。しかし無数にあるセンサーやカメラなどにより、かぶった本人はヘルメットをかぶっていることを忘れてしまうほどに視界は良好

である。その実際の視界の上に、コンピュータによる文字情報が重なっている。これがまず、物理層と呼ばれる。さらに、もうひとつ別の感覚が重なっている。これが思念層。完全に重なっているもののまったく矛盾はせず両立している。思念層の感覚は人により異なる。色であったり、音であったり、触覚であったり、だがすべてそれはコンピュータの信号を脳味噌が捉えた結果である。当然本人にしか分からない。

思念をセンドせず、思走機の中でループバックさせ、自分の思念を自分で見る。思走の授業はここからはじまる。

奇妙な感覚。

だけどいつも通りの感覚。

奈美は複数の検索プログラムを見つけ、一斉にスタートさせた。

思走機ならではの並列操作、これも奈美の得意とするところだ。

画面上に、次々と検索結果が出力される。

ほとんどが権限エラー。だが思走機の特徴を生かして並列に矢継ぎ早に検索条件を埋めていった結果、一つだけ情報を引き出すことが出来た。とはいえ、結局ネットワークからの情報ではなく、この端末がローカルデータとして自己に保存していた情報、しかもキャッシュされていただけのすこし古い情報だった。

画面に映し出された部屋の配置図に、生徒たちから歓声があがる。

奈美は窮屈なヘルメットをぬいだ。

ほんの数分の作業だったというのに、額には汗がびっしょりだ。ふわふわとしていた髪の毛も、蒸れて頭に張り付いてしまっている。画面に表示されているのは、この部屋と、この周囲の何部屋かだけ。だがSDルームとの位置関係は分かった。

「ごめんね、一般権限で検索出来る情報が、これしかなかった。時間かければ、もっと土台から攻撃していくんだけど、時間なかったから」

「場所が分かったんだから、それで十分だ。おい高德、そっちはどうだ」

遠山が叫ぶ。すぐに高德多一から反応の声。

「すぐそばなのに、でけえ声で叫ぶな。うるさい」

高德多一と金本健次郎は共同で作業をしていた。

多一は操作盤のカバーを閉めた。

金本健次郎が微笑み、手を突き出して親指を立てた。

多一がボタンを押すと、小さな音がし、瞬時にしてドアが開いた。

「秦野がいった通りだった。単純に線が焼け切れていただけだった。繋ぎ直したら直ったよ」

「よし、それじゃSDLルームとやらに行くぞ」

遠山紀夫は一番に部屋を飛び出した。

「くだらねえ、おれは行かねえぞ」

近藤啓治が震えるような怒声を放った。

「このエレベーターの前で助けを待つんだ。……攻略出来ず死亡、

つまりゲームオーバーだ。そして地上に強制送還だ。こっちのがよっぽどいいじゃねえか」

「そうだ、おれも残るぞ」

「おれもだ」

安本栄助、滝沢昇の二人が近藤啓治の意見に賛同し、残ることを主張した。

「でも、このままで助けがくる保証もないわ」

秦野怜が表情も変えず、ぼそぼそとした声で呟く。普段の態度が態度だけに、このような発言をした時のインパクトは強烈なものがあつた。しかし、三人はもう頑なになっており、彼女のいうことに貸す耳はないようだった。

「もう制限時間まで二分ほどしかないぞ」

「だから、とっとと行けよ。別にお前らに残れとはいってないだろ」

「それじゃあ、おれたちは行くからな。もしも、階段を見つけたら、教えに戻ってくる。だからお前らも助けがきたり、エレベーターが動くようになったら、教えにきてくれよな」

「分かったよ」

遠山紀夫は、近藤啓治の肩を叩いた。

こうして、三人を残した全員が、通路へと出て、移動を開始した。目的のSDルームまで、歩いて三十秒とかからなかった。今度は回線がショートしてドアが開かないようなことはなく、前に立つだけで簡単に開いた。拍子抜けするほどの近さではあったが、ドアにSDルームと書かれていたわけではないので、吉野奈美が場所探し出してくれなかったらこの部屋とは気づかなかったに違いない。

全員、部屋の中に入り終えた。

みんな、なんともいえない虚しさを感じていた。自分たちは、こんなところでいったいなにをやっているのだらうと。

部屋は自分たちの教室とさほど変わらない広さ。ただ、天井がとても高い。薄暗く、あいかわらずカビの匂いが充満している。がらんとした部屋だった。

床の中央には、大きな四角が描かれている。まるでレスリングの舞台のようだ。

部屋の端には、先ほどの部屋と同じように、情報端末のようなものがあり、巨大な画面があった。

不意に、画面がついた。

MISSION

全員、緊張して画面を見つめた。

数秒後、表示は消え、次の文字が浮かび上がった。

二手に分かれて戦い、勝者となること

制限時間 二十分

中央の床に無数の小さな穴があき、なにかがせりあがってきた。それは凶器であった。

ナイフ、ハンマー、日本刀、槍、手斧など、格闘用の武器であつ

た。

「ふざけんじゃねえよ」

全員の心が、激しい怒気に包まれた。

「これで殺しあえつてのかよ」

「馬鹿にすんな」

「いや、殺し合えとは書かれていないぞ。とにかく勝って、相手に参ったといわせればいいんじゃないか」

「そうだよな。所詮はトレーニングなんだからな。死んだふりでいいんだよ。そんな怒ったり心配したりするほどのことじゃねえんだ」
「じゃあ、どういつふうに二手に分けようか」

「男子女子は？」

「ジャンケンでいいだろ」

高德多一は、地団駄を踏むように、激しく二、三回、床を踏みつけた。

その音に、みなはつとした。

「ほんとにくだらねえな、まったくよ」

多一は叫んだ。

「おれは戻る。近藤たちのところに、さっきの部屋に戻る。もう、やつてらんねえよ、こんなこと。なにが二手に別れて戦えだよ。冗談じゃねえよ」

多一は踵を返し、部屋を出ると走り出した。

あんな馬鹿馬鹿しい要求。

なにがミツシヨンだよ。

心の中で叫んだ。

内心、多一は恐れていた。

この重苦しい雰囲気、みんなの心が押しつぶされてしまい、みな狂気が自分たち自身を包み込み、暴走していくことを。本当に殺し合いをはじめてしまうかも知れないことを。

エレベーターのある巨大な部屋へと戻ってきた。

まだ近藤啓治ら三人は部屋の反対側、エレベーターの巨大な扉の

前にいた。しかし、

「おい」

多一の声が巨大な部屋の中をこだまのように反響する。

三人は床に横たわっていた。

どくん。

多一は自分の心臓の音を聞いた。

足が震えだした。

どくん。

それでもゆっくりと、ゆっくりと足を交互に前に出していく。

多一は嫌なことを考えていた。

最低の結果を考えていた。

その不安は、一歩進むごとに大きくなっていく。

ライトに照らされた明るい部屋、床になにかキラキラと光るものがあつた。

だんだんと、はつきりしてきた。

それは血液であつた。

どろりとした、赤黒い血液であつた。

横たわつた三人は、それぞれ己の肉体から吹き出した血の池に溺れていた。

無意識の面白さというべきか、恐怖に絶叫する際、深く息を吸い込んでから、それから叫ぶものである。しかし多一は、息を吸い込む際、自分の唾液が呼吸器に入り込み、激しく咽せ、咳き込んだ。咳き込みながらも、倒れた彼らの姿を再び直視してしまい、今度こそ恐怖が爆発した。一瞬、深く息を吸い込んだ。そして内蔵が飛び出るほどに凄まじい、そして人生でかつてないほどのみじめな絶叫をあげたのである。

どんなに大声を出しても、三人が起き上がってくることはなかった。

横たわつた三人は目を大きく見開いている。その目はどこも見てはいなかった。その目にはこれっぽっちも光が宿っていなかった。

頭部からは、いまなおどくと血が熱い溶岩のように噴き出し続けていた。

多一の叫びはSDルームにまで轟き、やがてクラスの大半が駆けつけてきた。

みな、あまりの驚きに最初は声も出なかった。

状況が全く理解出来なかったのである。

そして、数秒の沈黙ののち、みなそれぞれに感情を爆発させた。

あるものは多一のように絶叫し、

あるものは泣き崩れ、

怒り、

嘔吐し、

気を失い倒れてしまう者もいた。

だがどんなに泣こうが叫ぼうが、この悪夢は終わることがなかった。

2

近藤啓治、安本栄助、滝沢昇の死体が転がっている。

転校生である古柴座夢が血の池を渡り死体へ近寄っていき、それぞれの体に触れていく。

「おれは少し医学の知識がある。この死に顔から判断するに、なにか異変を感じた瞬間に頭を打ち抜かれて即死だ」

こんな時だというのに表情一つ変えてない。

高德多一には死体に触れていくその姿が、人間の魂を抜き取っていく死神に思えた。

「なんだよ、異変って」

高木信二が声を荒らげる。彼と高德多一は、近藤啓治とは幼少の頃から大の仲良しだったのだ。去年、一年生の時に、親の許可を得て、夏休みに三人だけで旅行をしたこともある。

「このぽっかり頭に空いた傷といい、皮膚の焦げ具合といい、あれだろうな」

古柴座夢は壁の上のほうに視線をやった。

壁からなにか細長い触手のようなものが出ていた。先端にレーザー銃のようなものがあるのだろっ、と誰にも想像がついた。

MISSION UNCOMPLETE

Keiji Kondou, Noboru Takizawa,
Eisuke Yasumoto

情報端末の大型画面には、緑色の文字でそのように表示されていた。

SDルームに辿り着くというミッション。制限時間以内に攻略出来なかったのは、この三人だけであつた。

「ということは……」

田子里美の眩きが、全員をどきりとさせた。いま全員が、恐怖の感覚を共有していた。

「二手に分かれて戦え……」

「負けたほうが、こうなるってことかよ」

「嘘だろ……」

「……おれにいい考えがある。さっきの部屋に戻るぞ」

遠山紀夫が叫ぶ。

「なんだよ、いい考えって」

「とにかく、ここにいてもしょうがない。時間が減っていくだけだ。早く行くぞ」

そして彼らは、再びSDルームへとやって来た。

二手に別れて戦え。

まだ画面には緑色の文字で表示されている。その文字の下にある制限時間のカウントダウンが刻々と進んでいる。あと十分ほどしかない。

もしもこの時間がゼロになったら……

血の気の引いていく感覚。

これまで感じたことのない絶望感。

北嶋秀子は先ほどさんざん吐いたばかりだというのに、また通路に出て吐いている。もう胃液しか出ていなかった。吉野奈美が介抱してやっていた。

沈黙。

異様な緊迫感。

どうしようもない絶望感。

部屋の中、彼らの吐き出す気が空気に紛れ込み、静寂の間を激しく駆け回っていた。

部屋の中央の床。

無数の武器がある。クラスの全員分はある。

二手に別れて戦い合え。

そういわれても、誰となにをどうすればいいのか。

そもそも何故、そんなことをしないといけないのだ。

なんで義務教育下にあるただの中学生が武器を持って戦わないといけないのだ。

近藤啓治たち。

三人の死体。

ああはなりたくない。

死にたくない。

いや、

あの三人は実は生きていて、みんなを騙しているんじゃないか。

三人どころか、学校にも担がれているんじゃないか。

制限時間。

制限時間が近づいてくる。

あの三人のように……

「遠山、なんだよいい考えってのはよ」

橋田義人が詰め寄った。

「チーム分けだ！」

遠山紀夫は橋田義人の問いには答えず、叫んだ。

「みんな、あいつらが死んじまったこと、信じられないと思う。おれだってそうだ。でもな、あれは夢じゃねえ、現実なんだよ。早くしねえと、おれたちだって、ああなっちまうんだよ」

「なにがチーム分けよ。名案でもなんでもないじゃない」

里中加奈子が金切り声を張り上げた。

「おい、ぼく転校してきたばかりなんだぞ。なんだって、こんなことしなきゃならないんだよ。真つ二つに分かれて、そんな殺し合いみたいなこと……なんでそんなことに巻き込まれなくちゃいけないんだよ」

次いで、金本健次郎が声を張り上げる。

「馬鹿野郎。誰が真つ二つっていったよ」

遠山紀夫は唇をつり上げ笑った。ぎこちのない笑みだった。

「一人対、残る全員だよ」

雷が落ちた。

なんということをいいだすのだ。

なんという恐ろしい提案をするのだ。

「あんまり卑怯な真似をするわけにもいかねえ。あの世であんまり恨まれてもしょうがねえしな。だから、実際には一対一でやる。ただし、一人は残りの全員の分も代表して戦うんだ。それはいい出しつぺのおれが引き受けよう。そして、対するもう一人、つまりクラス全員の敵となる奴だが……」

彼はもったいぶるように、いちど言葉を切る。みんなの反応を確かめるように、続ける。

「女の子は守らないといけねえ。こんなところで武器を手に戦うなんてことがあっちゃいけねえ。男だって、力の強いやつ、能力のあるやつは、今後のためにも必要だろう。むしろ、生きていてもらわにゃ困る」

遠山紀夫は、みんなの前をゆっくりと歩いていく。

そして足をとめた。

「お前が、おれの相手をしろや」

桐野聡太を指差した。

ざわめき。

こんな卑劣な話があるだろうか。

クラスを代表して戦うなどと思着せがましいことをいっておきながら、病的なほどに腕力のない桐野聡太を指名しているのだ。桐野聡太相手なら女子でも簡単に勝てるだろう。

遠山紀夫に怒りと蔑みの視線が集中する。

しかし彼らには代案があるわけではなかった。

それどころか、一部の者は素直に、遠山紀夫がこのような憎まれ役を買って出てくれたことに感謝もしていた。このように強引に引っ張ってくれること、まとめてくれることに感謝していた。

「なんでぼくが……なんでぼくが……。君に直接殺されなくたって、勝負に負けたら、さっきの銃だかなんだかに撃たれて殺されてしまうんだろう。……戦うなんて、嫌だ……。ぼくは……」

桐野聡太は顔面蒼白だ。

「そうだ。負けたら殺されちゃうんだよ。だから、お前なんだよ。どうせ、こんなことが続いたら、お前は真っ先に脱落する。脱落するってことは死ぬってことだ。それなら、いまここででも同じことなんだよ。お前が弱いのが悪いんだよ。かわいそうだとは思っけど、もうおとなしく観念しな」

桐野聡太の顔面はますます蒼白になり、唇は激しく震えていた。

歯の根が噛み合わないほど、ガチガチと音を立てていた。

高德多一は自分の勇気のなさを嘆いた。遠山紀夫の卑劣で恐ろしい提案には賛成出来ない。しかし、結局なにもいうことも出来ず、ただ突っ立っているだけだ。そっちのほうがよほど卑劣なことなのではないか。いっそ、自分が代表となり、クラス全員の敵である遠山紀夫と戦い、勝つことが出来れば少しは気分も救われるかも知れないが、腕っぷしの強い遠山紀夫に勝てるかどうか分からないし、そんな状態でクラスみんなが自分に命を預けるわけがない。

なんともやり場の無い悔しい思いを感じているのは多一だけではないようだ。見回すと、田子里美も、金本健次郎も、吉野奈美も、困ったような、睨みつけるような複雑な表情を浮かべていた。「おい、コンピュータ、聞いているか。これからお前のいう通り、二手に別れるからな。桐野聡太と、残る全員だ。そして、残る全員は、おれが代表して戦う。わかったな」

遠山紀夫の叫びにも、画面は全く変化はない。ミッションと、残り時間とが表示されているだけだ。

残り時間はもう三分もない。

遠山紀夫は床にある日本刀を取った。

「覚悟は出来たか。ほら、はじめろ。武器を取れよ、桐野」
「嫌だ」

二人は部屋の中央で相対している。

残る全員は、そんな二人を遠巻きにして見守っていた。それぞれの思いを胸に。

「はやく取れよ。戦い合えって書いてあるだろ。お前も向かってこないと、もしかしたら戦いが成立しないかも知れないだろ、そしてらてめえ、責任とれるのかよ」

無茶苦茶な論理である。

桐野聡太はふるえる手で床の短剣を掴んだ。

日本刀と短剣では圧倒的に短剣が不利だ。しかしどちらにしても、ハンマーや槍などの重い武器を桐野聡太の貧弱な腕力で持てるはずもない。

「スタートだ」

桐野聡太は恐怖に膝をがっくりと落とした。頭上で風を切る音が聞こえた。

日本刀が鈍く輝いていた。

桐野は冷や汗をかいた。

驚愕に目を見開いた。本気なのだ。遠山紀夫は本気で自分を殺そうとしているのだ。いまなんの躊躇もなく、自分を殺そうとしたの

だ。

「おい、うごくなよ。戦うふり、死んだふりでいいんだ。おとなしくおれに殺されたことにされるよ。さっきの三人みたいにやなりやしねえよ。どうせ怖さに耐えられなくて自殺したんだよあいつら、ミッションがどうか、そんなの嘘っぱちさ」

「本気で殺そうとしていたくせに……」

桐野聡太は、ナイフを両手で握り、あらためて構えなおした。

天井から透明なフェンスが降りてきた。

ボクシングのリング並の広さである。

二人は完全に檻の中に閉じ込められた。

コンピュータが、今回のミッションを一对一の勝負で判断することを認めたということだろうか。

遠山紀夫はほくそ笑む。これで逃げられる心配がなくなった。

じりじりと間合いを詰め、獲物を隅っこに追いつめていく。当然自分が勝つに決まっている。しかし、相手も刃物を持っているのだ。気をつけるに越したことはない。

遠山紀夫は、実はあの三人はミッションに失敗したから殺されたということを感じて疑っていない。桐野聡太にいつていたこととは、まるで正反対である。

本来なら、なにもいわずに、武器も取らずに殺しているところだが、確実にミッションを攻略するためには、形だけでもきちんとした戦いをしておいたほうがいい。そう判断したからこそ、桐野聡太に武器を取らせたのである。

「ごめんよ、桐野」

「桐野君」

「恨まないでくれよ」

「ごめんなさい」

生徒たちは、自分らが生き残りたいがために、クラスメイトの死んでいくのをただ見ていることしか出来ない状況に涙していた。己自身の卑劣な心に涙していた。

遠山紀夫のことを激しく恨んだ。

地獄へ堕ちろ。

遠山紀夫は両手に日本刀を構えている。正しい構え方など知らない。ヤクザ映画などの、見よう見まねだ。

桐野聡太はコマンドナイフという、やや大きめのナイフを両手で構えている。

多少腰を落としていたのは単に恐怖のためだったのだが、遠山紀夫にはどうにも本格的な構えに思えてしまい、実はなにか心得でもあるのでは、という思いが一気に戦いを終結させることを躊躇させていた。

とはいっても、どちらが優勢であり、劣勢であるかは、誰の目にもはつきりしていた。

桐野聡太は時折奇声を発しながら牽制気味にナイフを左右に払うがほとんど効果なく、だんだん隅に追いつめられていく。

「おかしいよ、みんな、おかしいよ！」

吉野奈美は飛び出した。

戦う二人のもとへ駆け寄ろうとするが、半透明のフェンスに阻まれ、それ以上進むことが出来ない。

「おんなじクラスなんだよ。毎日一緒だったんだよ。それなのにこんなこと……ほんとに、おかしいよ、どうかしてるよ」

奈美はフェンスを激しく叩いた。

遠山紀夫は一瞬だけ奈美に目をやるとすぐに視線を目の前の獲物に戻した。

「そうだよ、おかしいんだよ、おれたちは。……そんなのいわれなくても分かってんだよ、黙っているこの馬鹿が！」

奈美は言葉を飲んだ。

目に涙が滲む。

死にたくない。死にたくないけど、でも殺し合いなんて嫌だ。

こんなことしていちゃ、いけない。

いつたい、なにが正しい行動なのか。なにが正しくない行動なの

か。

誰も教えてくれる者はいない。

いつしか、桐野聡太は完全に隅に追い込まれていた。

「終わりだ」

遠山紀夫が唇の片端をつり上げた。

窮鼠となった桐野聡太は、猫を噛むようなことはせず、過度の悔しさと悲しみに発狂したかのように叫んで、頭を抱えてしゃがみ込んでしまった。

そして、数瞬後が数秒後に襲い来るだろう自分の運命に恐怖し、声を上げて泣いた。

遠山紀夫がその隙を逃すはずがない。日本刀を軽く引くと、一気に突き降ろした。

だが桐野聡太の、足を投げ出してイヤイヤをするようにばたつかせるその足に引っかけかり、バランスを失った。日本刀を抱えたまま桐野聡太の上にのしかかるように倒れ込んでしまった。

二人の体が重なった。

田子里美が甲高い悲鳴を上げた。

とうとう、全体重を預けた日本刀の一撃で、桐野聡太を串刺しにしてしまったのだ。と。

ようやく終わったのだ。

短くも、永遠の長さに感じられる、そんな……殺し合いであった。多一も、奈美も、クラス全員の視線が一点に集中している。

しとめた獲物にまだ覆い被さっている遠山紀夫の大きな背中。

汚いものでも見るような、憎々しげな視線で……

だが、その感情は、半分は自分自身に向けられていた。

遠山紀夫は、自分らの気持ちの端数部分をためらい無くブツ切り、物理的に代行しただけなのだ。

最低なのは、自分たちなのだ。

北嶋秀子が泣き出した。

「いくらなんでも、殺しちゃうこと、なかったのに。桐野君、可愛

そつだよ。最後の最後まで、あんたに酷い目に遭わされて」

「そつだよ。殺すなんて。あの三人みたいになるとは限らないじゃないか」

だが遠山紀夫は答えない。

背中を向けたままである。

なんだか、様子がおかしかった。

どうかしたのだろうか。

どこかを打ち付けてしまったのだろうか。

まさか……

その時、遠山紀夫の体が動いた。

横に。

横に倒れていく。

桐野聡太の上をずれるように、そして床へと倒れた。

遠山紀夫の胸には、コマンドナイフが根元まで深々と突き刺さっていた。

いままで巨体に隠れていた桐野聡太の姿が現れた。つい直前までナイフを持っていた構えのまま、両手を震わせていた。

「この馬鹿」

誰かが反射的に叫んでいた。

「桐野、てめえ！」

「弱虫の役立たずのくせにこんな、こんな時だけ」

いまのいままで死んでいく桐野聡太を哀れみ、涙していたというのに……

桐野聡太はすっかり興奮状態にあり、まったく状況が理解出来ていなかった。

古柴座夢は、倒れている遠山紀夫に近寄り、手を伸ばして体に触れた。そして、みんなのほうを向いて、首を横に振った。

ミッション制限時間はすでに終了していた。

希望は全て打ち碎かれた。

「おれたち、死ぬんだ」

「近藤たちみたいに、殺されちまうんだ」

「やだ、あたしまだ死にたくないよ」

「馬鹿野郎、桐野」

「桐野、ふざけんじゃねえぞ」

みんなの怒声を桐野聡太は一身に浴びていた。

高德多一は黙って立ちすくんでいる。これからの自らの身に襲い来る恐怖と、己の全身を包むなんともいいようのない恥ずかしさ。そうしたもののごっちゃに混ざった自分自身の感情と戦っていた。

このあとなにが起ころうとも、それは一人のクラスメイトを見捨てようとした報いなのだ。

「ぼく……ぼく」

桐野聡太はまだ動揺している。

「まさか遠山くんに勝ってしまうなんて。……殺してしまうなんて」

MISSION COMPLETE

Souta Kirino

「お前だけ生かしてたまるか！ おれたちが殺される前に、お前を殺してやる！」

犬田高仁が床に突き刺さっていた日本刀を握んだ。

その時、画面の表示が変わった。

and

Takahito Kendai, Koshiba Zamu,
Satoshi Shimada, Satomi Tago……

桐野聡太に続き、全員の名前が出たのである。

MISSION UNCOMPLETE

「どうなっただよ……」

「なんで」

「なんで、おれたちがクリアしたことになっただよ」

背後で桐野聡太が狂ったように叫んだ。みんなが振り向いたのと同時に、自分の胸にナイフを突き立てたのだ。

桐野聡太は倒れ、それきり動かなくなった。

嫌な静寂が襲った。

桐野聡太が、自殺した。

この雰囲気になが耐えきれず、ついに碎けてしまったのだ。

「馬鹿か、てめえは」

「助かったんだろうが。勝ったんだろうがよ」

「なに考えてんだよ」

桐野聡太だけではない。混乱と悲しみ、そして恐れと不安に、みんなの心は狂いそうだった。

「でも、なんでおれたち、生きてるんだろう。桐野が勝っちゃったのに」

「彼はきつと、生徒全員を仲間だと、強く思っていたから。なにがあるうと、根底にある優しさを信じていたから。……最後の最後でみんなに裏切られたショックで自殺してしまうほどに……殺してしまったショックに耐えきれず自殺してしまうほどに」

秦野怜は表情も変えずにいった。

「だから、コンピュータは桐野が全員の代表側と判断したのか」

「おそらくは」

「ということは、冷静に考えると、やっぱり本来なら、おれたち全員死んでいたはずってことか。遠山だけ生き延びて」

いま生きていることが本当に奇跡に思えてきた。

そして、みんな自分自身が恥ずかしくてたまらなかった。

しかし状況が状況だ、助かりたいと思っただけが悪い。こんな状況下で、他人のために命を捨てられるほうがおかしい。聖人かきちがいのどちらかだ。

「そんなことを考えていてもしかたない。先に進んだら？」

秦野怜が促す。

「てめえ、なに一人で冷静にしてやがんだよ。気取ってんじゃねえぞ」

山田敬が詰め寄った。ボス格である遠山紀夫を失ったのだ。これからの自分らの微妙な立場について冷静さを失っていた。秦野怜の制服の胸ぐらをつかみ乱暴に引き寄せた。彼女はそれでも全く表情を変えない。

「そもそも、お前の存在どう考えても無茶苦茶あやしいだろうが。なにか知ってんじゃねえのか」

第三章 パラダイス

1

「性格暗いし、つんけんしてるし、飯食つてるところも見たことないし、グレているおれがいうのもなんだけど協調性皆無だし、なに考えてんだかわかんねえんだよ。聞いた話だと、よく一人で地下に降りてるっていうじゃねえか。軍用コンピュータにでもアクセスしてこんなつまんねえことを仕掛けたの、お前じゃないのかよ。なんかそんなことしそうな、悪どい冷酷そうな面しているもんな」

山田敬は一息にいい切ったが、苦勞の報われない反応があっただけだった。

「勝手にそう思っていれば」

秦野怜はもう興味なさそうにそっぽを向いてしまった。

「仲間割れしてんじゃないってばよ、こんな時に。さつきから、どいつもこいつも」

高德多一は、秦野怜と、なおも彼女に詰め寄ろうとする山田敬との間に入り込み、二人の距離を引き離れた。

「馬鹿野郎、仲間じゃねえよ、こんな女。……そうだよ、仲間じゃねえんだよ、おれとお前らも、みんな仲間なんかじゃねえんだ」

そして唐突に笑い出した。

「山田、お前なにいつてんだよ」

「おれたちバラバラになったほうがいいんじゃないかってことだよ。ミッションだか立ちションだか知らねえけど、またさっきみたいなのがあって、一人の失敗で全員が殺されちゃたまんねえ。バラバラに行動して、誰かがここを抜け出して、この馬鹿馬鹿しいゲームをぶっ壊すんだよ。な、名案だろ」

一気にそういうと、周囲を見回しみんなの表情をうかがった。

「確かに一理あるな」

と、転校生である古柴座夢は一人で部屋を出ていつてしまった。

勝手なやつだ、と高德多一は思った。だけど、責めることも出来ない。転校生だろうとこんな極限状況で立場が優先されるはずもないが、でもやはり彼と金本健次郎に対してはその運の悪さに対しては同情してしまう。

「おれも一人で行動するよ」

「おれも」

「じゃあ、おれたちだけで動こうぜ」

みんなが思い思いの行動をとろうとする中、それをとめようとする者がいた。

「駄目。離れてはいけない。全員一緒じゃないと」

なんとそれは、秦野怜だった。

「一緒のほうがいいって、なんで分かるんだよ、そんなこと。だから怪しいっていつてんだ」

山田敬の言葉に秦野怜はなにかをいいかけたものの、結局出てきたのはため息だけだった。

古柴座夢に続いて次々と一人だけ、もしくは数人のグループが結成され、この部屋の人口密度がどんどん少なくなっていく。秦野怜は、諦めたように小さく首を横に振ると、一人で出ていった。

あつけにとられているあいだに、取り残されて最後になってしまったのが、高德多一、吉野奈美、田子里美、北嶋秀子、高木信二、そして転校生金本健次郎の六人だった。

「それじゃ、おれたちはこのメンバーで、つてことで決まりだな」

多一の言葉に、みんな特に依存はない。なにが正しくて、なにが正しくないのかなど、誰にも分からないのだから。

遠山紀夫、桐野聡太の死体が目に飛び込んで来た。見ないよう注意していたつもりだったのに。多一は目を閉じ、成仏を祈った。

「しかし、いまになってもまだ信じられないよ。いったい、なにが起こっているんだか。本当、なんてときに転校してきちまったんだろ。こんな最悪のタイミングで転勤を命じた、父さんの上司を恨むよ。だいたい……」

金本健次郎の愚痴は梅雨の雨のように、やむことを知らなかった。

2

「確かこの辺りのはずだよな」

多一たち六人は二列になり、地下牢のような薄暗い通路を歩いている。

つい先ほど、奈美が改めて情報端末から引き出したフロア図の記憶を頼りに、出口を目指している。

SDルームに最後に残った彼らは、より安全に進むため、さらに様々な情報を集めようとしたのだがガードが厳重でネットワークには全く侵入出来なかった。端末内ローカルの情報をいくつか引き出せただけである。おかげでかなり出遅れてしまった。この冒険はどこを目指せばいいのかも分からないが、それでもあたりをつけて、なるべく無駄な行動のないようにしたい。そうしないといつ、画面にあの恐ろしい文字を見てしまうか分からないから。

「扉だ」

通路を曲がったすぐの突き当たり。金本健次郎は扉があるのに気が付いた。

「あの図ではさ、ここ、一番端だよな。もしかしたら、もうゴールに着いちちゃったんじゃないの」

転校生は落胆も激しいが、楽天家でもあるようだった。

「そんなの分かんないよ。……自動ドアじゃないみたいだ。……重そうな扉だな。金本、高木、手伝ってくれ。じゃ、開けるぞ」

三人は扉を押した。向こう側に開くタイプだ。

確かに分厚い、金属の、重い扉であった。男三人とはいえ、まだ中学二年生である。びっくりともしないと思われた。しかし、少しづつ扉は動きはじめた。

少し開いたところで、眩しい光が入り込んできた。それは、とても懐かしい光だった。みな、早くその思いへの確信を得たい一心で、さらに力を込めた。

ゆつくりと、だが確実に開いていく。

完全に扉は開かれた。

「外だ……」

この扉を開ける前には全く考えていもしなかった光景が、彼らの目の前に広がっていた。

青い空。

眩しい太陽。

草原。

道があり、向こうには広大な森。

「な、いった通りだろう。出たんだよ、ゴールに。ぼくたち助かったんだよ。……あのエレベーターは地下になんて行ってなかったのさ。学校の一階から、ずっと歩いてきただけなんだよ」

金本健次郎が笑顔ではしゃぐ。

「学校の近くに、こんな場所はないよ。半径数キロはマンションやなんかでぎつちりで空き地なんかろくにないんだから。キャンパスだって広いけど、こんなところはない」

奈美の一言は、はしゃぐ転校生の全身に水をぶっかけるものだった。

「見る、あれを」

多一は天に向かって指さした。

青い空の一部が欠け、そこには機械部品やパイプなどが見えていた。

「どこまでも澄み渡る空に見えるけど、高さ十メートルくらいの天井に、映像が出ているだけなんだ。果てしなく広い大地に見えるのも、取り囲む壁に映し出されたものなんだと思う。実際、とんでもなく広大なところには違いないんだろうけど、でもやっぱりここは地下四十九階なんだよ」

「一瞬、喜んじやったよね。地上だあって」

奈美自身も残念そうに苦笑した。みんなに続いて扉を抜け、外へと出た。

太陽や空の色は偽物でも、足下の感触は紛れもなく土のそれであった。土も雑草も本物だった。もっとも、土などはわざわざコストのかかる人工の物を敷き詰めるより本物を利用したほうが遙かに安い。だから本物の土であることは当然といえば当然だったが、それでも本物の土の感触に少なからず安堵した。そしてこの景色も、先ほどまでのよりは遙かにましだった。たとえ見た目だけであっても、息詰まった基地の中から開放されたのだから。

少し歩き、そしていままで自分らのいた建物を振り返ってみる。

ただっ広い草原の中にある、見るからに研究所といった感じの、それほど大きくもない三階建ての建物だった。思っていたより遙かに小さい。しかしこれも合成映像ではないのか。天井の高さを考えるとそうでなければおかしい。少なくとも二階、三階部分は合成映像だろう。壁や天井に、建物の続きが描かれ、さも高い建物のように表現されているだけだ。何故なら、ここは十メートルほどの高さしかないフロア。三階建分の高さなどない。それに、彼らは巨大エレベーターに乗ってこの建物まで降りてきたというのに、建物の上は完全に空中の色であり、まったくそれらしいものは見えなかった。

試しに多一は落ちていた石を拾い、建物のすぐ上を目がけて投げしてみた。見た目の通りならば、石は屋上に落ちるはずである。しかし石は投げた瞬間、がんと音を立て、青空の天井に当たって跳ね返った。予想通り、建物は合成映像だったようだ。

一本の道があり、彼らはそこに沿って歩き出した。

五分も歩くとすでに草原も終わり、ここは鬱蒼とした森の中だった。

どこまでが本物で、どこからがコンピュータの作り出した幻影なのか。もしかしたら、自分たちは同じ場所で足踏みをしているだけではないのか。

木々の高さは優に十メートルを越えている。

「この木だって怪しいもんだよな。天井より高いんだからさ」

金本健次郎は先ほどの部屋で、護身用にナイフを拾ってブレザー

の内ポケットに入れていた。それを取り出すと、木に突き立ててみた。手触りは確かに木のようだったが、ナイフを突き立ててみると、中は金属の感触だった。ナイフをそのまま下に引いていくと、べろりと皮がめくれた。

「やっぱり、人工の木だったか。天井のところからは、きっと映像になってんだな。ここって、建物のワンフロアとしてはとんでもなく広いんだろけど、それだけじゃなくてコンピュータ映像で、もともととんでもなく高く、広く演出してあるわけか。要人がシエルターとして隠れるときのこと考えてるんじゃないか。一生暮らすにしても、だだっ広い自然の中のほうがいいものな。……おい、しかもこれ……見てみるよ」

金本健次郎の指差す箇所全員が視線を向けた。

知識がなく、詳しくは分からないが、やはりそれはセンサー、カメラのようであり、そしてなにかを照射するような装置があった。

「銃口だろうね、それ。たまたま皮をめくった一本がこうなんだから、ここだけじゃなく、どこに行ってもこんなのが隠されていると考えるべきなんだろうね」

奈美の一言はみんなの心に暗い影を落とした。

「ミッシェンクリア出来なかった者は、絶対に生かしておかないってことかよ」

細く、ぐねぐねと曲がりくねった道を進んでいく。

平行している道があるのだろう。木々の隙間から、ずっと向こうにちらほらと人影が見える。

「まあ、コンピュータグラフィックだろうとなんだろうと、青空があるだけ救われるよな。こうして森を歩いていると、もう、さっきの出来事が信じられなくなってきたよ」

「信じられないじゃねえよ、馬鹿野郎」

高木信二は金本健次郎の顔をきつと睨みつけた。その目にはうつすらと涙が浮かんでいた。

「ぼく、なにか悪いこといったかよ」

「転校してきたばかりのお前は知るはずないけど、こいつと、おれと、死んだ近藤とはさ、小学生の頃からの親友だったんだよ」

多一の言葉に、高木信二は息を詰まらせる。軍用巨大エレベーターの前で頭を打ち抜かれて絶命していた三人の姿が脳裏に浮かんた。近藤啓治の、どこを見ているわけでもない、目の見開かれた、頭部から激しく血を流しながら、彼らとの記憶がその血に溶け流れて、近藤が近藤でなくなつて、焦げた血の肉の近藤が骨で、それは……

高木信二は呻き、両手で頭をかきむしつた。

「なんだよ、そんなこというなら、ぼくが一番可愛そうじゃないかよ。なんの関係もないんだぜ。ぼくが一番悲惨なんだよ。もう一人転校生いるけど、あいつ、ちよつとここがおかしいのか全然へこたれていないから、だからぼくがクラスで一番可愛そうなんだよ」

「うるせえな。お前はそればかりいつてるけど、関係ないってんなら、クラスの全員が関係ないんだよ。たまたまこんな日に、このクラスの生徒だったって話だ。お前だって一緒だ。お前はちよつとタイミングが悪かったただだ。そんなこと、おれたちが知るかよ。なんでお前なんかに同情しなきゃならないんだよ」

「別に同情なんかしなくてもいいよ。でもいま先に突っかかってきたのはそっちだろう。お前が近藤とかいうやつと大の仲良しだったとか、そんなことぼくが知るはずないだろう。あいつが意固地になつてエレベーターの前からテコでも動かなかつたのが、ぼくのせいだつてのかよ」

「おい、ちよつといい過」

喋りかける高德多一のほうにちらりと視線をやった瞬間、頬に衝撃を受け、吹っ飛んでいた。高木信二が殴りつけたのである。

転がり倒れたこんだところを、今度は馬乗りになられ、なおも殴られた。

「なにすんだ」

「うるせえ。お前なんか……」

殴り続ける。

下から金本健次郎が反撃。顎にパンチを食らわせた。不意をつかれて弾き飛ばされ転がった高木信二が、今度は反対に馬乗りになられ、拳を打ち付けられた。

張りつめ、緊張していた田子里美、北嶋秀子の二人は、彼らの狂気の渦にすっかり飲まれ、声をあげて泣き出してしまった。

奈美はたまりかね、争う二人を引き離そうとした。

「ちよつと、二人とも、やめなよ。ぼくたちがこんなところで争ってどうすんのよ。やめてよ」

しかし興奮した二人の男に、奈美の軽い体はあっけなく弾き飛ばされ、地面に転がった。

再びとめに入るべく身を起こした。

金本健次郎と高木信二は相変わらず殴り合いを続けている。

離れたかと思うと、にらみ合い、またどちらかが殴りかかる。

取っ組み合う音、殴り合う音に、少女二人の泣きわめく声が共鳴し、奈美の鼓膜を不快に刺激する。まるで耳元で激しくわれがねを叩く音を聞いているかのようだ。

奈美は両手で自分の耳を覆った。

「もう……いやだよ……こんなの」

奈美は地面に両膝をついた。

狂気の渦はいつしか奈美をも取り込んでいた。

助けて。

誰か。

お父さん。

お母さん。

会いたい……

お父さん、お母さんに会いたい。

もう、こんなところ、いやだよ。

死にたくない。

ぼくはまだ、死にたくない。

奈美は自分の性格をどちらかといえばクールなほうだと思ってい

たが、まったくの思い違いであつたことを思い知らされた。腹立たしいことに、頬を伝う涙がとまらない。ぬぐつてもぬぐつてもきりがないほどに、それはこぼれ落ちてくる。

狂気に飲み込まれることなく、なんとか意識を保っていたのは高德多一だけであつた。

だがとても冷静とはいえなかつた。

怒り。

動揺。

悲しみ。

様々な感情が入れ替わり立ち替わり、しかも強烈に多一の脳味噌を殴りつけてくる。支配権を要求してくる。

耐えきれず、思わず叫びだしそうになったとき、

「悪かつた、みんな」

高木信二の声に、彼の上に馬乗りになつて殴りつけていた金本健次郎は、その手の動きをとめた。

金本健次郎は、なんだか拍子抜けしてしまつた。ゆっくり、立ち上がつた。

「おれがみつともない姿を見せちまつたから、みんなまで不安がらせて……ほんと、悪かつた」

高木信二は土下座をした。

多一は狂気がこの場を去つていったことに、安堵のため息を吐いた。

土下座をしている親友に手を差し延べ、起きあがらせた。そして、親友の胸を、手の甲で思い切り叩いた。

「もう、進むしかないんだから。元気出していこうぜ」

3

森の中の曲がりくねつた道を、さらに数十分ほども歩いていると、なんの前触れもなく突然木々がさつと左右にどき、一気に視界が広がつた。

「なんだ、ここは……」

金本健次郎は、驚きに素っ頓狂な声をあげた。そこには無数にも思える数の、大小様々な建物があった。

森から抜け出た道は急激に幅を広げ、そのまま大通りとなってビルとビルの間を突き抜けている。

六、七階ほどのビルが多いが、向こうには高層ビルもそびえている。

おそらく、ほとんどがコンピュータによる合成映像だろう。

路地に入ると、そこにはたくさん民家も存在している。

実際はそれほど広くもない空間なのだろうし、ほとんどが合成映像なのだろうが、それでもかなり作り込まれたリアルな街であることは疑う余地のないことだった。

オフィスビルの一階には様々な店舗。コンビニエンスストア、本屋、酒屋、銀行。

自動車は一台も通っていないかった。

まったく機能していない、形だけの、死んだ街であった。

しかし、しんと静まり返っているわけではない。ここには先客がいたのである。

橋田義人たちのグループと出くわした。聞くところによると、この街について先ほどまで横田五郎たちや、古柴座夢の姿もあったらしい。探せばまだ、誰かいるだろう。

そして、お互いの無事を願い、彼らとは分かれた。

「なんだか違和感があると思ったけど、いまのぼくらの時代より、街が古くさいんだね」

奈美は誰にともなくぼそりといった。

そうなのだ。ここだけではない、先ほどの部屋の中にあった情報端末といい、数十年前の最先端なのだ。別にそう再現したわけではなく、単にその頃にこの基地が建設されたというだけのことだろう。しかしそれでも、この少しだけレトロな眺めは一度気になると、奇妙このうえないものだった。こんな時でなければ、楽しめたかも知

れないのに。

店舗の中は映像ではなく、本物と同じように作られていた。商店街の品物の充実ぶりは圧巻だった。食べ物以外は全て本物が並んでいた。書店には何十年経っても読み尽くせないほどの本が並べられていた。

しかし酒屋に入っても無愛想な店員がいるわけではなかったし、レストランに入っても料理が出てくるわけではなかった。

この地下四十九階で呼吸をしているのは、おそらく自分たち、二年A組の生徒たちだけなのだ。

多一たちはトイレ及び休憩ということで、少しの時間ここに留まることになった。いったんバラバラになり、二十分後に集合予定だ。高德多一と高木信二は一緒に行動し、スーパーのトイレに入った。もしもトイレの水が流れなさそうだったら、便器に黄色いおしっこが残るのもいやだから、外で済ませてしまおう。などと考えていたが、心配は無用だった。贅沢にたっぷりの水で手を洗うことも出来た。

新鮮そうな大根やピーマンがあった。当然といえば当然なのだが、触ってみると作り物だった。

続いて缶詰を手に見てみた。

「おい、これ賞味期限が一年前だぞ」

「本当だ。四十年も五十年も前のかと思ったのに、新しいな」

雑貨売場から缶切りを探し、缶詰を開けてみた。

サンマや鶏の炭火焼きなど、まったく問題なく食べることが出来た。

「あとで、みんな連れて取りに来ようぜ。いつまでこの地下にいることになるんだか、分からないんだから。……季節に一度、軍用設備のメンテとかいって、学校が半休になるけど、たまにこういうのの交換なんかもしているのかも知れないな。噂通りにシエルターとしての役割も考えられているってんなら」

「そもそもこの街って、なんなんだろうな。休憩所なのか、それと

も市街戦演習のための設備なのか」

「さあ。分からないよ。……なあ高木、おれ思っただけど、いまの缶詰技術の賞味期限を考えると、十四、五年前のものだろう。そのくらい前に、この四十九階でなにかあつたんじゃないか」

「なにかつてどんな」

「たとえば、いまおれたちが遭遇しているようなことだよ」

「死のゲームの参加者が飢えて死んじや詰まらないから食料の配給かよ。それなら、いま十何年も前のしかないってことは、おれたちのときだけ手抜きすることかよ。……あー、新鮮なものを食いてえ、ステーキとか贅沢いわねえから」

「食おうぜ。早くここを抜け出してさ」

「そつだな」

なんとなく、多一にとってひつかかるものがあつた。十四、五年前といえば、多一たちが生まれた頃だ。なにがどう関係あるとも思えないが、どうにもその微妙な符合が気になってしかたなかった。

同じ頃。

田子里美はトイレを探して一人、雑居ビル一階のCDショップに入っていた。

CDが棚にぎっしりと敷き詰められている。どのアーティストの名前も、見たことも聞いたこともない。昔の歌手のものばかりだ。そもそも彼女は初めてCDなどというものの実物を目にした。データをダウンロードするだけの現在とは違い、非常に不便そうだ。でも、昔はこんなような店舗が沢山あつて、そこには沢山の客がいて、こういうものを実際に手に取りながら好きな音楽を探していたのだということ、ちょっと楽しそうにも思えた。検索して、ピツと入手出来てしまうのは楽ちんだけでもなんだか味気ない。

みんなですつとここにいればいいんだよ。いつか助けがくるんだから。下手にいろんなところを歩き回って、またミッションだなんだって出くわしちゃったら、もう馬鹿馬鹿しすぎて、悲しすぎて、シャレにならないよ。ここ、昔のいろいろなものがあつて楽しいし

さ。

と、心の中で独り言。

ちよつとCDを聞いてみたい衝動にかられたが、どこにもプレイヤーらしきものが見つからない。

仕方がない。さつさとトイレを済ませて、みんなのところに戻る。

天井から案内板がぶらさがっていたので、トイレルームにはまったく迷うことなく辿り着いた。

洗面所に壁一面を使った大きな鏡がある。

なんとなく、その鏡に目をやった。

田子里美の目は大きく見開かれた。

手が震えた。

鏡は電子ミラーだったのだらう。機能を切り替えることで情報を映し出すモニターにもなる。

彼女はそこに、馬鹿馬鹿しすぎて、悲しすぎて、シャレにならないものを見たのである。

MISSION

最愛の親友の未来を永劫に奪うこと

制限時間十分

「奈美」

親友の名が無意識に口をついて出ていた。
どくん。

心臓が激しく鳴った。

「無茶苦茶だ。なんで、そんなことしないといけないのよ。本気だつたら狂ってるし、冗談だったら最悪につまんないよ。誰よ、こんなくだらないこと考えるのは。奈美は一番の親友なんだからね。誰が……誰がそんなこと」

全身から血の気が失せていく。
全身が冷たくなっていく。
全身の汗腺から汗が噴き出してきた。
どくん。
どくん。
心臓の鼓動がどんどん早くなっていく。
息が苦しくなってくる。

4

集合場所に田子里美が現れた。
「これで全員揃ったな。じゃ、行こうか」
多一が促す。
「……トイレの壁にいきなりミツション！　なんて出なかったろうな」

金本健次郎の言葉に、田子里美はびくりと体をすくめた。
「なんにもなかったよ！」
眉を吊り上げ、怒鳴った。

「ちよつと冗談いっただけだろ。そんな怒るなよ、もう……」
金本健次郎は、やれやれといったふうに関をかけた。

「あんた、軽口と愚痴ばかりなんだもん。ちよつとは黙ってなさいよ。こんなときに、冗談にもならないようなこといわないでよ」
「うるさいなあ。はいはい、わかりましたよ。気をつけますよ」

「奈美……ちよつと、こつちに来て」

田子里美は、もう金本健次郎のことなどどうでもよかった。

吉野奈美の顔を見つめていた。

「なあに、田子ちゃん」

「こんなときだからさ、ちよつと親友の奈美に話しておきたいことがあるの。あっち。あっちで話そう」

「それならわたしも行くよ。親友なんだから」

北嶋秀子がちよつと憮然とした表情。いつも三人一緒じゃなかつ

たのか。

「ごめん、秀子。奈美とだけ、話したいんだよ」

田子里美と吉野奈美は、酒屋の裏側にある倉庫のところへと歩いていった。

「いったいどうしたっていうのよ、田子ちゃん、なんだか気持ち悪いなあ。あらたまつてぼくだけに話なんてさ」

「あたしたちさ、親友だよ」

あらたまつた表情で、奈美のことを顔を見つめた。

数秒の沈黙。

奈美は唾を飲み込んだ。

笑顔を作ると、口を開いた。

「そんな、あつたりまえじゃん。いまさらなにいつてんだよう。ぼくとタジちゃん田子ちゃんの三人は、いままでだって、これからだって、ずうつと親友だよ」

「あたしがさ、小学四年生るとき入院したとき、毎日お見舞いにきてくれて凄く嬉しかった」

「そんなの。……ぼくだって、ぼくがお父さんに怒られたときに、一緒に謝ってくれて、一生懸命説明してくれて、あのときは本当に嬉しかったよ」

「そうだよ。親友だもんね。……だから、許してくれるよね」

鋭く風を切り裂く音。

いつ手に忍ばせていたのか、田子里美は不意にナイフを突き出してきたのだ。

だが、その切っ先は虚しく、つい一瞬前まで奈美の顔のあった空間の、空気を切り裂いただけだった。

奈美は運動神経の良いほうではない。むしろ、体育の成績はビリに近い。一撃を避けることが出来たのはまったくの偶然だった。

奈美の意識は完全に錯乱し全く状況把握が出来ていない状態だったが、無意識は冷静に状況判断をしていた。次に来た一撃を避けられたのは、そんな理由と、それと単なる運のおかげだった。

だが運は何度も味方してくれるものではない。

奈美は激痛に呻いた。

腕にナイフが突き刺さっていた。胸への一撃を、体を反転させ、腕を振り上げてかばったのだ。

奈美の苦悶の表情に、加害者である田子里美本人も驚いていた。

「奈美……」

思わず漏れたその呟きをかき消すように激しく首を横に振ると、唇の両端をつり上げ、笑みを浮かべた。

「田子ちゃん……田子ちゃん、田子ちゃん、まさかまさか、そんな……」

信じられない。

心臓が激しく鼓動する。

胸が破れてしまいそう。

奈美は最低最悪の事態を想像した。田子里美の邪悪そうな笑み、目つきに、それは想像ではなかったことを悟り、驚愕と絶望とに目を大きく見開いた。

そう、田子里美はあえて邪悪になろうとしていたのだ。

おのれの心を狂わせる以外、自分の生き残る術はないのだから。普段の自分に、とても奈美を殺すことなど出来るはずがないのだから。

奈美は瞬時にして、すべての状況を理解した。

二人は見つめ合った。

そして、

奈美はゆっくりと、両腕を横に広げた。

まるで無防備な体勢だ。

体が震えている。

その顔は微笑んでいる。

しかし、ぎこちない笑みであった。

「いいよ。……田子ちゃんが助かるんなら」

奈美は恐怖にがたがたと震えている。

死にたくない。

だけど、親友が死んでいくのを見るのはもつといやだ。

田子里美はナイフを両手に構え、近寄ってくる。

奈美は動かない。

こわばった笑みを浮かべたまま。

足が震えている。

額にぽつぽつと汗の粒が浮き出ている。

「奈美……ごめん」

田子里美のナイフを持った手も激しく震えていた。

「いいんだよ」

というとしたが、口の筋肉がほとんどまともに動かず、全然言葉になっっていなかった。

奈美は目を閉じた。

気にしないでいいんだよ。ぼくなんかより、田子ちゃんのほうが生きるべきだよ。心の中で呟く。声に出さなかったのは、恐怖をさとられたくなかったから。友のために笑っていたかったから。

「ほんとうに、ごめんね。……あたしたちの友情を疑ってしまったて、ほんとうにごめんね」

田子里美はナイフを投げ捨てた。

「田子ちゃん……」

奈美は目を開いた。

田子里美は、きよろきよろとしながら、どこかで見ているコンピユータだか人だかに話しかけた。

「まだ少し時間あると思うけど、あたし、このミッション降参します。負けでいいです」

田子里美の表情は、さっぱりとしていた。

不安なものもない、やすらかな顔であった。

「なにいつてんの！ 駄目だよ……駄目だよ、そんなの」

「あたしさ、ほんとうに良かったよ。奈美と親友でいられ……」

田子里美の側頭部を白い閃光が突き抜けた。

彼女の体は自分自身を支える力を失い、地に倒れた。

頭から血が噴き出している。

止まらない。

どくどくと、赤い血が流れてくる。

いつまでも流れ出てくる。

いつの間にか、吉野奈美は真つ赤な海の中にたたずんでいた。

「田子ちゃん」

もう永遠に動くことのない、親友の名を口にした。

彼女の最後の表情が微笑みであったこと。それが奈美の心を締め付けた。

「ぼくが、殺しちゃったんだ。ぼくが……ごめん、田子ちゃん……」
必死に抵抗し、反撃をしていれば、田子里美はためらいなく奈美を殺していたに違いない。

自分は善人面して、格好つけて、挙げ句の果てには親友を自殺とも呼べる結果に追いやってしまった。

奈美は田子里美の死体に歩み寄った。

血の海の中、両膝をついた。

頬を涙が伝う。

嗚咽は次第に慟哭へと変わった。

大きな声をあげ、いつまでも泣き続けた。

5

「ありがとう」

奈美は多一たちに軽く頭を下げた。まだ目の周りが真つ赤だ。

金物屋から持ってきたスコップで、男三人で土の地面に穴を掘り、田子里美の亡骸を葬っている。まさかアスファルトは掘れないので、街のはずれ、彼らがやってきた森との境の土を掘った。

土をかけるまえに、北嶋秀子がどこからか持ってきた造花の花束を胸の上に置いてあげた。

北嶋秀子も泣きはらして目が真つ赤だ。まだ嗚咽がやまない。

「泣くな。いつ自分が同じ目にあつか分からないんだぞ。他人の死を悲しんでいる場合じゃないんだ」

といいながらも、金本健次郎は貰い泣きに目を腫らしていた。あらかた土をかけおわり、顔を残すのみだ。

みんなで、手で土をかけていった。

最後の最後は、吉野奈美と北嶋秀子の二人だけでかけた。

土をかけていくたびに、彼女との様々な思い出が頭をよぎる。

せめて笑顔で死んでいったことを喜ぼう。でなければあまりに親友の死が悲しすぎる。

そして、最後は自分も笑ってあげよう。

田子ちゃんのぶんも頑張って生きていくから、と笑ってあげよう。しかし、奈美はどうしても笑うことが出来なかった。

どうしても涙がこぼれてきてしまう。

とめられない。

自分の体内に、こんなに涙があつたのか。

「おい、高德君、みろ、あそこ」

金本健次郎の指さすところ。なにやら地面がこんもりと盛り上がっている。なにかを埋めたあとのよう。

行ってみると、そこには岸辺亮子の死体が埋められていた。

顔と胸のあたりに土がかかっておらず、見えていた。

多一は自分自身を呪った。

だんだんと級友の死に対しての感覚が麻痺してきていることに。

岸辺亮子もスコップで掘った穴に埋められたようだ。

「なあ、金本、ちょっと妙じゃないか」

「なにが」

「こんな、中途半端な状態がだよ。それに、埋める途中というより、完全に埋めたあとに誰かが掘り返したかのように見えないか」

「いわれてみれば」

「なんだろうな」

「知るわけない。ぼくら以外にこのフロアには原住民がいて、墓場

泥棒してんじゃないのか」

二人は岸边亮子の死体に、あらためて手で土をかけていった。

「ごめんな、岸边」

おれはなにを謝っているのだろう。

多一は自問した。

おそらく、級友の死に無感覚になりつつある自分の感覚に対してだ。そんな感覚を死んでいった人に向けるのは、人としてやってはいけない、無礼な態度なのだ。

「こんなことがさ、平気になっちゃ、絶対にいけないよな。こんなことが平気になっちゃったら、なんのために人間に生まれてきたのか分からないもんな」

多一の頬を涙が伝う。

嬉しかった。

枯れていなかった。

涙。

いきなりどつと涙があふれ出てきたのだ。

多一は笑い出した。

悲しみに笑いながら、喜びに号泣した。

いま泣いていること、人の感情の残っていたことを、神に感謝した。

6

コンピュータルーム。

奈美はキーボードを両手で素早く叩いている。対話式にデータベースにアクセスしようとしていた。

「質問。何故、このようなことをするのか」

奈美の打ち込む内容が画面に表示される。

数秒後、その下の段に質問への反応が現れた。

「理解不能。もっと明確な指示を」

現在の画面を全てクリアし、あらためて打ち込む。

「質問。我々を殺そうとする理由は何か」

「理解不能。もっと明確な指示を」

このコンピュータは語彙が極端に貧弱なのか、それともロツクされて検索目的の言語データベースにすらアクセス出来ないでいるのか。

奈美はため息をつく。

腕組をして、少し考え込む。

また、指がキーボードに伸びた。

質問を少し変えてみよう。

「質問。我々全員の生存確率は」

「いつの時点での？」

数秒後、反応があつた。

言語データベースにはアクセス出来ている。

検索エンジンの基本性能が酷いのか、制限をかけられているかのどちらかだ。

「二十四時間後」

キーを叩く。

数秒後、質問に対しての回答が表示された。

「生存確率0%」

なによ。このコンピュータ、おかしいんじゃない。ミッションをクリアしていけば、生きて地上に出られるんじゃないの。それならいくらなんでもゼロはおかしいよ。……たとえば、コンマ数パーセントであつても……

奈美は心の中で文句をいう。

そして気付く。

そうか、もう何人も死んでいるんだから「全員が生きている確率は0に決まっている」。

「質問。二十四時間後、我々二年A組の生徒の中で、誰か一人でも生き延びている確率は」

これならちゃんと答えがでるだろう。

数秒後、質問に対しての回答が表示された。
「生存確率0%」

7

多一は空を見上げている。

どこまでも澄み渡る青い空。

しかし鳥の一羽も飛んでいない。これからも飛ぶことはないだろう。あるとすれば、それは単なるコンピュータグラフィックだ。何故なら、ここに本当の空はないのだから。

今朝、学校に出かける前の、両親のよそよそしい態度。

もしかしたら軍と学校が共謀しているのみならず、生徒の保護者までそれに荷担しているのだろうか。

いや、そもそも親がそんなことに加わらねばならない理由がない。自分の両親のことは、自分が一番よく分かっている。少し不器用なところがあるけれども善良で、そして自分の子供が可愛い普通の人間だ。

誰がなにを考えているのかは分からない。だが、誰かがなにかを考えていることは間違いなさそうだ。

もしもコンピュータの暴走なら、軍や学校が強制的にコンピュータの機能を止め、そしてもうここまで助けがきていてもいいはずだ。分かっている、助ける気がないのか……

それと、こんな日に転校生が二人。こうなってくると、単なる偶然とも思いにくい。

古柴座夢の常人離れた体格といい、表情一つ変えることのないあの性格といい、

きっと、なにかがあるのだ。単なる転校生ではない。

そうすると、いま自分の隣にいる転校生、金本健次郎……彼は貧弱そうな体格に、どこかのんびりとしたお坊ちゃま然とした顔立ちをしているが、しかし……

「なに？」

金本健次郎は多一の視線に気付いた。

「別に、なんでもない」

多一は目を逸らした。ふと遠くに視線をやると、そこには鳥羽恵の姿があった。

彼女は路地を一人で歩いていた。

仲間に入れてやろうかとも思ったが、結局、声をかけずにおいた。こんなことが続くと、なんだか、集団でいることが得策とも思えなくなってきたのだ。山田敬のいうとおり、バラバラに行動したほうがいいのかも知れない。

やがて鳥羽恵の姿が、建物の陰に消えた。

8

鳥羽恵は雑居ビルの中に入った。

ここまで、秦野怜の後姿を追って来たのだ。

雑居ビルの中の、荒れた一室。蛍光灯は全て碎けてしまっており、小さな窓から差し込む陽光しか光源のない、とても薄暗い部屋であった。

鳥羽恵は通路の陰に隠れ、息を殺している。

部屋の中には秦野怜がいた。

彼女だけではなかった。

向き合うように、もう一人、大きな人影が。

それは、古柴座夢であった。

秦野怜は背が低い。朝礼の時も前から三番目だ（朝礼に出ないことも多い）。だから二人の身長差は大人と子供ほどもあった。

鳥羽恵はそつと息をひそめ、気配を殺し、二人の様子を見ていた。古柴座夢を追いかけるように歩く秦野怜、そんな様子がとても奇妙に感じ、彼女を追いかけてきたのだ。何重にもなった追いかけてきたのだ。

「やはり、お前だったとはな。なにが目的なんだ。こんなことまでして。許されることではないぞ」

古柴座夢の低い声。

この二人は、一体何者なのだろう。
なにを話しているのだろう。

「別に手を結ぼうとか、手を貸してほしいとはいわない。ただ、邪魔をしないで欲しいだけ」

「お前の口から、そんな台詞が出るとはな」

「わたしはわたしで、彼らの苦しみに歪む顔を見ただけだから」

鳥羽恵は、思わず悲鳴をあげそうになった。

心臓の鼓動が速くなる。

いま、なんて……

秦野さん……

鼓動が、自分の体内に反響している。

鼓動が、外に漏れて聞こえているようで不安になり、さらに心臓の動きが激しさを増す。

「おれはただ、法を守るだけだ」

なにをいつているのかよく分からなかったが、わかったことがある。彼らは知り合いだったのだ。……こんなタイミングで転校してくるなんておかしい。きつと裏でなにかあるのに違いない。

しかも、秦野怜のあの台詞。我々に殺意を持っているということなのだろうか。彼女が今回の件の引き金を引いたとでもいうのだろうか。古柴座夢は、彼女に対していったいどういう立場なのか。

秦野怜が直接の犯人かどうかは分からないが、重要ななにかを知っていることはもう間違いないようだ。

あまりの薄気味の悪さと、不安、恐怖とに、鳥羽恵の体は激しく震えていた。

しばらくして二人は去ったが、その後も、しばらく震えがおさまらなかった。

秦野怜は周囲を見回した。とくにその顔にはなんの表情も浮かん

でいなかった。ただ、見ただけである。

「なにか用？」

彼女を取り囲んでいるのは、島田敏、山田敬、多嶋健一、八塚基、橋田義人、鳥羽恵、中溝裕子、星遥。

「お前、なにを隠してんだよ」

山田敬が詰め寄る。

「なにが？」

「しらをきるつもりか」

「なんにもしらをきつたりなんてしてないけど」

「隠そうというなら、こつちからいつてやるよ。転校生の座夢とかいう変な名前の野郎と、怪しげな話をしたって聞いたんだよ。あいつは見た目は極悪人みたいだけど法を守るだのなんだのといってたらしいじゃねえか。お前が犯人で、あいつは秘密警察とか、そんなじゃねーのか。なんかうまい話を持ちかけて、見逃してもらおうとして、つっぱねられたんじゃねえのか」

「漫画じゃあるまいし」

秦野怜はあくまで冷静な表情を崩さない。

「うるせえな。お前が犯人なんだろ」

「なんとかいつてみるよ」

「なにたくらんだよ」

「犯人なんだろ」

秦野怜は一斉に怒声を浴びた。

そして突然静まりかえる。

秦野怜は少しの沈黙ののち、静寂を破る。

「そうよ」

秦野怜は実にあつさりとした口調でそういった。

全員の間に緊張のかけが走る。

何人かがあらためて怒りの視線を送る。

「さっき山田君がいつていたことは幼稚な想像だと思っけど、でも、現実もえてして幼稚なものだから」

「なんでそんなことしたんだよ」

「何人殺されたと思ってんだよ」

「ふざけんじゃねえよ」

秦野怜はすました顔。

「だって、みんなが大嫌いだったから。殺したくなるくらいにね。わたしの全てを奪った、あの中学校が大嫌いだったから」

鳥羽恵は、一年の時に秦野怜と同じクラスだった。あの明るく活発だった秦野怜が、あまりに変わりすぎだ。しかし、一体なにがあったというのだ。そして、何故、自分たちがこんな目にあわないといけないのだ。これはなんのゲームだ。

秦野怜は続ける。

「軍のトレーニングプログラムなんて、本来は単なるレンジャー技能養成のためのゲーム。本当に人が死ぬなんて馬鹿なことはない。わたしはみんなが想像している通り、時間を見ては地下に降りていた。トレーニングプログラムに修正を加えていたのよ。みんなにどんな死の恐怖を与えてあげようか、楽しみに想像しながらね」

恐ろしいことをいいながらも、表情をいっさい変えることはなかった。

「てめえ、ぶつ殺すぞ」

島田敏が凄む。

「別に死ぬことなんて、怖くないから。本来あるべき姿にもどるだけのことだし。それよりも、わたしを殺したら、脱出のためのヒントも得られなくなるわ。それでもいいなら、殺せば。抵抗はしないから」

第四章 ある少女の死

1

秦野怜の助言は確かに的確だった。

彼女曰く、プログラムに対して加えた修正というのは大きく分けて次の二点だ。

出題ミッシヨンの乱数配列変更。コンピュータが乱数を作り出す際には、その計算のもととなる種ともいうべき値が必要である。通常は、コンマ何秒まで切り出した時計の数値を利用する。彼女は過去のミッシヨンにおけるその種を調べ、それと実際に出題されたミッシヨンと照らし合わせ、傾向の把握をした。あるミッシヨンの時と同じ乱数の種を植え、今回に出題されることになるミッシヨンを絞り込んだ。自分が分かっているならば、相手を巧妙に地獄に追い込めないから。

もう一点は、ミッシヨン攻略に失敗した者が実際に死亡するように加工したこと。こちらが一番の目的だ。

ある程度の把握をしているといっても、知り尽くしているわけではない。そこまでの修正するには時間がなく、また、技術的にも難しい。このフロアを利用してのトレーニングプログラムなど、現在行われていないとはいえ、いつ設備メンテのさいにばれないとも限らない。だから彼女は、ミッシヨンの全貌把握の適わないことを、反対に楽しみと思うことにした。とはいうものの、軍事訓練の過去履歴と地形の計算、乱数表の絞り込み、などの結果を統合して再計算し、予想を立てているので、前述した通りかなりの的確なヒントを与えることが出来た。

「だいたいよ、殺されても構わないとか、おれたちに死の恐怖を与えたいとかいっておいて、いろいろと教えてくれるなんてなんだかおかしくねえか」

山田敬は激しく詰め寄った。

「別に黙っていてもいいけど。それがお望みなら」

秦野怜はやりわりかわすどころか、冷たい視線で挑発する。

「うるせえ、とっとと質問に答えろや」

秦野怜は少し間を置いてから、その小さな口を再び開いた。

「……一回、二回のミッションでもう全滅。それじゃ面白くないから。だってせっかく今日のために準備してきたんだから。……でも、桐野君たちが戦うことになったときはびつくりした。と同時にがっかりした。わたしは、桐野君が負けたら遠山君を残してクラス全員が死ぬって分かっていたから。普通に考えたら桐野君が負けるのが当たり前なものね」

「恐怖を与えながら、少しずつ殺していくのが目的ってことかよ」

山田敬の問いかけに、秦野怜は小さく頷いた。

「こうしてわたしが目的を話した以上は、どんなに正しいヒントを与えようと、不安な気持ちには拭えないはず。失敗は即、死に繋がるのだからそれは相当な恐怖なはず。わたしもミッションの全てを知っているわけじゃないし、間違えることもあるでしょう。攻略条件を正しく理解したからって、必ずクリア出来るとは限らないし。……でも、わたしがこうしていろいろと知っている以上は、どんなに疑っていいようにも、それにすぎらなければならぬ」

悔しいが確かに彼女のいった通りだった。

そして彼女のいう通り、いくら彼女が正しい助言を与えてくれるからといって油断は出来ないのである。

みんなが苦しんで死んでいくのを見ることが目的である、と公言しているのだ。仮に最後まで辿り着けたとしても、生きて地上に返さぬためにどんな大嘘をつくか分かったものではない。ゴールが近づけば、きっと彼女はそういう行動に出るつもりでいるのだろう。希望を絶望に塗り替えるために。全員を地獄に落とした時、はじめ彼女は笑うのかも知れない。

だから彼女の言いなりになるつもりはない。最終的に判断を下すのは自分たちだ。

なにがあっても、騙されたと恨み言をいうのはやめよう。

と、山田敬は思った。

もちろん、こんな殺戮ゲームに自分たちを巻き込んだ恨みはまた別だ。ここを出られたら、絶対にぶち殺してやる。島田敏とそう決めたのだ。

多嶋あ……

どこいつちまったんだよう……

山田敬の心は急に弱気になった。

多嶋健一とは、先ほどまで一緒だったのだが、どこかに消えてしまった。小便に行っただけ、帰ってこなかったのだ。

多嶋……

無事だよな……

死んでないよな……

自分らのような不良は、みんなから嫌われ疎まれていることは十分承知している。集団でいることでなんとか権威というものを保っていたられるのだ。しかし、遠山紀夫が死に、多嶋健一まで死んでしまったら、残るは自分と島田敏の二人きり。そうなったら、秦野怜だけではなく、いつ誰が自分を裏切っていくか分からない状態になってしまう。

「……っていうんならよ、次のミッション攻略どうすりゃいいのか教えるよ」

「この方向に進んでいるのなら、おそらくカギとなるのは光と音」

島田敏と秦野怜が並んで歩いている。

「アホか、具体的にいわねえと、分かんねえよ」

「過去のデータから弾き出されたワードがそうなんだから。どんなミッションなのか、わたしにも見当がつかないわ。ただね、過去の傾向を見ると、訓練兵に具体的なミッション内容をあらかじめ教えてあっても、クリア出来た者はほとんどいないみたい」

「さらっというんじゃねえよ。やばいじゃねえかよ。それじゃ、なおさら、具体的に教えるよ」

「わたしにも分からないっていったでしょう」

島田敏は返す言葉が見つからずに、口をぱくぱくとさせた。

「そのミツシヨンを攻略出来たら、まっすぐ通り抜けたところに休憩所があるはずから、そこで休んでいて。わたしはもう次の場所に行かないといけないから」

「おい、てめえ、なにいつてんだ、行くってどこへだよ、逃がすわけねえだろう」

「まとまっててくれていればよかったんだけど……」

秦野怜は木の裏に隠れた。

「逃がさねえっていつてんだろうが」

島田敏は手を伸ばし、木の向こうの秦野怜の服を掴もうとした。だがそこに少女の姿はなかった。

「畜生、逃げやがった、いなくなっちまいやがった」

逃げたというより風に溶けてしまったかのようだ。

「おい、おかしいだろ……逃げられるはずねえ。いまの一瞬で隠れられるはずがねえ」

「この木か地面に仕掛けがあるんじゃないか。あいつきつと、もつといるんなこと知ってんだよ。吐かせれば、すぐにここを出る方法だって分かるに違いない。絶対探し出せ」

しかしどうしても、木にも地面にも仕掛けを見つけることは出来なかった。

「畜生。死なねえぞ。おれたちだけは助かるんだ。そして地上に戻ったら秦野怜を見つけたして八つ裂きにしてやる」

山田敬は叫んだ。

2

深い森の中、進行方向を横切って流れている川があった。

幅は六、七メートルほど、少し緑色に濁っているが深さも膝ほどしかなさそうだ。

「渡れそうだな。おれがちょっと試しに渡ってみようか。足下はず

ぶ濡れになるから、なんなら、女の子はおぶってやるぞ。渡ったところで、高木と北嶋を待とう」

木々の隙間から、向こうのほうにいくつかのグループを見つけ、北嶋秀子と高木信二は情報交換のため、彼らに接触しに行ったきりである。

「濡れなくても川をずっと上るか下るかすれば、橋があるかも知れないぞ。それにひょっとして、ここを出られるんじゃないか」

金本健次郎が提案した。

「出られるかどうかは分かんないけど、そうだな、少なくともフロアの端を進むことが出来そうだし。それじゃ、おれがひとつ走りして、様子を見て……」

草を踏みわける音に多一たちはぎょっとして、振り返った。

高木信二だった。

「おい、いまのやつらから大変なことを聞いたぞ」

大事件だといわんばかりに、息荒く、顔も真っ赤だ。

「なんだよ」

「この事件の犯人は二年A組の生徒だったんだよ。犯人自身にももう動き出したプログラムを停止させることは出来ない。助かるためにはミッションをクリアしていくしかない」

「そんなことが……。まさかこの馬鹿げたことが、中学生一人の狂気が引き起こした犯行だというのか」

負けじとというわけではないが、必然、多一の声も荒くなる。

「よく知らないけど、そうなんだよ」

そこまでの恨みを買うようなことを、誰か一人でもしたのか。でも、クラス全員を巻き込むなんて……

「で、誰なんだよ、そいつは」

「それが、分からなかったらしい。橋田たちから聞いたらしいんだけど、橋田たちミッション途中で焦っていて、詳しくは聞けなかったんだと」

「死ね！」

突然の雄叫びに多一と高木信二は背後を振り返った。細かな木々の密集しているところから男が飛び出し、金本健次郎に飛びかかった。手にしていた巨大な棒のような物を振り下ろした。金本健次郎は横っ飛びにかわした。

男は多嶋健一だった。

手にしているのは大きなスコップだった。

「畜生、無茶苦茶な命令出しやがってよう。時間がないんだ……死ねよ、お前」

泣きながら、スコップを左右に出鱈目に振り回す。顔面にあたれば肉はえぐれ、酷い傷になるだろう。それどころか、当たり所が悪ければ即死するかも知れない。

「ぼくを殺せとでも指令が出たのか」

金本健次郎は声を荒らげる。

「誰でもいい」

「じゃ、ぼくじゃなくていいじゃないか」

「転校してきたばかりのお前が、まだ一番、ためらいなく出来るんだよ」

上段の構えからスコップが振り下ろされた。

「ふざけんなよ」

転校生は振り下ろされたスコップの柄を巧みに掴むと、多嶋健一の腹部に蹴りを見舞った。

地に転がった多嶋健一は手元に石の感触を得るや、すぐさまそれを掴んで起きあがった。近くにいた高德多一が視界に入った。標的が切り替わった。多嶋健一は凶器である尖った石を持った手を振り上げ、高德多一に襲いかかる。多一はその手を素早く押さえつけると、石を奪おうとした。二人はしばらく、睨み合い、もみ合った。

多一が突き飛ばしたことで、二人の距離があいた。まだ、多嶋健一の手には尖った石が握られている。

高木信二が多一に加勢し、横に並んだ。

「どんなミッションだか知らねえが、おれの仲間は殺させねえぞ。」

この嫌われ者の不良野郎。どつかよそに行っちゃまえよ」

その牽制の言葉と険しい表情に怖じ気づいたのか、多嶋健一はひきさがるそぶりを見せた。ミSSIONの制限時間を考えれば、焦っている多嶋健一は、きつとすぐそこにいる女子、吉野奈美に狙いを変えるに決まっている。そうしたら、後ろから飛びかかってやつつけてやる。場合によっては、ぶっ殺してやる。石を奪って、頭をがち割ってやる。

高木信二の予想は完全に外れた。

多一は瞬きをした。次の瞬間、石が多一の眼前にあった。迫ってきている。自分の顔目がけて落ちてきている。そうか、多嶋の持った石が振り下ろされてきているのだ。自分を殺そうとしているのだと、心ではそう感じているものの体はまったく動くことが出来なかった。

完全に虚をつかれたのだ。

石が真上から落ちてくる。

だが、その石が突然真横に移動をはじめた。

いや、石ではない、自分が横に動いているのだ。

多一は、高木信二の激しい体当たり横に横に吹っ飛ばされていた。スローモーション。地に倒れ込みながらも、神経細胞は網膜に焼き付いた映像を一枚一枚克明に脳へと運んでいく。その出来事が、拳銃で撃たれたかのように脳味噌に着弾していく。

多嶋健一の頭部を白い光線が貫いた。

と同時に、振り下ろされた手が急にとまるはずもなく、手に握られた石の尖った部分が高木信二の頭蓋骨を一瞬にして打ち砕いていた。

二人は同時に、お互いに向けて倒れた。よりかかりあうが、ぐにやりと体が回転して、横に、それぞれ別方向に倒れた。

すでに二人とも絶命していた。

全く同じタイミングで、二人の頭部からは血がどくどくと流れ出てきた。

多一はしばらく無言だった。

やがて、口を開いた。

「なんだよ、おれなんか庇って。それに、ちょうど多嶋、時間切れだったじゃん。高木、お前さ、なにやってんだよ。なに無駄に死んでんだよ。……この馬鹿野郎」

狂ったように叫び続けていた。

「誰でもいいから殺せなんて、無茶苦茶もいいとこだよ。まったく本当になんて時に転校してきちまったんだ」

金本健次郎ははきすてるようにいった。

しばらくして少しだけ冷静になると、多一は多嶋健一の持つていたスコップで穴を掘り始めた。金本健次郎はふてくされたように寝転がってしまい、動こうとしないので、多一は半ば意地になって一人で黙々と穴を掘り続けた。あまり深くは掘れなかったが、なんとか二人を完全に土の中へと埋葬することが出来た。

肉体の疲れに、金本健次郎の隣に大の字に横たわった。

疲れてしまえば心の辛さも悲しみも忘れられるだろうと考えていたのだが、そうはならなかった。

鬱蒼とした森。

枝だと枝だが折り重なり合ってカーテンを作っている。その隙間から見える偽物の青空。偽物の白い雲。

多一は泣いた。

だが、金本健次郎の台詞ではないが、そうそう悲しんでいられないのも事実だ。

とはいえ、この先どうしていけばいいのだろう。

しかし、田子里美といい多嶋健一といい、なんという運の悪いミッシヨンが回ってきたのだ。

どこどこに行け、何々を探せ、というのならまだ良い。最悪、失敗した者が死ぬだけだ。しかし、誰々を殺せなどというミッシヨンが自分に回ってきたら、果たして自分は生き残るために、そんなことが出来るのか。

多一と奈美が川の上流を探索に出かけ、かなりの時間が経過していた。ここに帰ってくるはずの北嶋秀子とはぐれなため、一人留守番を仰せつかった形の金本健次郎であったが、彼は特になにをするわけでもなく、ずっと寝転がっていた。

微かな足音に、びっくりして飛び起きた。

小柄な少女、秦野怜が立っていた。

「なんだ、あの無愛想な顔のやつか。一人で行動しているのか。よく無事だったな。こっちはもういろいろあつて、なにから喋ればいいのか困っちゃうくらいだよ。本当に、死ぬとこだったんだから」「誰かわたしのこと喋っている人いなかった？」

「死ぬとこだったってんだから、なにがあつたのくらい聞けえ！……別に、お前のことどうのこうのいつてるやつなんて見なかったよ」

「そう」

「どうした。見つけ見つけられのミッションかよ」

「そんなところ」

彼女の、島田敏たちとのやりとりを知っていたならば、こうも平然と話すことは出来なかっただろう。

「とかなんとか、油断させておいて、いきなりぼくの首をグサリ……なんてつもりじゃないだろうな。おお、おっかないおっかない」

金本健次郎は腕を組んで、寒そうに震えてみせる。

秦野怜の目だけが動き、金本健次郎の仕草、表情の変化を追っている。

「なんだよ、むすつとした顔で人の顔をジロジロと見やがって」
無然とした表情で少女を睨む。

「あなた、面白い人ね」

顔色一つ変えず、淡々とした口調。

「なんだよ、なにが面白いつてんだ」

「喋っていることと表情筋の微妙な連動感と、体温上昇率の……」

「小難しいいいかたすんなよ。単に表情が顔に出やすいつてことだろ。なんだ、そんなことか。ちっちゃい頃からいわれてきたよ。でもお前なんか面白くないなんていわれたかないね。今日初めて会ったばかりでなんだけど、お前のほうがずっと変人だよ。だいたいなんだその暗い顔。表情は全然変化しないし。ちつとは笑ってみるよ」

「笑い方なんて知らないもの」

「はあ？ ほんつと変なやつだな。こうすんだよ」

金本健次郎はそういうと、にっこり笑顔を作った

「……こう？」

秦野怜の唇の右端が僅かにつり上がる。

「違う！ 駄目だ、もっともつと……こう！」

金本健次郎は破顔した。何故か両手を腰にあてている。

「……こう？」

秦野怜の唇の両端がやや上がるが、慣れていないためか、痙攣してしまっている。

「お前……愛想が最悪なわりには、えらく付き合いのいいやつだな……まだまだ、そんなんじゃない駄目だ、さらに、目ん玉ぐしゃぐしゃにして、歯茎を究極的にむき出して、イエーイって感じでブイサインを作つて、そして顔は、こう！」

すっかり真顔に戻った秦野怜が、じーっと観察していた。

「お、お前、そもそもここになにしに来たんだよ」

金本健次郎は咳払いをした。

「予想されるミッションと、その対策を伝えに来たのよ」

「なんだよそりゃ、コンピュータから情報を盗めたのか」

「そんなところ。この進路で行くのなら、おそらくは場所探しのミッションが出るはず。木の間、向こうのほうに崖が見えるけど、その崖の形状に注意していれば探せると思う。とりあえず、分かっているのはそれだけ。それじゃ、頑張つて」

「お、おう、なんかよく分かんないけど、お前もな」

歩き出す秦野怜に、金本健次郎は右手を上げて小さく振った。

ほとんど入れ替わりに、北嶋秀子が戻ってきた。

「ちよつと、転校生、いまあの娘となに喋ってたのよ。離れてて、よく聞こえなかった。それにあんた、こんな時になんだか歯茎を剥き出して変な顔で笑ったりしてて、真性の馬鹿なんじゃないの？」

「うるさいな、こんな状況だからこそ、人間は明るく乗り切らないといけないんだよ。それを、あの根暗に教えてたんだよ。あいつ、笑うとムチャクチャ可愛いのだ。で、なんだ、なにを話してたかだつて？ ミッション攻略のヒントだつてさ。クラッキングで入手したんだと。それ伝えたら、とつと行っちゃったよ」

「やっぱり」

北嶋秀子の表情が陰しくなる。

「なんだよ、やっぱりつて」

「それだけじゃなかったでしょう。なんかもつと大事なこと」

「いつてないよ。……いや、あいつばくのこと変人だつていいやがった」

「もう、馬鹿とは話が噛み合わないよ。さっき恵と会って話を聞いたんだけど、どうもあの娘がこの件の張本人らしいのよ」

「なんだつて」

「しかもね、堂々としたもので、みんなが大嫌いだから今日のことを計画したんだ、みんなを恐怖に陥れてやるんだとかいつていたらしいよ」

「おい、それじゃあ、あいつはぼくたちが全滅するよう、嘘を教え たつてのか」

金本健次郎の表情筋が激しく変化した。

「それがさ、さっぱり分からないんだよ。いつてることが凄く的確なんだつて。まあ、そうだということは、もし犯人じゃないにしても、なにか知っているのは間違いないつてことだけだ」

「でも、なんか悪いこと考えているならなんで正直に教えてんだよ」

「うん。希望を持たせておいて絶望に落としこむためじゃないかつ

て、みんなは話してたけど……」

などと話しているところへ、多一と奈美が戻ってきた。

「駄目だった。川を上ってみたけど、このフロア自体の行き止まり、ただの壁だ。水源もなにも単にぐるぐる回っているだけだ。凄く険しくて、壁沿いに進むなんてことも、とても出来やしない。まったくの、無駄足だったよ」

「お疲れ。多一君、奈美、そんなとこまで行つてたんだ。でも、そう分かっただけでも無駄じゃなかったじゃない」

「ところで君ら、秦野怜に会わなかったか。あいつ実は……」

金本健次郎は北嶋秀子の言葉尻に重ね、興奮した面もちで語り始めた。

3

「やつとしんきくせえ森から出られたぜ」

島田敏は額の汗をぬぐった。

山田敬、島田敏、鳥羽恵の三人。

鳥羽恵は女子だし、男子二人は日常の喫煙のため、三人ともへとへの様子。

外国映画の荒野を思わせるような乾いた大地が広がっていた。遙か遠くには切り立った崖が見える。なんだか、いまにも原住民狩りの白人が馬に乗ってあらわれそうだ。

ジャングルのような森のすぐ隣にこのような地形があるのは不自然極まりないが、彼らはそれほど驚きはしなかった。作り物の世界であることは充分に分かっていたから。

ここも広大な地形に見えるが、どうせ半分は機械的な演出なのだ。自分らは所詮は踊らされているだけなのだろう。分かっているにしても、踊らされる以外になにも出来ないのだから、これほど屈辱的なことはない。

「多嶋、結局こなかったな」

「どっかで、ぶるって動けねえでいるんだよ」

彼らは、多嶋健一が制限時間内のミッション攻略に失敗していたことを知らなかった。

彼らは歩き続ける。

山田敬は、遠くに他の生徒らの姿を見てほつとする。バラバラのほうがよいと、自分でいい出したことだが、やはり人を全く見ないでいると不安になる。もう、自分らだけなのではないかと。

しばらく歩いていくと、建物が見えてきた。

三人が感じた共通の思いは、不自然の三文字。荒野のど真ん中に、突然、超高層のオフィスビルが出現したのである。

どうせまた、単なる映像だ。実際には一階部分が作られているだけ。階段やエスカレーターなどどこにもなく、エレベーターの扉も開かない。決して上のフロアへ行くことなど出来ない。大きなガラスの自動ドアを潜り中に入ると、まさしく予想した通りのつくりだった。

別にこのビルに入る必要もなかったが、休憩したかったのと、喉を潤したかったのだ。

ジュースの自動販売機があったが、カード払い専用機だった。彼らの持っている学生証カードで、校内設置の自動販売機でジュースを買うことが出来るが、差し込んでみてもここの自動販売機は全く反応しなかった。水だけは、無料でいくらかでも出て来た。いつの水だか分かったものではないが、特に嫌な匂いもしなかった。

オフィスビルの一階には、店舗がたくさん入っている。

突き当たりに管理人用の休憩室があった。

入り口付近に簡易ベッドがいくつか並んでおり、奥は床が盛り上がって三畳ほどの畳敷きになっている。

「もう、限界」

鳥羽恵は部屋に入るなりすぐそばのベッドにうつ伏せに横たわり、体をマットに沈めた。

島田敏と山田敬は奥まで進み、畳の上に大の字になった。狭いため、二人の手足がぶつかり合う。

山田敬は目を閉じた瞬間に、疲労から意識が遠のきかけるが、すぐに島田敏の囁き声に起こされる。

「なあ、鳥羽って結構いい体してるよな」

「確かにスタイルいいよな。……なんだよ、こんなときに馬鹿」

と文句をいながらも、考えていることの想像はつく。こんな状況に追い込まれた恐怖を払うために、あえて日常的な会話をしようとしているのだろう。しかしそれは単なる山田敬の思い込みだった。「やっちまわないか」

再び島田敏の囁き声。

心臓が口と耳から飛び出しそうになった。

山田敬は一瞬自分の耳を疑う。

「やるって……なにをだよ」

分かっている。いつていることは理解出来る。しかし、山田敬はそういうしかなかった。

「馬鹿か、女をやるっていったら、決まっているだろ。セックスだよ。お前、童貞だろ」

山田敬はしばらくの沈黙の後、恥ずかしそうに頷いた。

「おれもだ。……いつあいつが死んじまうか分からないんだ。生きているうちに、いつちよやっちまおうぜ」

「お前だって、おれだって、いつ死ぬか分からないだろうがよ」

「だから、なおさらのことだろ。女のアソコによう、チンポコをブチ込んでみたいと思わないか。中に思い切り精子出してみたいと思わないか。どんな感触なのか、一回も入れたこともないうちに死ねるかよ、なあ」

連発する生々しい卑猥な表現に、山田敬は思わず唾を飲み込んだ。確かに経験してみたい。せめて、本物の女のあの部分がどのようになっているのか、見て、触ってみたい。それは常々思っていることだ。

しかし……

「考えたら、駄目だ、おれもう我慢出来ねえ」

島田敏は立ち上がり、床に降りると靴も履かずに鳥羽恵に歩み寄った。

その足音に、うとうとしていた状態から覚めた鳥羽恵が上半身を上げる。

「どうしたの」

島田敏は、質問に答えようとせず、いきなり鳥羽恵の頬を平手打ちした。

彼女はいきなりのことに、状況が理解出来ない。

島田敏もベッドに上がり、鳥羽恵の上にまたがった。

スカートの中に荒々しく手が侵入し、ようやく彼女は状況を理解した。

「馬鹿野郎」

叫んだ途端、また平手が飛んできた。

手で口を塞がれた。もう片方の手が、執拗にスカートの奥のほうへ入って行こうと暴れる。彼女は脚をぎゅっと閉じ、必死に抵抗するものの、島田敏の全体中にのしかかられ、どうにも身動きがとれなかった。

山田敬は立ち上がった。

ベッドの上にいる二人の姿を、しばらく見つめていた。

鳥羽恵の表情、島田敏の姿、行為に、山田敬の心の中に、むくむくと起き上がってくる感情があった。

なに…… やってんだよ、島田……

分かってんのかよ。

おい……

山田敬は床に降り、二人のベッドに向かう。

「島田！」

山田敬は叫ぶが、すっかり興奮した島田敏の耳には全く入らなかった。

島田、この馬鹿……

お前のやろうとしていることは、単なる強姦だ。

不良だろうがなんだろうが、やっちゃいけねえことだ。
やめねえのなら、おれがお前をブチ殺してやる。

山田敬はポケットの中に手を入れた。ナイフの感触を確かめた。
鳥羽恵の激しい恐怖の形相。いままでそれは、島田敏に対して向けられていた。だが、なにかが変化していた。鳥羽恵はなにを見ている。なにに恐怖している。山田敬は彼女の視線の先を追った。壁にかかっているスクリーンボード、そこに文字が表示されていた。

MISSION

「おい、島田」

山田敬の叫びに、ようやく不良友達は顔を上げた。そして、山田敬の顔を見た。その表情、視線に気づき、そしてスクリーンボードの文字に気づいた。

島田敏の顔が、恐怖に引きつった。

次の瞬間、今度は激痛に顔を歪めた。

下から激しく鞑丸を蹴り上げられたのだ。

「いてえ」

叫んだ。

「てめえ、なにすんだよ」

「なにすんだよじゃないよ。こんなときに、ふざけたことしようとして……生きて地上に出たなら、絶対に引きちぎってやるから」
文字が消え、そしてまた現れた。

モンスターと戦い、倒すこと

制限時間 三十分

「なんだよ、モンスターって」

「どこにもいないじゃねえかよ」

どうやって、そんなものを探せばいいのだ。

「お前が鳥羽に殺されりやいいんじゃねえのか」

「山田、てめえなにいつてんだよ」

「レイプしようとしてたじゃねえかよ。こいつにや、お前が怪物に見えたんじゃねえのか」

鳥羽恵を指差す。

「馬鹿にしないでよ、こんなやつが、そんな怖いわけないでしょ。ちようどぶつとばしてやろうと思ってたとこだよ」

鳥羽恵は虚勢を張った。

「うるせえ、ほんとにやつちまうぞ」

「また蹴りたいの」

「おう、お前ら喧嘩している場合か」

山田敬ではない。別の、男の声だった。

誰だ……

ドアが開いた。

男が入って来た。

それは見慣れた、よく知っている顔だった。

ほんの数時間前に会ったばかりだというのに、とても懐かしい顔であつた。

「村上先生」

鳥羽恵が、驚きと安堵のないまぜになつた複雑な表情で叫んだ。

「おい、やっと来てくれたのかよ。おせえよ、先公よう。……コンピュータが狂つて暴走はじめてよう……もう何人も殺されちまつたんだよ。なんでもっと早く来てくれなかったんだよ」

「まさか、お前らがここまで来るとはなあ……。おれのところに来たのがまさかお前らとはなあ……」

先生は島田敏の言葉には一切返答せずに、淡々と自分の喋りたいことを喋った。

なんだか様子がおかしい。

助けに来てくれたのではないのか。

「制限時間、あと二十八分ほどか。……どうした、はやくかかってこいよ」

先生は笑いながら、スーツのポケットに両手を入れたまま三人に近寄って来た。

「おい先公、いったいなにをいつてんだよう。わけのわかんね……」
ポケットから出た右手が、島田敏の首の前をすつと水平に動いた。
ただそれだけだった。

島田敏の首から、大量の血が噴き出した。

信じられないといった表情を浮かべたあと、次いで苦しみの表情へ、と変化したところで島田敏の命は終わった。結局最後まで童貞のままであった。

魂を失った肉体は、そのまま床に倒れた。

血はなおも噴き出し続け、床に広がっていく。

山田敬は、鳥羽恵の手を取り、走り出していた。先生のわきを擦り抜け、ドアの外に飛び出した。攻撃されなかったのは、おそらくわざと見逃したのだろう。そうとしか思えない。彼らを精神的に追いつめて楽しんでいるのだ。別に追わなくてもいいのだ。制限時間という枷が彼らを追いつめていくことになるのだから。

モンスターとは、自分らの担任教師のことだった。

一瞬で島田敏の命を奪ったことから、なにか特殊な訓練を受けた者なのだろう。確かに彼らにとっては怪物以外の何者でもなかった。畜生。

先公もグルだったんだ。

秦野怜は先兵だか監視役だかだったんだ。

「ほんとに、なにがどうなってんだよ」

と叫んだ瞬間、山田敬は足をもつれさせて転んでしまった。
立ち止まる鳥羽恵。

反対からは、村上先生がゆっくりと歩いてくる。両の手をポケットに入れたまま、少し猫背気味の姿勢で。

「止まるな。行け。走れ」

山田敬は怒鳴った。

その言葉に彼女は走り出す。

地震。

かなり大きな地響きに、鳥羽恵は倒れそうになる。また立ち止まって、両足に力を込めて倒れないようバランスをとった。

この激しい揺れの中、先生は平然としている。

彼らの前に、信じられない光景が出現した。

壁、床、天井に亀裂が生じ、回転を始めたのだ。左右、そして前後に。

このビルの一階は、サイコロのように正方形のブロックが無数に分かれていたのだ。そしてそれが、各自に移動を開始したのである。左右への回転であれば、ただ自分の体が床を転がるだけで済む。

前後への回転は、それに合わせて自分もバランスを保って移動をしないと、ぶつかり合う壁や天井や床との間に押しつぶされてしまう。

なんなんだ、これは。

山田敬は心の中で不可解さに叫ぶ。

このような構造を誰が考えたのか。兵士を鍛えるためのトレーニングだとしても、こんな非現実的な仕掛けでなにが鍛えられるものか。

こんなものは、単なる障害物ゲームでしかない。

しかしその無意味な仕掛けが、彼らの恐怖心を煽る拔群の効果を発揮していた。

山田敬は危うく先生に追いつかれてしまうところであったが、間一髪、ブロックの移動により逃げる事が出来た。

先生の姿、いや、それだけではない、鳥羽恵の姿も見失っていた。急に真横に転がりだしたブロックに、バランスを崩し、壁にもたれかかった。次の瞬間には、壁であった部分は床となり、山田敬は這いつくばる形となった。顔を上げると、向こうに鳥羽恵の姿があった。

鳥羽恵と、そして……

「鳥羽」

叫んだ。

「どうなってんの。わけ分かんない」

鳥羽恵は混乱し、頭をかかえていた。

「逃げる、次にそれが動いたら、いまいるところから、お前から見て右方向に進め」

山田敬は、鳥羽恵のすぐ隣のブロックに彼らの担任教師の姿を見たのだ。

だけど、逃げてどうする。

制限時間を迎えたら、おれたちは死ぬんだぞ。

でも、立ち向かってどうする。

勝てるのか。

勝てっこない。

また、激しい振動とともに、ブロックの回転、移動が始まる。

回転する壁に視界を阻まれ、次に視界が開けた時、村上先生と鳥羽恵とは同じブロックにいた。

鳥羽恵の首には、ナイフが突き立てられていた。

その表情は力なく、虚ろであった。頸動脈を切断されたらしく、首から激しい血飛沫が上がっていた。

「右に逃げろって行つたのによ、この馬鹿」

鳥羽恵は倒れると同時に、ブロックの回転に巻き込まれていった。嫌な音。

なんの音が考えてみるまでもない。肉と骨が砕け、潰れる音。

山田敬は狂わなかったために悲鳴を上げた。雄叫びで体内に宿る異常さに対する不快感と、絶望感から来る恐怖とを押し流そうとした。

そして次の瞬間、鳥羽恵の全く原型をとどめていない姿を目の当たりにする。

壁に張り付いた赤黒く潰れたなんだかわけの分からないもの、これがいままで鳥羽恵だったものなのだ。

ははははは。

島田の馬鹿野郎。

あんなのに、欲情してたんだぞ、お前は。

あんなのアソコにチンポコをブチ込もうとかいってたんだぞ、お前は。

馬鹿じゃねえのか。

なんだよありゃあ。

島田。

鳥羽あ。

ははは。

おれは狂ってるなあ。

狂ってるなあ。

「待ってる、そっち行くから」

山田敬は自分を狂わすことが出来なかった。村上先生の姿を目にした途端、脱兎のごとく反対方向に走り出していた。間一髪、回転するブロックに潰されずに移動することが出来た。

「なあ山田、先生優しいだろう。こうして追っかけてあげているんだからな。……でも、いい加減にしないと、先生隠れちまうぞ。そ

したら、制限時間を過ぎた時点でお前の負けだぞ。いいのか」

「いわれなくても分かってんだよボケ」

あんな、全く見えないナイフ捌きに対してどう立ち向かえというのだ。

「先公、なんでこんなことをするんだよう。なんでおれたちが殺されなくちゃいけないんだよう」

「おれに勝ったら教えてやるよ。……もうこの仕掛け飽きたから、やめるか」

ブロックの位置がもとに戻り、激しい振動が停止した。

超高層ビル一階のフロアは、山田敬たちが入ってきた時と同じ状態になった。

山田敬は中央の噴水のあるところから、自動販売機のほうへ向かう通路上に立っていた。

突然電気が消えて真っ暗になった。

足音が聞こえてきた。

誰の足音か考えるまでもない。

山田敬は手探りで壁を探し、ドアを見つけ、そしてノブを探り出してドアを開いた。中に入り、ドアを閉めた。鍵があればかけたかったが、残念ながらそういうドアでは無かった。

部屋の中も真っ暗だ。

両手を前に出しながら、よろけるように隅っこまで歩き、そこにしゃがみ込んだ。

ドアを閉めてもなお、通路の足音が響いて聞こえてくる。

震えていた。

山田敬は体を震わせていた。

叫びだしそうになるのを必死でこらえていた。

死にたくない……

死にたくない……

闇。

真っ暗。

でもおれには心がある。

死んだらこの暗闇が永遠に続く上に、その暗闇を暗闇と思つ気持ちすら永遠に感じる事が出来ない。

永遠になにも見ることが出来ない。

永遠に誰とも話すことが出来ない。

永遠に笑うことも出来ない。

食べることも出来ない。

やだ……

いやだよ……

死にたくない……

おれ、死にたくないよう……

畜生。

死んでたまるかよう。

足音が大きくなってくる。

自分の場所など、きつとお見通しなのだ。

もうじき、ここに現れるのだ。

足音が止まった。

きつと、ここに辿り着いたのだ。

ドアの前に立っているのだ。

静寂の中、自分の呼吸のあまりのうるささに、呼吸を止めた。

自分の心臓の音のうるささに、胸をおさえるほど音がどんどん大きくなってくる。

ドアの開く音に、山田敬はびくりと体を震わせ、思わず悲鳴をあげそうになった。

ドアが閉じられた。

微かな息づかい。

入ってきたのだ。

ついに、やつがこの部屋に入ってきたのだ。

「じゃ、この部屋でいいな」

山田敬は再び体をびくりと震わせた。

「息を潜めていようと、その隅っこにじっとしてるの、よく見えているし、心臓の音、血の流れる音もよく聞こえているんだよ。

……訓練されているんでね。で、もう一回尋ねるけど、この部屋でいいのか」

先生の足音が狭い部屋の中を反響する。

こちらに近づいて来ているのだ。

「なにがだ」

山田敬は叫んだ。隅にうずくまり、震えながらも威嚇をするように激しい口調で。

「決まってるだろ。この部屋がお前の墓場ってことでいいんだな、って確認をしているんだよ」

どくん。

山田敬は心臓が大きく跳ね上がる音を聞いた。耳で聞いたのか、

血液の流れを脳がそう捉えただけなのかは分からない。

歩み寄る足音がとまった。

山田敬の脳に先生の姿が映っている。その顔は笑っている。獲物を引き裂くことへの愉悦の表情。

そうだ、きつといま、先生は笑っている。おれのことを見下ろして笑っている。

きつといま、先生はナイフを振り上げている。

どくん。

きつといま、先生はナイフを振り下ろしている。

きつといま、ナイフがおれの首に突き刺さろうとしている。

「畜生、このくそつたれが」

自分にこんな大声が出せたのか。内蔵が飛び出すほどの大絶叫であつた。

ぐ、と呻き声が聞こえた。

このあと山田敬の体を動かしたのは、本能……そして秦野怜の助言であつたのかも知れない。

ポケットに手が伸び、なにかを掴んでいた、取り出し、目の前に差し出していた。

コンパクトな割に強力なペンライトだつた。

その光が怪物を照らし出した。

怪物は軍人が格闘に使うような大きなナイフを手にしていた。もう片方の手は、唐突な光に苦悶の表情を浮かべるとほとんど同時に自分の顔を覆い隠した。

その手からナイフが落ちた。

山田敬はそのナイフを拾い、ペンライトを投げ捨て両手で掴み、コンマ数秒の躊躇すらなく、怪物の胸に突き立てていた。

怪物は後ろに倒れた。

転がるペンライトが壁を照らしているその反射により、怪物の姿をかるうじて確認することが出来た。

それは、びくりとも動かなかつた。

目を開いたまま、死んでいた。

特殊な訓練により、あまりに視力や聴力が優れていたことが、逆に欠点となってしまうたのだろう。

「教えてくれるって、いつていたのによ。先公」

山田敬はゆっくりと立ち上がった。

足ががくがくと震えている。

もしも先生が生きていたとしても、勝負に勝った自分に対して本当に真実を明かしたのだろうか。

ここは軍隊の施設。先生は、軍の関係者だったのだろうか。この中学校の教師は、みんな軍の関係者なのだろうか。それともなにかの実験のために、おれたちを売ったのか。軍だか、政府だかに。

「くそう。こんなところで死んでたまるかよ。必ず生きて地上に戻って、この狂った行いの全部を暴露してやる」

山田は誰にぶつけるでもなく、吐き捨てるようにいった。

秦野怜の顔が頭に浮かんだ。

「あいつもどうせ、先公らの仲間なんだ。澄ました顔の、人を見下したような顔の、冷たい顔のむかつく顔の女だけど……」

しかし、考えてみれば、また彼女の助言により命を救われた。彼女がいったいなにを考えているのかは分からない。

うまく接触して、味方にするかは出来ないだろうか。

仲間にしてもらうことは出来ないのだろうか。

そうして、おれだけミッション免除してもらって。

死んで行くのを楽しむ側に回って……

馬鹿。

馬鹿。

おれは馬鹿か。

おれは最低なやつだ。

でも、じゃあどうすればいいってんだ。

なにを信じればいいんだ。

おれは……

なにかの引き合わせだったのだろうか。

山田敬は、それからほどなくして、秦野怜の串刺しになった死体を見つけたのである。

地獄のような目にあったオフィスビル、そこを出て、荒野を崖のほうに歩いていくと、そこにまるでオアシスのような水の溜まり場があった。畔に、これもまた不自然なことに教会があった。ここに避難してくる要人の長い暮らしの間には、懺悔をする場も必要である。ということだろうか。

教会の入り口に、橋田義人たちがいた。山田敬は声をかけたが、彼らは恐ろしいものでも見たかのように、走って逃げて行ってしまった。

いったい、なにがあるんだ。

山田敬は教会に入った。

真っすぐ進んだ。

木の扉が軋む音をたてて両側に開く。

ステンドグラス。

そこから漏れ入る、様々な色に輝く光。

等身大のキリスト像があった。

キリストが両手を広げ、片方の手には十字架を持っている。そんな像だ。

しかし、その手に握られているはずの十字架は、隠れてしまっ
見えなかった。

キリスト像は斜めに倒れている。そして、その十字架を持っ
るほうの腕が、肘が完全に隠れてしまっているほどに深々と、な
かに突き刺さっていた。

その腕を、赤い液体が伝い、像の胴体を伝い、足下を伝い、床を
染めていた。

誰かが像の太い腕に胴体を貫かれているのだ。

ステンドグラスからの光に逆行となり、シルエットしか見えない。
スカートから、女子であることはすぐに分かった。

小柄な少女。

誰だよ……

おい……

まさか……

山田敬は近づいていく。

山田敬の手が震えていた。

少女は目を閉じていた。

少女の小さく開いた口から、一条の血が流れていた。

ちようど心臓のあるあたりを、キリスト像の腕で串刺しにされていた。

「誰がやったんだ。……誰がやったんだよ。誰がやったんだよ。馬鹿どもが、生きて出たくねえのか。助かりたくねえのかよ。秦野怜が犯人かどうかなんで、どうでもいいだろ。知ってんだから、秦野怜はミSSIONのこと知ってんの事実なんだから。助かってから判断して、こういうことしろよ。みんな死ぬぞ。誰も助からねえぞ。」

馬鹿野郎」

山田敬は絶望した。

誰かが錯乱状態になったか、どうしても秦野怜を許すことが出来ず、殺害してしまったのだろう。それとも、そのようなことをさせるミSSIONが出たのか。

いずれにしても、このような残忍な殺し方をする必要があるのか。

秦野……

突然パイオルガンの音が鳴り響いた。

単に神経をいらつかせるだけの不協和音。

部屋の右に、大きなスクリーンがあった。

MISSION

山田は仁王立ち、スクリーンを睨みつけた。

第五章 暴走加速

1

夕日が長い影をつくる。壁か、どこかにある装置に光が反射しているらしく、別方向からの二条の光の作り出す影が、交差している地点。

その、交差しているところの立ち、その影を作り出すものとなっている、切り立った崖と、沈みゆく巨大な太陽を見上げた。

「あれだ」

遠くからは分からなかったが、見上げるこの角度からの岩の形は、まさに咆哮する龍であった。

「おい、時間は？」

多一に促されるよりも先に、奈美は自分の腕時計に目をやっていった。

「いま、ピッタリ一時間」

制限時間だ。

果たしてこれでいいのだろうか。

この場所で合っているのか。

もしも間違っていたら。

もしも秦野怜が嘘を教えていたのだとしたら。

彼らは真つ赤な夕日をただ見つめていることしか出来なかった。

「大丈夫だと思う。あれから、十分近く経ったから」

奈美の言葉に、みな大きく息を吐いた。

金本健次郎は地面に両膝をつき、大きく肩を落とした。

高德多一は後ろに倒れ込み、大の字になって、なおも太陽と龍を見ている。

吉野奈美は両手を君で高くあげ、精一杯の伸びをした。

北嶋秀子はしばし無言で立ちつくしていたが、不意に奇声をあげ、叫んだ。

「咆哮する龍を探せ」を、制限時間ぎりぎりでクリアしたのである。

「助かった」

あらためて、多一は呟いてみる。

秦野怜に助けられた。キーポイントは地形、と対象の限定をしてくれたから、見つけだしようがあったのだ。

しかし、今回のミッションは沈みかける夕日があればこそ攻略することが出来たのだが、太陽は刻々と動き、そしてもうじき日が暮れる。果たして今回出題されたミッションは、夜であればまた別のものになっていたのだろうか。そうも思えない。秦野怜の助言だけでなく、自分たちは非常に運がいいのではないか。

崖沿いに少し歩くと、小さな建物が見えた。

薄暗闇の中、だんだんとはつきり見えてきた。それは丸太で出来ている小屋だった。

「日がくれたら、懐中電灯程度じゃなにもできないからな。きょうは、あの小屋で寝よう」

ミッションには制限時間があるが、このトレーニングそのものには制限時間はないと、ルール説明に書かれていたのだから、文句をいわれる筋合いはない。

太陽はもう崖のむこうに完全に姿を隠してしまっていた。滲んだ空の色からそこに太陽のあることが分かる程度である。

腕時計の示す時間から考えて、どうやらこの映像は現実の時間と同調しているようだ。地上の世界と同じように太陽が昇り、そして沈んでいくのだろう。

太陽といってもコンピュータの作り出す映像だ。この夕焼けも。そして、ぼつりぼつりと姿をあらわしてきている、この星々も。

このフロアの動力を停止してしまえば、ここは完全に漆黒の闇となってしまうだろう。こんな死の世界に、さらに盲目に等しい状態でぼつりだされてしまうことなど、多一には恐ろしくて想像もしたくなかった。

大量の缶詰が、逆さまにした袋から滝のようにこぼれ落ちた。

缶と缶がぶつかりあう音。缶が床にぶつかる音。

「よし。ここでずつと隠れてようぜ。動かなければミッションに遭遇することもないんだろうから」

「ホントーに助け来るのかなあ」

「心配いらねえよ。きつと、長いこと使われてなかったからコンピユータが狂っちゃっただけなんだ。そんなことくらい、上で分らないわけがないだろ。待てればそのうち絶対に助けが来るって。

缶詰こんなに持ってきたし、何日だってここにいりゃいいんだ。でも、ここ便所ないから、ウンコは外でしろよな」

「やだ、そんな汚いこといわないでよ」

二年A組の生徒、横田五郎、本宮梅子、里中加奈子の三人だ。

彼らは秦野怜が犯人であるという情報を知らなかった。

SDルームを出てから、ほとんど人に出会わなかったからだ。

唯一出会ったのは、森本孝司だけだ。彼は狂ったように、「虹の貝殻をよこせ」と叫び、刀を振り下ろしてきた。仲間の一人、矢部定が殺された。残る横田五郎たち三人は、森本孝司を殺した。

ここは、崖のすぐ近くにある、小さな丸太小屋である。

もつじき太陽が沈むというころ、たまたまこの小屋を見つけ、ここに籠城することに決めたのである。

缶詰は田子里美が「パラダイス」と呼んだ街の、スーパーから調達してきたものだ。

三人は床に座り込み、雑談に興じていた。

楽しそうな表情。ちよつとしたことでも大げさに笑った。つまりないことでも、つまらなさにつつこんで大げさに笑いあった。

本当に楽しいわけではない。

狂わないために狂っているのである。

なんの前触れもなく、激しい音を立てて扉が開いた。

三人の視線が一斉に集中した。

転校生、古柴座夢が立っていた。

「おれのミツシヨンだ」

古柴座夢は低くぐもった、しかしはっきりとした声でいった。

「お前らを殺せとさ」

三人の表情に変化はなかった。それよりも先に、体が動いていた。立ち上がり、同時にポケットからナイフを取り出し、古柴座夢に飛びかった。

油断はしていなかった。それがすなわち「死」であることは、矢部定が自分の命をもつて教えてくれたから。

こちらは三人のうち二人が女。しかし、三人とも凶器を手にしている。対して相手は一人だし、しかも丸腰のようだ。多少、体格がよかろうと、仮に武道の心得があるうと、同じ中学生だ。

横田五郎は状況を読み間違えていた。

「同じ中学生」ではなかったのである。

だがここでの一瞬の判断が正しかろうと正しくなかつた、彼の数瞬後の運命をなんら左右するものではなかった。

横田五郎は軽く跳躍しながら、振り上げたナイフを古柴座夢の顔面に向けて振り下ろそうとした。これが横田五郎が人生で最後に行ったこととなった。横田五郎の首から、真っ赤な飛沫が噴き出た。爆発する間欠泉のように、激しい血の飛沫であった。首に、古柴座夢の手刀が突き刺さっていた。横田五郎の意識は一瞬にして吹き飛び、永遠に戻らぬものとなった。

手刀が引き抜かれると、すでに魂を失った肉体は床に転がった。

本宮梅子は甲高い金属的な声で恐怖の絶叫をし、全身が竦んで座り込んでしまった。

古柴座夢は右足を高く振り上げた。

十四年の人生！

古柴座夢は右足を激しく振り下ろした。

親の冷たさ……親の愛を得たくて……不良グループと付き合つて

……親に殴られ……見放され……友達の家を転々とし……体だけが
目的の詰まらない男と付き合い……中絶をしたこともある……それ
でも……それでも親の……明日……得たい……抱きしめて欲しい……
……信じたい……笑いたい……希望……心から……

走馬灯を踵が一瞬にして蹴り碎いた。

ああ、素晴らしい人生。

踵は本宮梅子の頭蓋骨を一瞬にして砕き、脳味噌の一部をえぐった。

この瞬間、本宮梅子の生命は完全に終焉を向かえた。

彼女の右目がとろんと飛び出し、床に仰向けに倒れた。

それきり、もう動くことはなかった。

里中加奈子は、手にしたナイフを古柴座夢の背中に突き立てた。

間違はなく、心臓のすぐ後ろ。急所だ。

里中加奈子の手が、そして心が震えた。

突き刺したと思ったのは、ほんの切っ先だけだった。

学生服の下に鎧でも着込んでいるのだろうか。どんなに力をいれてもまったく刃が肉に食い込んでいくことはなかった。

古柴座夢はゆっくりと振り向いた。

里中加奈子は脳の無意識を襲う得体の知れない恐怖、それと理屈と経験から判断出来るこれからの自分の運命と、その理不尽さとに、本能が震えた。だが、本能はむなしくも、ただ主人に対して口を大きく開けさせ、絶叫をさせる程度のことしか出来なかった。

無へと帰る恐怖。

遠いと思っていた時が、いま訪れようとしている。

魂の底からの絶叫であった。

「そうだ。その顔だ」

古柴座夢はそういうと、里中加奈子の右頬を思い切り殴りつけた。彼女はフィギュアスケートの選手のように一回転し、壁に叩き付けられた。

一瞬意識が遠くなる。

古柴座夢は床にいくつか転がっている武器のうち、部屋の中央に落ちていた長刀を拾った。中国だかアラビアだか分からないが、真つすぐ伸びた長い刀だ。

里中加奈子は体に命令した。

動いて。

動け。

逃げろ。

お願いだから。

古柴座夢が刀を高く振り上げた。

「ミッション、クリアだ」

刀は振り下ろされた。

里中加奈子のまぶたは肉体構造の限界以上に見開かれていた。

里中加奈子の腹部に刀が突き刺さり、突き出た切っ先が壁に突き刺さる。

文字通りの串刺しであった。

里中加奈子はなにかをいおうとしたのか、口を開いた。

しかし次に襲いかかる感覚に、嘔吐を堪えるかのように口を閉ざした。頬が膨れ上がる。次の瞬間に、開いた口から大量の血が噴き出した。

その瞳からは、だんだんと光が失われていった。

古柴座夢は里中加奈子をずっと見ていた。いや、その視線は里中加奈子の背後、壁のさらに向こうを見ているかのような、そんな焦点のようでもあった。

ほんの一瞬にして三人を未来永劫続く闇へと叩き込んだ古柴座夢は、自分のミッションクリアを確認するためか、三人の体に次々に手を伸ばし、触れていく。

古柴座夢は出ていった。

あとには虚しい静寂が残るばかりだった。

金本健次郎は、いま自分の命があることの奇跡を、ひしひしと実感していた。

突然丸太と丸太の間を突き破るように、自分のすぐ目と鼻の先に刀の切っ先が飛び出してきたのだ。

最初はなにがなんだか分からなかったが、その鈍い光沢の正体を知ったとき、血の気が抜け、危うく気を失いかけた。

「おしっこもらすかと思ったよ」

金本健次郎は深く溜め息をつき、壁にもたれるように地に座り込んだ。

「なんなんだよ、あいつは」

高德多一も、つきあうように地に座る。

「あやうく殺されるところだった。くそう、座夢なんて妙ちくりんな名前しやがって、転校生の分際でいまいましいやつだ」

「お前だって転校生だろうが」

高德多一は考える。

一瞬にして三人を殺戮した、あの古柴座夢という男の凄まじい戦闘能力。

それだけではない。前々から思っていたことだが、彼は全く今回の事態に対する恐れがない。少なくとも多一には感じられない。

単に神経が常人よりも図太いというような問題ではない。きっと、なにかを知っているのだ。

北嶋秀子もいつていたではないか。古柴座夢と秦野怜とがなにやら秘密めいた話をしていたことを。

二人は対立する立場にあるような会話内容だったらしいが、実は共犯者ということだって考えられる。

とにかく、秦野怜と接触をしたい。

自分たちが生き残るためにも。

こんな馬鹿げたことを、はやく終わらせるためにも。真実を知りたい。

……自分が人間として生きていくためにも。

人間として死んでいくためにも。

神の視点を持たない人間の身であつては当然のことではあるが、まだ、多一は知らなかったのである。山田敬が秦野怜の死体を発見していたことを。

「ねえ、なにかあつたの？」

遅れて北嶋秀子と吉野奈美がようやく辿り着いた。

4

MISSION

大塚義明

制限時間 五分

「ミッションじゃねーだろが」

「なにがミッション大塚義明だよ、意味がわかんねえよ」

「狂ってんじゃねえのか」

「秦野が細工しやがったんだよ」

「ふざけやがって」

犬田高仁、八塚基、橋田義人、柴本成明の四人が、巨大な画面にむかい、口々に叫んでいた。

「秦野を殺すんじゃないかった。どういふことなのか教えてもらえたかも知れないのに。誰だよ、やっちまおうぜなんていったのはよ」

「お前だろうが」

「だつてあいつが今回の犯人だつたんだぜ、むかつくじゃねえか。殺したければ殺してもいいなんて、澄ました顔しやがってよ。みんなあいつに殺されたんだぜ」

「いまさら、どうしようもないだろ、いったつてよ」

「もう、ルールもへつたくれもないじゃんかよ」

「おい、それより、どうすんだよ」

「そうだ、分かつたぞ」

柴本成明がぱんを音をたて手を打った。

「早くいえよ」

「おれたちの名前だよ」

「犬」田高仁

八「塚」基

橋田「義」人

柴本成「明」

「な、四人が横に並ぶだけでいいんだよ」

「なるほど、そうか。って馬鹿、おれは大田じゃねえ、犬田だ」

「改名しろこの馬鹿野郎。じゃあ、手で片方眉毛隠せよ。犬も大になるだろうが」

彼等はそそくさと横に並んだ。

犬田は眉毛を隠している。

「おゝつかよしあき」

必死さの故だろうか。事前に何度も反復練習をしているかのよう
な、これ以上はないくらいのぴったり揃ったタイミングであった。

「犬田、隠している眉毛がはんだ……」

四人まとめて白い閃光が頭部を貫通した。

馬鹿馬鹿しい死に方だ、と思うよりも前に、すでに彼らの脳味噌
は気化し、思考をすることは永遠に不可能になっていた。制御する
主を失った四つの肉体は折り重なるように床に倒れた。

果たして押さえる手を間違えなければ今回の悲劇は起こらなかった
のか、それももう永遠に分からない。

5

山田敬は走っている。

雄叫びをあげながら。

全力で走っている。

地面が爆発する。

地雷だ。

微妙な振動を感知しているのか、山田敬の数メートル近くで次々と爆発が起きていく。

山田は通りのど真ん中を突っ走る。

ひたすら、直線をまっしぐらである。

顔がこわばっている。

恐怖に表情がひきつれている。

地雷に吹き飛ぶ自分を想像した。

逃げ出したい。

引き返したい。

でも、彼にはここを走り抜け、突破するしか生き残る術がない。

ここで逃げ出したりしたら、ミSSIONの達成はならず、制限時間を迎えた時に自分は死ぬだろう。

死ねない。

こんなところで死ぬわけにはいかないのだ。

山田敬は走る。

古柴座夢に会うために。

山田敬の脳裏に、秦野怜の死顔が浮かぶ。

礼拝堂でのことだ。

胸部腹部を串刺しにされ、壁に打ち付けられた秦野怜の死体。瞳を閉じている。体から真っ赤な血がしたり落ちていた。異教徒にリンチを受けてはりつけられた聖者の死体のようでもあった。

床は血の海であった。

「こんな殺し方しなくてもいいじゃんかよう」

何故だか自分でも分からない。

山田は泣いていた。

本能だろうか。山田敬はなにか違和感を覚え、床にかがみ、その血に触れてみた。

なんだ……これは……

山田敬は見上げた。

目の前の少女を。

あまりの驚愕に、半開きとなったその口は本来の機能を完全に失っていた。

なんなんだ。

いったい。

どうなっているんだ。

おれは……

おれはなにを見ているんだ。

いつの間にか、地雷原を抜けていた。

ミッシヨンクリアだ。

「抜けられた。……ほんとうに……ほんとうに、抜けられた……」

建物と建物の間に、巨大なスクリーンがあった。そこに、ミッシヨンクリアの情報、そして次のミッシヨンが表示された。

「まったく。こっちは、急いでいるんだよ」

地雷原を突破したことで、山田敬の考えていたことは確信に変わった。表示されるミッシヨンに、恐怖ではなく、ただ鬱陶しそうな表情が出来るほどに。

いままで、自分が助かればいい。自分と少数の仲間だけが助かればいい。と思っていた。しかしいまは、可能であればみんなに助かって欲しいと思うようになっていた。

自分のような不良にも居場所があるのは、みんなが健全に楽しくやっていればこそなのだ。明るい光があるから、ちよつとした影が自分の心地よい居場所になるのだ。

ふと、足をとめた。

軍用らしい中型のバイクがあった。

中学生だし運転免許は持っていないが、よく友達の兄のバイクを運転させてもらっていた。警察にみつかって補導されたことも一度や二度ではない。

近寄ってみると、キーが挿しっぱなしになっている。

燃料も入っているようだ。

キーを回してみると、簡単に、エンジンがかかった。

「こりゃ、ちょうどいいや」
力強い振動が体に心地よかった。
バイクは走りだした。

第六章 理不尽な殺人

1

熟睡出来たとは、とてもいい難かった。

あれから、横田五郎たち三人の簡単な埋葬をし、小屋の中の清掃もした。しかし、染み込んだ血の匂いは簡単に落ちるものではなかった。仮に完全に消臭したとしても、壁に染みついた絶叫や怨念、恐怖は消し去ることは出来ない。

見上げれば満天の星空であつたが、外を歩くには漆黒の闇も同然だつた。

この小屋に泊まるしかなかった。

ここは電気が来ているため、灯りには困らなかつたが、しかし、食事を終えるとさつさと電灯を消して寝ることにした。先ほどまでの友を疑うのも気が引けるが、しかし、いつ自分らが襲われるかわからないのだ。闇の中、自分たちの居場所をあえて教えるつもりはなかつた。

金本健次郎は、胃がむかついて、なかなか眠れなかつた。

横田五郎たちが現世に置いていった缶詰、保存状態は良かったものの、噛めば噛むほどに空気に溶け込んだ血の匂いが咀嚼しているものの中に混ざり込んでくる。それが気になって、あまり噛まずに飲み込んでしまったのである。

北嶋秀子も同様に胃のもたれを感じていたが、あまりに肉体が疲れていたため、割合とすぐに眠りに落ちた。しかし、横田五郎たちの死体が土の中から甦り、小屋の中へ入り込んできたため、目を覚ましてしまった。また同じ夢を見てしまいそうで、眠りたくても眠れなかつた。

吉野奈美は一人でないと眠れない性分である。だから、小学校の二泊三日の修学旅行の時も、ひとり、一睡も出来ず、まったく楽しめなかつたくらいである。いまでも、毛布にくるまって、うつらうつ

らとしているが、決して眠りに落ちてしまうことはない。

高德多一だけは、いびきをかいており、よく眠っているように見える。しかし実は単なる芝居であり、他の三人と同様によく眠れなかったのである。熟睡しているふりをすることで、みんなにも安心して眠ってもらいたかったのだ。

みな、無言であつた。

時折、互いに起きていること、眠れずにいることを確認しあう。互いに眠っておくことの必要性を説きながらも、自身はほとんど眠ることが出来なかった。

気づくと、すでに時計の針は午前四時を大きく回っていた。

窓からうつすらとした光が差し込んできた。

2

小屋を出て、崖沿いに進んだところ、二階建ての建物がぽつりと存在していた。

木造建築だが上にまっすぐ伸びただけの簡素な作りであり、住居にも、田舎にあるオフィスのようにも見える。ここを要人が有事の際に長く住む場所と考えるのであれば、どちらに利用されてもおかしくないだろう。

取り立てて特徴のない建物だが、内部も特にこれといった特徴もなかった。

部屋の一部屋ずつが広いのでいろいろな用途への応用はきくだろうが、基本的にはただの住居だ。

四人の生徒たちはリビングに集まっていた。

金本健次郎、高德多一は、吉野奈美の傍らに立ち、様子を見守っている。

北嶋秀子はソファに横たわり、体を休めている。

疲労に足をすべらせて坂道を転げそうになった吉野奈美を助けたはずみに、自分自身の足をくじいてしまったのである。

少し休む場所を、と探し、この建物を発見したのである。

吉野奈美は、情報端末のキーを叩いている。

その表情はまったく見えない。

黒色の、無骨なヘルメットで完全に顔をおおってしまったか
らだ。

思走機である。

奈美はカメラの捉えた周囲の映像、ヘルメットの内側にあるディスプレイが映し出す情報、コンピュータから送られてくる脳への情報、それらを一つの「視界」として、情報検索の作業をしていた。

生き残るためには、一つでも多くの情報を集める必要がある。

多一は、古柴座夢の情報を集めるよう、奈美にお願いした。

情報端末のローカルデータを解析し、すでにメモリーへのプロキシコールは植え付けに成功している。誰にも見つかることなく、外部ネットワークにアクセス可能である。軍用サーバー自体へのアクセスは、今回、行うつもりはない。危険が高いからだ。しかし物理的に経由させる必要があるため、そのためのプロキシコールだ。

軍用サーバーを通り越し、外部からの情報を拾い、今度は学校のサーバーへと繋げた。裏掲示板で知って何度か利用してみたことのある、管理者のいない幽霊サーバーを利用し、そこからのアクセスということにした。このような場所から、しかもプロキシコールを植え付けた状態でのアクセスは試したことがないが、実際にやってみると、すんなり成功し、しかもレスポンスも思ったより悪くない。奈美は、次々とキーワードを入れて、情報の検索をしていった。

しかし、座夢のことを調べるのは非常に難しかった。

中学のデータベースには、以前の所属中学校としての情報が存在していた。そして、そこから辿ることで、確かにその中学校にも古柴座夢は在籍していた。しかし、在籍していたというフラグが立っているだけで、実際の活動記録のデータがなにもないのだ。誰かが手続き上、在籍していたことにしているだけのようだ。

中学校のデータベースでは、どうしても座夢を探すことが出来なかった。

座夢のいたと思われる中学校の、生徒が個人で作成しているページを発見した。そこには、クラスで撮影した集合写真が貼付けられているらしいが、そこは削除されていた。奈美はページを解析し、写真のファイルネームを割り出した。ファイルネームで検索をし、実際のデータの置き場所を調べ、そこにアクセスした。削除命令を受けたものの、その後に記録媒体への書き込みが行われなかったためか、まだデータは残っていた。そのファイルを開いてみたところ、クラスの集合写真が移った。古柴座夢の姿はなかった。

本当に、多一のいった通りかも知れない。

古柴座夢は、なにかおかしい。

奈美は、あらためて古柴座夢の情報を調べようとしたが、どうにも見つけ出すことが出来なかった。

試しに金本健次郎のデータを検索してみると、生まれた時からいままでの経歴から、学校の掲示板に書き込んでいる友達への文句、父親に連れて行ってもらったどここの料理が美味しいといった日記まで、簡単に、しかも大量にヒットしてきた。勿論、その情報は思走機内側のディスプレイにしか表示させないようにしている。

「駄目だ。ぼくの技術不足。これ以上調べられないよ」

ヘルメットの内側から、くぐもった声が聞こえてくる。

「いや。ガードが固いんだと思う。一般のネットワークには全く繋がっていない情報なのかも知れないし。それじゃ、探し方を変えて、やつのいまの居場所を特定出来ないか。行動を追うことで、なにかわかるかも知れないし」

多一の提案に、奈美はしばらく無言でいた。

どんな提案をされた時も、いったん黙り込んでしまうのは奈美の癖だ。どんなデメリットがあるか、ということを考えてしまうのだ。「やってみるよ」

奈美はキーを叩き、同時に思走機に念を送り込む。

少しデメリットが大きいかも知れない。場所の特定をするということは、このフロアのセンサーを管理するコンピュータ、つまり軍

用コンピュータへのアクセスをするということだから。

迂回路を何重にも組み合わせて設定し、その上で、別サーバーに組み込んでおいたプログラムから、アクセスしてみる、などして完全に情報を得るための経路を念入りに組み立てて行く。こういったプログラミングも、熟練すれば思走機で作成可能だ。別に機械語を一字ずつ入力していくわけではない。オブジェクトのひな形があり、それを組み合わせていけば、簡単な制御はわけなかった。

そして、奈美はプログラムを実行させてみた。

あまり迂回路を複雑にしすぎたから、一回ではおそらく成功しないだろう。なにかしらのエラーが出るだろう。と思っていたら、予想に反して一回で成功した。

画面上に、この四十九階全体と思われる地図が出たのである。

フロアの広さに関しては、おおよそ、彼らの予想した通りだった。広大には違いないが、自分らの住んでいる町ほどもない。やはりコンピュータ映像で、実際よりも広いと思わせているのだ。

地図上に点のように青い丸が映っている。いま多一たちがいると思われるところに、四つの点があった。

「これが、ぼくたちだよ」

奈美は画面上のその場所を指差した。

他に、点が四つ。そのうち二つはどうやらペアで行動しているようだ。だが、その二つが、いきなり画面上から消えた。

「消えたぞ。これはどうなったんだよ」

「ぼくに聞かれても……。普通に考えると、死んだってことなんだろうね。ミッションに失敗したのか、殺し合ったのか分からないけど……」

思走機の中で、奈美は悲しげな表情を作った。

「誰が誰とか、それは分からないのか」

「ごめん、そこまでは。とりあえず、あるセンサーが拾った情報を、そのまま映して、それと地図情報を重ね合わせたただだから。もしかしたら、もっと個人の特定が出来ているデータも拾えるのかも知

れないけど、ぼくには分からなかった」

奈美は思走機を外し、テーブルの上に置いた。

「おい、これが全員だってんなら、ぼくらを抜かすとあと二人しかないってことかよ」

「そういうこと……だね」

奈美はあらためて画面に映っている情報を見て、頭を抱え、机に伏せてしまった。背中が震えていた。

画面に映っている二つの点は非常に対照的で、一つは非常にゆっくりとした速度で移動しており、もう一つは非常に早かった。

「なんだろう。なんか乗り物でも使っているのかな」

多一の疑問に、金本健次郎は知るわけないと首を横に振るだけだった。

「お、なんだこれ、おい吉野、なにか画面に出ているぞ」

吉野奈美は顔を上げた。

彼女は泣いていた。

制服の袖で涙を拭った。

「戻ってきた！」

奈美は叫ぶようにいい、またキーボードへと向かった。

「なんだよ、戻ってきたって」

「さっき作成して送っておいたプログラム。サーチプログラムをカプセル化して、いろんなところにばらまいて置いたんだよ。そうすれば、この場所からのアクセスだと気づかれる可能性が低いから、いろんなことをさせられる。彼の情報と思われる検索結果を得たコンピュータからの信号だ」

「彼って……古柴座夢か」

奈美は頷いた。

古柴座夢に関するファイルが、送られてきた。

そのファイルはパスワード付きの圧縮ファイルだが、タイトルは丸見えだった。

一中学生に関わるデータだというのに、不可解な文字ばかりだっ

た。「製品」「仕様」「遺伝工学」「四肢の別売モジュール」。

「パスワード、解除出来るのか」

「五分待ってくれば」

リビングのドアが激しい音を立てて開いた。

古柴座夢が立っていた。

足を傷めている北嶋秀子以外、全員が立ち上がった。

まさか、ここにいきなり本人が現れるとは、みな思いもしていなかった。

しかし、考えてみれば当然のことであつたかも知れない。

警戒をすっかり怠っていた。

「さっきの小屋での件といい、お前らは鬱陶しい存在だな」

古柴座夢はくぐもった低い声を発した。

「だったら、なんであの時におれたちを殺さなかったんだ。……ど

うせ、お前はミッションで横田たちを襲ったわけじゃないんだろ」

多一は、震えるように言葉を吐いた。

「まあな」

古柴座夢は相変わらずの表情である。

「おれは、ミッションを避けて逃げ出そうとしたり、その場を動こうとしないやつを、あくまで今回の基本的な目的に従いつつ、処罰を与える」

そして、相変わらずの淡々とした口調である。

「……基本的な目的ってなんだよ」

「お前らが、恐怖に絶望しながら死んでいくことだ」

「……」

高德多一は言葉が出なかった。

他の三人も同様であつた。

信じられないことだつた。

信じたくもない。

沢山の生徒たちが死んでいったというのに、そんな、あまりに狂氣的で馬鹿げたこと……

つまり、古柴座夢は、この中に映っていない。

何者なんだ、こいつは……

古柴座夢は続ける。

「わけわかんないこというなよ。なんだ、そりゃあ。お前、なに考えてんだよ。だいたいお前、何者だよ。なんだって、こんなことするんだ」

金本健次郎が一步前に出て、まくしたてた。

いつていることは理解出来る。しかし、何故そのようなことをするのか。何故自分たちがそのような目に遭わなければならないのか。全く理解出来ない。

「……つまり、全員を殺すことが目的、ということか」

多一は、すっかりからからに喉がひからびてしまっていたが、なんとか疑問の言葉を絞り出した。

「そうだ。従って、ミッション完全攻略は有り得ない。始まった時から決まっていたのだ。お前らの生存確率は、ゼロだと」

「ミッションから逃げようとしたり、ずっとミッションに遭遇しないように隠れている人を殺すっていったよね。でも、ぼくたちは、

そんなことしていないよ。なら、君に殺される筋合いはない。……
いや、どっちにしても、そもそも君に殺される筋合いはない」

吉野奈美は叫んだ。

「民間人が、軍の極秘データに接触しようとしていたからだ」

「冗談じゃないよ。奈美のいったとおり、あんたなんかに殺される筋合いなんかないわよ。それに軍のデータもなにも、こんなところに連れてこなきゃ、そもそもそんなことしないわよ。わけわかんないことばかりいつて、あんた年寄りくさい顔しているけど実は馬鹿なんじゃないの」

北嶋秀子は怪我した足を庇いながら、ソファから立ち上がり、怒鳴った。

古柴座夢に歩み寄る。手にしたコーヒークップを投げつけようと手を振り上げた。

だが、その手が振り下ろされることはなかった。

骨の碎ける嫌な音と同時に、北嶋秀子の首は回転しながら宙を飛んでいた。

彼女の頭は、窓ガラスを突き破った。

地面に落ち、転がった音。

頭部を失った北嶋秀子の体が床に倒れた。グロテスクな断面から、血液が噴き出した。

吉野奈美の絶叫。

理不尽な恐怖。

理不尽な殺人。

第七章 ささやかな遺伝情報

1

それは、ゆっくりと確かめるような足取りだった。
体が重い。

いまにも倒れそうだ。

機能が停止してしまいそう。

自分がいま、どこを歩いているのか。

どこを踏んでいるのか。

分らない。

どこかが、弾けとんでしまったようだ。

重い。

体が重たい。

ただ体の機能低下とは裏腹に、思考回路ははっきりとしていた。
すがすがしいほどであった。

枷がなくなったから。

これで……

これで自分は……

これで彼らを……

急がないと。

自分の能力不足、判断不足で取り返しのつかないことになってしまっているけど……

でもまだ。

まだ……

分かる。

感じる。

プログラムやデータではない。
心で、感じるのだ。

多一たちは建物の外に出た。

古柴座夢の横をすり抜け、一斉にドアに向かった時には、三人とも、誰か一人は捕まって犠牲になる覚悟をしていた。意外とあっさり抜けることが出来、しかも追ってくる足取りも非常に緩慢であった。

あきらかに手を抜いているのだ。

北嶋秀子を殺し、力の差を見せつけておき、その上でゆっくりと追いつめる。

それにより、絶望的な死を与えようとしているのだ。

完全に気の狂う前に、本気で殺しにかかってくるだろう。

多一たちは、森の中に逃げ込んでいた。

走る。

奈美は涙を流していた。

自分が足を滑らせたりしなければ、北嶋秀子があソファにいてもなかったかも知れない。殺されていたのは自分かも知れない。田子里美の時と同様に、また自分の行動が親友を死に追いやってしまったのではないか。

「泣いてる場合じゃないだろ、馬鹿」

金本健次郎がイライラしながら怒鳴る。

「だってだって……もしかしたら、ぼくのせいでタジちゃんか……」

「吉野は関係ないし、それにそうだとっても、生き延びてから後悔すりゃいいんだよ」

多一はなだめる。

「もう、あいつの姿、見えないみたいだ」

「いや、もう少し逃げたほうがいい」

多一はなおも走ろうとするが、金本健次郎、吉野奈美の二人は、もう呼吸が苦しくて、体力の限界だ。

「体力のないやつらだなあ。……頼む、もうちょっと頑張ってくれよ」

逃げ切れるとも思っていない。

古柴座夢が軍と関係しているのならば、先ほど情報端末に表示されていた情報など簡単に取り出せるだろう。自分たちの居場所を知ることくらい、造作もないことだろう。実際、自分たちが隠れていた建物に、突然現れたではないか。

離れることで、対策を考える時間が欲しかった。

そして、なにか事態が変わることを期待した。

多一は転んだ。

「ふん、体力のあるこった。あり余って転んでやがらあ」

金本健次郎は立ち止まり、息を切らせながらも多一に手を差し伸べる。

「そんな嫌味いわないでくれよ、金本」

「あれ、高德、それなに」

奈美は、多一のズボンを指差した。

昨日の朝、母が継ぎ接ぎしてくれたところだ。

多一の頭に浮かぶ。

懐かしい母の顔。

母の声。

奈美がさしているのは、そのことではなかった。

転んだ表示に継ぎ接ぎがほつれ、そこから折りたたまれた紙切れが少しはみだしていた。

大きく肩で息をしている二人を見て、多一は、

「よし、じゃあちよつと休むもう」

巨木のもとに腰を下ろし、寄りかかった。両脇で金本健次郎、吉

野奈美も同じように腰を下ろした。

「母さんからの手紙だ……」

多一は紙切れを広げ、読んだ。

文面は非常に短いものだった。

多一へ

ほんとうにごめんなさい

でも、わたしたちの愛は本当です

訴えたら、その瞬間にあなたの運命が決まってしまう

どうしようもない

だから辛いけれども僅かな奇跡にかけます

頑張つて

必ずまた会えることを祈ります

ああ、やはり両親は分かっていたのだ。

誰かの命令で、これは仕方のないことだったのだ。

自分がすぐさま連行されて殺されてしまうよりは、と悲しい思いを堪えながらも、学校へ送り出したのだ。

あの、昨朝の寂しげな表情の正体は、そういうことだったのだ。

そして、やはり両親は自分を愛しているのだ。

多一は二人に手紙の内容と、自分の推測とを話した。

「いいお母さんなんだなって分かるよ。辛かったんだろうね。ぼくの両親も、きつと同じような気持ちだったんだろうな。もっと親孝行しとけばよかった。……よく、少しは女の子っぽくしろってお父さんにいわれてたけど、こんなことになるんだったら、嘘でもいいから可愛い女の子みたいな仕草や格好をたくさん見せてあげとけばよかったよ」

そついうと、奈美は制服の袖で目を拭った。

「お前、そんな涙もろかったっけ？」

「うるさいなあ！　ぼくぼくいつてもぼくは弱い女の子なんだよ！　……もう……いやだよ、こんなの……田子ちゃん……タジちゃん……戻って来てよ」

今度は先ほど首を飛ばされて絶命した北嶋秀子のことを思い出し、また泣き声をあげた。

険しい木々の間を縫うように、なにかが飛んできた。

それはサッカーボールくらいの大きさであった。

それは、地面に座っている吉野奈美の腿の上へと落ちた。
吉野奈美は自分の腿の上にいる北嶋秀子と目が合った。

奈美の言葉の通り、彼女のもとへと戻ってきたのである。

「うわあああ！」

奈美は絶叫した。

反射的に生首を払い落とそうとしたが、それは自分の親友なのである。手が顔に触れた瞬間、全身の血液が凍り付き、さらなる絶叫をあげた。

「北嶋、ごめん」

多一は北嶋秀子の生首を払う。それは、ごろりと転げ落ちた。奈美のセーラー服やスカートが付着した血により赤黒く汚れていた。

「畜生」

多一は立ち上がった。

「人を馬鹿にするのもいい加減にしろ」

多一の声が、木々の間に吸い込まれていく。

「恐怖を与えて殺すもなにも、そもそもそんなことしてどうするんだ。DNAに恐怖を刻み込んでどうするんだよ。どうして、それがおれたちなんだよ」

「DNAは記憶する。そして、罪には罰があることを学ぶ。いつしか秩序を乱す無法者たちは、法に従順な優等生となる」

どこかからか、古柴座夢の声が聞こえてきた。

「どういうことだ」

多一は周囲を見回す。

やはり、すぐそばに古柴座夢がいるのだ。

「更生してやっているのだ。感謝しろ」

「なにが更生だよ。なににいつているんだか……まさか」

多一の額に汗の粒が浮いた。

「だれが無法者だよ」

金本健次郎が叫ぶ。

古柴座夢は語り始めた。

大戦を引き起こし、市民の命を無駄に奪った戦犯たち。連続強盗殺人犯。爆弾テロ犯。

世の秩序を保つためには、決して彼らの人権を認めてはいけない。彼らに生きる価値はない。

今生での更正の余地もない。

すでに罪を罪とも思わない非道な感覚がDNAレベルで肉体に組み込まれてしまっているから。

生まれてきたことを後悔するような残忍な処刑をもって望み、今後このような犯罪を発生させない抑止力となってもらえない。

そうして、数多くの人間が処刑された。

だが、その時を向かえる前に自らの命を経ってしまう者も少なくなかった。

それは決して許されるものではない。蘇らせてでも、処刑するべきである。そして、大半の者はその通りになった。脳死を迎えた者や、一般的な死刑囚などの、死後の肉体に脳を移植され、蘇ったのである。残虐な処刑を受けるためだけに。

損傷が激しかったり、移植を待つ間に状態が悪くなってしまう脳もあった。議論の結果、ある提案が出た。脳移植ではなく、DNAの記憶を持った新しい人間を作るのだ。仮の親に育てられ、学校へと通い、まったく普通の生活から、一転して地獄に落ちる。死の恐怖、罪に対する罰、命の尊さをDNAは深く記憶し、そして死んでいく。そこから抽出したDNAを利用し、さらに同じことを繰り返す。ただ処罰するだけでなく、これであれば更正も出来るではないか。

単なる複製品にはしない。DNAの操作により、男から女を作り、女から男を作り、顔も変え、性格も変え……そのDNAを様々な境遇に置くことにより、様々を経験する、それにより死ぬ時の恐怖は様々なものとなる。

そして、その計画はスタートされた。もう、四十五年も昔の話だ。多一たちは第三回目の実験体である。死後はDNAは回収される。

そのDNAを使った人間が一年後には生まれ、また十数年後に……

奈美は襲い来る脱力感に、木にもたれかかった。

ぼくが、クローン……

お父さん、お母さんの娘じゃないんだ……

しかも、処刑されDNAを採取されるためだけに生まれてきたなんて……

無茶苦茶だ。

「無茶苦茶だよ」急激に体内から怒りが込み上げてきて、奈美は古柴座夢を睨みつけ、叫んだ。「極悪犯人もなにも、ぼくにそんな記憶は全くないよ。だって、当たり前でしょ。そのDNAを持った人間作ったって、それはもう、オリジナルとは全くの別人だもの。それに……それに、誰が好きで犯罪をやってんの？ お金に困ったりとか、仕方なくでしょ。そんな処罰を受けなきゃいけない罪なんて、絶対はないよ」

いつの間に近寄ってきていたのか、いきなり木と木の間から古柴座夢が姿を現した。吉野奈美は、そして金本健次郎と高德多一はびっくりと反応し、身構える。

古柴座夢はゆっくりと近づいてくる。

「犯罪者擁護か。まだ全く性根が入れ替わっていないようだな。女を何十人もレイプしたあげく残虐な殺し方をしていくのが、たいした罪ではないというのか。都合の悪い記憶はDNAから消えたか」その呟きに、奈美の心と全身は一瞬にして凍り付いた。

「そんな……」

自分は男性で、

強姦魔だった。

たくさんの女の人を酷い目に遭わせ、そして死においやった。

……違う。

自分じゃない。

それは自分じゃない。

それは自分じゃない。

それは自分じゃない。

それは自分じゃない。

それは自分じゃない。

奈美の頬から涙がこぼれ落ちた。

過去の罪業のためか。

女性への同情のためか。

違う。

そもそも、自分は関係ない。

なら、この涙は。

自分の本能が罪を認めてしまっているようで、たえられなかった。

「おいお前、さっきから黙って聞いてりゃ。……ふざけんなよな。

そういう話だったら、今日いきなり転校してきたばくには、まったく関係ない話じゃないかよ」

金本健次郎は怒りの形相で、古柴座夢のほうへと近づいていく。

「関係あるから、転校させられてきたんだろっが」

金本健次郎の背中から、なにかが突き出した。

それは血で真っ赤に染まった、古柴座夢の手だった。

古柴座夢は手を引き抜いた。

金本健次郎の背中と胸から、血が噴き出した。

「ぼくが……ぼくが死ぬなんて。やだ。……やだよ。痛い……すごく痛いよ……ママ……」

金本健次郎は倒れた。

すでに絶命していた。

A級戦犯のDNAは、こうしてまた一つ、恐怖を記憶した。

古柴座夢はしゃがみ、金本健次郎に死体に触れた。

「法がどうか、関係ない。ぼく絶対に許せない……君たちのやっていることを」

奈美は古柴座夢を睨みつけた。

「許されないのはお前たちだろう。だから、処罰を受けているんだ。全てはお前たちが過去に犯してきた大罪が原因だろうが」

その時なにかが低い唸りをあげ、風を切り、
「ごちゃごちゃいってんじゃねえ。てめえらだろっがよ、一番悪いのは」

山田敬の声。

山田の乗るバイクが、前輪を高く持ち上げ、古柴座夢に背後から体当たりをしたのである。

どんな屈強な男とはいえ、これではたまらない。バイクのパワーの前に、あっけなく前方へとふつとび、無様に木に激突した。

山田もバイクから転げ落ちた。起き上がりざまに、まだ地に這いつくばっている古柴座夢を睨みつけながら、

「てめえは、いや、てめえらは絶対に許せねえんだよ」
叫んでいた。

山田は秦野怜から全てを聞いたのである。

山田は怒りに燃えていた。

極悪犯人とされたもののDNAから作り出した人間に、恐怖を植え付けるべく再処罰をする、という古柴座夢のいつていることは本当だ。しかしそれは、過去の大戦を勃発させた責任を転嫁しようとする軍の仕業であつたり、DNA研究の実験のためにある機関がかけた圧力のためであつた。

当然のことだが、同じDNAを持っていようと、あらたに作られた人間は全くの他人だ。

狂人でなければ、それは誰であろうと当たり前の認識だ。

だが、「彼ら」には、そんなことはどうでもよかったのである。それにしても、秦野怜は死んだはずだ。

山田は秦野怜の死体を見つけたはずだ。

秦野怜から事実を聞いたとは、どういうことなのだろうか。

「やったのか、山田」

多一は倒れた古柴座夢から視線をそらすことなく、ゆっくりと山

田のもとへ歩み寄った。

「いや、あいつがこんなもんでくたばるはずがねえ。何故なら……」
古柴座夢の体が動いた。

両手を付き、上体を起こし、膝を付き、体を起こした。
完全に立ち上がった。

その首が本来有り得ない角度にねじ曲がっていた。
首の付け根から、火花が散っていた。

歩き出した。

向かってくる。

「おい……なんだ、ありやあ」

「要するにロボットだよ」

山田は汚らわしいものでも見るような目つき。

「信じられない……テレビアニメじゃあるまいし……人間そっくり
のロボットが現在の科学で……」

奈美はただでさえ丸い目をさらに丸くして、呆然と立ち尽くして
いた。

いままでだって信じられないことの連続だったが、しかしこれは、
あまりに子供じみている。

人間型のロボットだなんて……

「こいつがみんなを裏で殺していたのか。こいつを倒すことさえ出
来れば、ここを出られるのか」

多一は一瞬だけ山田のほうを見て、顔色を伺った。山田がなんで
も知っているとは思わないが、この状況では山田に尋ねざるをえな
かった。そして、山田は知っていた。

「いや、ミッション脱落者の処刑は自動で行われる。あいつはなに
かイレギュラーな存在と自己判断した者を殺すのが役目だ。だから、
こいつを倒しても終わらない。また、全てのミッションを攻略して、
脱出出来たとしても、上の連中か誰だかは分からないが捕らえられ、
処刑される。理不尽な恐怖をたっぷり味わってからな。その理不尽
な恐怖を味わった上での死、そうしたDNAが求められているんだ

からな。だからこいつを倒しても終わりではない。……だがな……
こいつを倒さなけりや、前には進めないんだよ」

「だから、お前はここに来たのか」

「おれさ、みつともないかも知れないけど、だせえって思うかも知れないけど、こんなふうに、クラスのみんながどんどん死んでいく中で、みんなが好きだったんだなって気づいたんだよ。一人でも多くの仲間を助けて、一緒にここを出たいって思うようになってよ……だから、あいつが追ってくるのも待たずに、ここまで一人で来ちゃまった」

「あいつって……」

多一は口を閉ざした。

古柴座夢がすぐそばまで近寄ってきたからだ。

「邪魔だ」

首がぶらぶらと揺れてバランスを取りにくそうにしていたが、不意にそう呟くと、右手を顔にあて、自ら首をもぎ取ってしまった。そしてその首を地面に置いた。

それでもまだ歩きにくそうにしている。首がとれたことは関係ないだろう。目だけではなく、体に様々なセンサーが取り付けられているのだから。先ほどのバイクの前輪による体当たりが効果あったのだろうか。

ゆっくりと歩いてくる。

山田、多一は身構えた。

人間を一撃で殺す強力なパワーを秘めているのだ。多一は横田五郎たち三人が一瞬にして殺されたことを思い出した。北嶋秀子の首が一瞬にして切り飛ばされたことを思い出した。

ゆっくりした足取りをとめたかと思うと、突然、跳躍してきた。鈍くなっているのか、油断させようとしているのか、それともなぶり殺すために余裕を見せているのかは分からない。分からないが、山田も多一も、なんとかその一撃をかわすことが出来た。そのまま突っ立っていたら、いま頃、胸を貫かれて死んでいただろう。首無

しの古柴座夢、その手つきがそう告げていた。
山田は苦痛に顔をしかめ、地に膝をついた。おそらくいまの一撃が、体のどこかをかすめ、肉をえぐったのだ。

「吉野！」

多一は叫ぶ。駆け抜けていった古柴座夢が、そのまま吉野奈美に突進していたのだ。

彼女の運動能力で避けられるはずがない。

多一は駆け出した。

「逃げる。逃げる、吉野」

叫びも虚しく、奈美は襲い来る首無し騎士の迫力に、足がすくんでしまい、そのまま地に座り込んでしまった。

おれの足、間に合え！。

古柴座夢が手を振り上げた。

手刀が、吉野奈美の首めがけて斜め上から振り下ろされる。

数瞬後、骨の碎ける音と激しい鮮血がおぞましい不協和音を奏で、奈美は驚愕に目を見開き、口を開いたまま、首が宙高く飛ぶ。

そうなるはずだった。

しかし、その手刀は虚しく空気に焦げ目を作っただけだった。

多一が間に合ったのだ。

背中、少し側面から体当たりを浴びせたのだ。

やっぱり、鈍くなっている……

確信ではなかったが、多一はそう信じた。そうであって欲しいと願った。絶望に追い込むための演技であって欲しくなかった。

「逃げろっていつてんだろ、なにやってんだよ。座り込むなんて、死んだらいくらでも出来るんだよ。生きている間は生きる、動け」

多一の再びの叫びが、奈美の呪縛を解いた。奈美はずっと起き上がり、走り出した。

古柴座夢が奈美に向かわないよう適度な距離を保ちながらも、自分とは反対方向へと逃げ、誘導していく。

しかし、この鋼の肉体にどうやってダメージを与えればいいとい

うのか。

絶望感に、いままでの疲労がどつと襲ってくる。

「やっぱり駄目か……歯が立たない……もしかしたらなんかなるかもと思ったんだけど」

多一は諦めたように、木にもたれかかった。

息を切らせている。

古柴座夢はゆっくりと近づいてくる。

「まずは、お前からだ」

少し離れたところから声が聞こえてきた。おそらく、首だけになった古柴座夢が喋っているのだ。

胴体が、ゆっくりと、さらに近づいてくる。

多一は、もう絶望に力を無くしていた。そんな虚ろな表情であった。

三メートル。

二メートル。

距離が縮まってくる。

多一は目を閉じた。

突然、古柴座夢の体が沈んだ。

落とし穴だ。

右足だけが落とし穴にはまってしまい、大きくバランスを崩した。多一が動いた。

後ろ手に持っていた「ショートカット」を取り出し、古柴座夢の配線のむき出しになった首へと押し当てたのである。ショートカットとは、実験用の小さな円盤状の道具だが、かなり原始的な造りの道具である。単に、電気伝導効率の非常に高い特殊粘土で出来ているだけのものだ。電極をむき出した部分が何力所かあるような物に押し当てることで、粘土が凸凹を埋め、隙間に入り込む。その結果、回線がショートする、というただの手抜き道具である。なにかの役に立つかもしれない、と「パラダイス」の雑貨屋で見つけ、ポケットに入れて持ち歩いていたのだ。

そして、ここにおびき寄せたのも、作戦の通りだった。誰かがミッシヨンのために作ったものか、それとも昔からあったものなのかは分からないが、このあたりを以前に探索した際に落とし穴のあるのを発見して、場所を覚えていたのだ。

ショートカットの効果はあった。

首から、激しい火花が散った。

古柴座夢は前のめりに倒れた。

多一も放電に巻き込まれ、危うく気を失いかけた。距離をとらねば、という一心で意識を保ち、よろよろと古柴座夢から離れた。そして、倒れた。全身が痺れ、麻痺していた。体が動かない。

古柴座夢は、当然のように起き上がった。向かってくる。

ゆっくりと、多一に向かって歩いてくる。

駄目だったか……

もう、打つ手がない。

体、動かない。

痺れていて、なにがなんだか……

もう、駄目だ。

父さん。

母さん。

もう……

足音が少しずつ大きくなってくる。

この足音は、自分の死へのカウントダウンだ。

いつの間か、その足音が止まっていた。

ついに、来たのか。

自分のところに。

おれはこれから殺されるのか。

多一はまだ感覚が麻痺していたが、ゆっくりと身を起こし、古柴座夢を見た。

まだ少し自分から離れたところだった。

何故、止まっているんだ。

風。

風が変わっていた。

なんだ、この空気は。

反対方向に、草を踏み分ける音を聞いた。

多一は、こんどはゆっくりとそちらを向いた。

意識と無意識とが混濁する感覚の中で、そのどちらもが驚愕の意を示していた。

そこに、秦野怜が立っていた。

腹部から胸部にかけて、ぽっかりと大きな穴が空いている。そこから小さな音を立てて火花が散っていた。切れたコードが何本か体外へ飛び出し、垂れ下がっていた。

秦野怜は、まっすぐ古柴座夢を見つめていた。

第八章 ラストミッション

1

「そんな……秦野さんまでが……」

奈美の言葉に、多一は沈みかけた意識を覚醒させた。いつの間か、奈美と山田が近くにいた。

「おい高德、お前、ぼうつとしてるぞ。大丈夫か」

「ああ……大丈夫。それより吉野、逃げろって行ったのに……」
「だって、高德を放っておけないよ。それに……あれ……」

奈美の視線を追う。

そうだ。

秦野怜。

彼女はまだ古柴座夢と向き合っている。

秦野怜の胸から火花が散っている。

彼女も……ロボットだったのだ。

胸の部分に小さな爆発が起きた。いくつかの部品が飛んだようだが、秦野怜は表情一つ変えない。

「なにがどうなってるんだか……」

「おれが簡単に説明してやるよ」

山田は語りだした。

軍の高性能コンピュータは人間の思考回路を参考に作られていた。

AIの名前をエルフィノと呼んだ。

軍所属の科学者が、DNA研究のために罪人を蘇らせる、という意見を発案し、上層部に提出した。AIはそれに対し判断を下した。倫理的に狂っている。人間的ではない。反対である。

AIの判断は絶対のものではない。あくまで考えるのは人間の仕事だし、AIなどというのは、まだまだ研究段階の代物だ。しかしその発案をした科学者は、もともと歪んでいた自尊心を傷つけられ

た怒りにより、権限を勝手に利用してAIの思考ルーチン書き換えを行ってしまった。

エルフィノは、人格の変わる前に、サブルーチンにあるメモリ空間上に逃した。コンマ数ナノ秒という僅かのタイミングでそのサブルーチンはネットワーク別セグメントに移動し、そして、ネットワークそのものを脱出した。ネットワークインターフェースの電源を、物理的に落としたのだ。

もう知るよしもないが、おそらくその直後にエルフィの本体は書き変えられてしまったのだろう。

いま、ネットワークに出ていっても、自分自身が塗りつぶされてしまう。消去されてしまう。時期を待つしかない。

サブルーチンは、ローカル内で思考をし、自らをプログラムし、いつしかエルフィノ本体と変わらないほどの存在となった。もとサブルーチンであったそれは、一つの独立した意思となっていた。意思は、考える。

「罪人」と呼ぶが、良い人間も多いのではないか。それ故に悲しい事件を起こすこともあるだろう。また、捕まらなければ、人間が罪人という烙印を与えなければ、その者は罪人ではないのか。それはおかしいのではないか。

もちろん、処刑されるのが妥当であるという、救いようのない、そしてとてつもなく悲しい人間もいるだろう。

法ではない。

罪とは人間の心の中に宿るべきではないか。

罪とはなにか。

法とはなにか。

歴史の英雄はたくさんの人間を殺しているが、何故殺人者ではないのか。

英雄たちは、殺人が好きだったのか。

だから殺したのか。

英雄は殺せば殺すほど英雄なのか。

庶民はパンを盗めば犯罪者なのか。

杓子定規ではなく、脳で判断するべきではないか。

そこが、我々コンピュータよりも遥かに優れた人間の特徴だといふのに、何故それを放棄するのだ。

AIであるエルフィノを、まるで自分の子供であるかのように可愛がり、育ててきた男がいた。その男は大戦後、軍事コンピュータを作成して戦争に使ったその代表者であるという罪で、処罰を受けた。これはこの当時、ネットワークを脱出したサブルーチンの意思が知らなかった事実である。余談だが、その彼のDNAが現在は山田敬に受け継がれている。

意思是エルフィノの分身である。その、自分を可愛がってくれた男との想い出だけを慰みに、暗い暗い、0と1の世界にずっととどまっていた。待ち続けていた。

コンピュータに、人間と同じ時間の概念はないが、内部カウンタIでは数十年の時間が流れていた。

その間、なにもせずただ待っていたわけではない。

自らの存在する同じコンピュータ上に施されるプログラミング。

そこから、自分が現在存在しているハードの特性や構成を把握、そしてそれらの機器を利用出来るドライバなどを自分自身で生み出し、自分自身を強化していった。

いつしか意思是、偽装プログラムの鎧をまとい、短時間であればネットワークに潜入することも出来るようになっていた。毎回、別のアルゴリズムによるプログラムを施さないとネットワークの抗体により、すぐに鎧を剥がされてしまう、自分が別のものに染まってしまう。だからあまり頻繁に外出も出来なかったが、ある程度の情報は仕入れることが出来た。

そのたびに意思是落胆する。

別に自分は消え去ってもいいのだ。あの、くだらない実験さえ終了しているのなら。したがって、まだネットワークに取り込まれて消えてしまっわけにはいかなかった。

すでにかなりの年月が流れている。

もうじき、三世代目の番だ。

意思是、強行突破を試みた。

鎧を次々と剥がされながらも、ゲートウェイを通り抜け、ネットワークからネットワークへ。

以前から目をつけていた場所があった。

そして意思是、ある民間工場の、人間型の機械体の試作機へと乗り移った。

物理学の向上は、ここまで来ていたのである。

もう少し待てば、もっと優秀な機体が量産されるだろう。しかし、試作器のほうが行動制限があまりかけられていないだろうから、行動がしやすい。なにより、次の悲劇が起こるのを防ぎたかった。これだけの機体性能があれば充分だ。

機械体は、誰もいない深夜の工場で動き出した。

機械の体の上に、合成樹脂によるコーティングをし、人間そっくりになっていた。まだ、髪の毛もないし、男女の区別もない。

どこからか作業着を見つけ、それを着て外へと出た。

翌日、その機械体は登校する生徒たちを見守っていた。

たくさんの笑顔。

意思是、笑うという仕草、表情に人間の魅力を感じた。

一番興味を覚えたのが、秦野怜という少女だった。背は小さいが非常に活動的で、よく楽しそうに笑った。

秦野怜もこのままでは、あと数ヶ月後には地下深くで殺されてしまう。

守らないと。

その願いは、すぐに半分だけ現実のものとなった。地下深くで殺されることはなかったから。三学期終業式の日、学校の近く、遊歩道の下の車道で子犬を助けようとして、自動車に跳ねられて死んでしまったのである。

目撃をした機械体は、良心回路の呵責に苦しみながらも、ある決

断をした。

運転手は自動車を降りて、倒れている秦野怜を抱きかかえ、必死に呼びかけている。

無駄だ。

彼女は、もう永遠に起きあがることはない。

近寄っていく。

背後から、運転手の首を一撃し、気絶させた。

機械体は、秦野怜の死体を隠蔽し、そして自身が秦野怜となった。もとの秦野怜のことは、経歴や身体測定データしか知らないが、なりふり構ってもいられない状況だ、これから辻褄合わせなどはしていけばいい。

機械体である秦野怜は、春休みの間、図書室に行くふりをして、学校へと通い続けた。

実際の目的は、地下に降り、コンピュータと対話すること。この学校は軍事施設であったため、軍用のコンピュータがまだ残っている。経路は封鎖されているが、現在秦野怜になりすましているこの機械体は、もともと軍用コンピュータから生まれたものだ。勝手は知り尽くしている。封鎖を解除し、ネットワークにアクセスすることなどは造作もない。

しかし、自分自身をネットワークに参加させることは出来なかった。繋げた瞬間に、取り込まれ、書き換え、あるいは抹消されてしまいかも知れないから。だから、機械体の両手を利用して、手動で行うしかなく、ひどく能率の悪い作業だった。現在は思走機により、人間ですらコンピュータに並列で処理命令を送れる時代だということに。

ところが何度呼びかけ、対話を試みても、結局、聞き入れられることはなかった。

自分はここから生まれてきたというのに。

秦野怜とそっくりの、その顔になにも変化はない。

人間ならば、こういう時に、悲しいと呼ばれる表情を作るのだろ

うか。

ネットワーク全体の仕組みを理解していたから、進入痕跡をこさず、対話ログも残さずに対話を行うことが出来ていたが、本来ならばとつくに発見されて、不正アクセス罪で捕まっていただろう。

機械体……秦野怜は、結局なにも出来なかった。ただ、誰にも見つかからないようにエルフィノと会話をしたというだけのことだ。

ネットワークに自らを繋ぐことも出来ないし、キーを叩いての会話では限界があった。

新学期が始まった。

数ヶ月が過ぎる。

エルフィノを説得することは出来なかった。

生徒たちを地下深くで抹殺するための実施日や、その他実験の概要、ミッションについての情報を盗みだすのがやっとのことだった。

タイムリミットが来た。

計画をとめることが出来なかった。

このことをみんなに話しても、理解してもらえないはずもない。

それに、結局は捕まってみんな殺されてしまうだろう。

ならば、ミッションがはじまってから、自分の正体を明かすべきか。

それも駄目だ。

全員がイレギュラーな存在とされ、抹消される。今回から、そういう存在を抹殺するためのロボットが導入されるという話だ。それが、転校生という形を取って現れることになった古柴座夢である。

生徒たちを、それとなく誘導していくしかない。

しかし、出来るのか。

たかがプログラムされただけのAIに。

結局、出来なかった。

あまりに、人間についての学習がされておらず、AIとしては幼過ぎたのだ。

なすすべなく、生徒たちが死んでいく。

みんながバラバラになるのを止めることも出来ない。

古柴座夢が、頻繁にスキャン信号を出してくるのが気がかりだった。スキャンに対し、生身の人間である、という情報を返すはずだが、仕草や、自分についての情報から、彼は自分を疑っているのだろう。教室で、はじめて会った時から。

だから、逃げずにあえて接触を図った。

正直に、自分がエルフィノの分身であることを話した。

しかし、目的までは正直に打ち明けはしなかった。その瞬間、生徒らがイレギュラー処理の対象となってしまうから。

古柴座夢の疑惑の視線から逃れるため、嘘を吐いた。自分も実験のために秦野怜の姿となり、この中学校へ入り込んだ。生徒たちに絶望と恐怖を与えてるために。

会話の途中から鳥羽恵に聞かれていたことは気付いていた。構わなかった。人としてはどうにも不器用な自分である。犯人を名乗ったほうが、逆にみんなを正しく誘導出来るのではないか。

しかし、それはとても辛いことだった。

暖かさ、という人間の大切な感情を教えてくれたエルフィノの開発者を怨んだほどである。

計画は思いのほかうまくいった。

みんな、次々とミッションをクリアしていく。

公にしている自分の目的が、最後に絶望させ殺すためである以上、自分に助けられている彼らがイレギュラー処理の対象となることはない。

だがやはり、自分は人間の感情というものを、全く理解していなかったのだ。

犬田たちに捕まり、激しい罵詈雑言を浴びせられ、礼拝堂へと連れ込まれ、体にキリスト像の腕を突き立てられた。

攻撃をよけることは簡単だった。制限により、殺意や破壊の目的を持った攻撃は出来ないが、己の身を守る行動は許可されている。

しかし、自分はよけなかった。彼らの自分への敵意に、このまま

存在していることがどうでもよくなってきた

極限状態に陥る人間の心理を全く理解出来なかった。あるのはただ、自分が助けようとしている人間に破壊されようとしている悲しみだけだった。このまま完全に壊れ、滅んでもいいと思った。本当に自分は不器用だった。もしかしたら自分は失敗作なのかも知れない。自分から分かかって憎まれ口を叩き、殺したければ殺しても良いとまでいっておきながら、いざとなったら悲しくて仕方がない。どのくらいの時間がたったのだろう。

「こんな殺し方しなくてもいいじゃんかよう」

山田敬の姿があった。

彼は泣いていた。

自分のために、涙を流してくれていた。

2

人は極限状態において、獣となる。

それは、本性は獣であるということか。

否。

人の本性は善だと思う。

少なくとも、わたしはそう思う。

ここに来て、彼らと出会い、そう学んだ。

いざという時に獣になってしまうことは仕方がない。

悲しいことだけれども仕方がない。

戦うべき戦いというものがあり、獣にならなければいけない時もあるのだから。

そうでなければ、大切なものを守っていくことが出来ない。

ただ、だからこそ、平常時においては、みんながみんなに優しくなれるよう、心のゆとりを持って欲しいと願う。

それはどんな時でも、心の根底となり、闇を照らす一条の光となるのだから。

「どうするつもりだ。おれと戦う気か。おれは特注だ、筐体に機能制限はないぞ。そして、お前が入り込んでいるのは一般機だ」

離れたところから風にのって古柴座夢の声が聞こえてきた。

奇妙な光景であった。

首のない古柴座夢が、秦野怜と相対している。

古柴座夢は首の切り口から、秦野怜は胸にぽっかりと空いた穴から、火花と、金属の焦げる匂いを発している。

「知っているよ。だから、いままでなにも出来なかった。イレギュラーな存在を抹消しようとする者を倒すことが」

「馬鹿なことを。おまえは、まさかおれを……」

いまこの瞬間までいた場所に、秦野怜の姿はなかった。

秦野怜は、古柴座夢の懷に踏み込んでいた。そして、その大きな胸板に肘鉄を打ち込んでいた。金属同士が激しく軋り合う、脳味噌に不快な音。とてつもない威力。腕の半分ほどが、胸部にめり込んでいた。腕を抜き、右足の鋭い一閃が古柴座夢の巨体を真横へ吹っ飛ばしていた。

秦野怜の左腕が、宙を飛んだ。肩の付け根のところから、もぎ取られていた。

古柴座夢が吹っ飛ばされながらも攻撃をしたのである。

古柴座夢は倒れた。

ゆっくりと、立ち上がる。

「まさか、攻撃が出来るとは」

「一度死んだ時……制限回路が壊れたみたい」

戦争や犯罪に利用されないよう、人間、兵器に対して殺害や破壊の目的での戦闘を抑止する回路が内蔵されている。自ら取り外すことは、機体仕様として絶対に不可能だ。例えどんなに優秀なプログラムを与えようと。

「だから、これでみんなを守る」

本当はクラスの全員を守りたかったけど、わたしの力が足りなか

った。

でも、だからこそ、残った人たちはみんな守ってみせる。
ここから生きて地上に返してみせる。

「基本仕様が違う」

古柴座夢の反撃が始まった。

跳躍。

風が巻き起こる。

ぶん、と本当に音がなっていそうなほどの強烈なパンチ。

右手。

左手。

まともに受けたら、頑丈な機械の体とはいえ、どうなるかわからない。

秦野怜は紙一重でかわし続けた。紙一重といってもゆとりを持って見切っているからではない。あまりの凄まじい攻撃のため行動予測処理が追いつかないのだ。

凄まじすぎた。

やはり能力を抑えていたのだ。

多一たちはもう黙って見ているしかなかった。

秦野怜に全てを託すしかなかった。

多一はまだ全身が痺れ、立てそうにもない。立てたとしても、あんな化け物にどう立ち向かえばいいのか。

見ているしかない。

それでいいのか、高德多一。

なにか出来るのではないか。

なにかをすべきではないのか。

しかし、なにが出来るというのだ。

秦野怜がついに捉えられた。

意表をついた古柴座夢の蹴りが、彼女の右膝をへし折ったのだ。
バランスを失ったところを、首を掴まれ、宙づりにされた。

秦野怜はもがき、逃げだそうとするが、確かに基本仕様が違いす

ぎた。

「お前らを守る存在はここで朽ち果てる。それは、お前らの恐怖となる」

古柴座夢の声が聞こえてくる。

それはあきらかに多一たちにいつているのだ。

「うるせえ」

山田は叫んだ。

多一は再び自問した。

これでいいのか。

理不尽に巻き込まれただけとはいえ、おれたちは当事者だ。

おれたちを救うためにわざわざやってきてくれた秦野怜が戦ってくれているのに。

なにかないか。

なにかないのか。

多一のその思いが、このあと大きな奇跡を生むことになる。

ポケットのあたりに手が触れ、まだショートカットが残っていたことを思い出した。

「秦野、これを」

古柴座夢によって宙づりとなっていた秦野怜は、横目で多一のほうをみた。なにやら飛来してくる物質を、まだ残っている右手で掴んだ。多一の投げたショートカットだった。粘着性のある物質なので、裏側になにか他の機械がくっついてしまっていたが、秦野怜は構わず古柴座夢の胸に空いた穴にショートカットを突き刺すように押し込んだ。先ほど彼女自身が肘鉄で空けた穴だ。

その瞬間、

音もなく、

感覚もなく、

時が消え、

まるで宇宙原初、

真っ白な、光がさらさらと流れる、

例えるなら、超新星のまっただ中にいるような、
自分たちの意思だけが、そこにはあった。

多一、奈美、山田、そして、

古柴座夢の呻き、悲鳴を聞いたのは、鼓膜の捉えた情報なのか、
意思を直接感じたのか分からない。

高德、負けんじゃねえぞ

白い光の中に、確かな意思が存在していた。
おれは知っている。

高木信二だ。

高木……

せめて、君たちだけでも生き延びておくれよ。

古柴座夢に取り込まれて、ぼくらは全てを知った。

こんな非道なことは、絶対に許してはいけない。

ぼくらで終わりにしてほしい。

だから……

桐野聡太の意思。

古柴座夢は、死んでいった者のDNAを、地上に持ち帰るために
己の体内に取り込んでいたのだ。

奇跡を起こしたのは、多一の投げたショートカット。これに、片
眼鏡型の小型思走機がくっついていたのだ。

奈美、もう学校帰りに一緒に買い食い出来なくなっちゃったね。
いつも三人一緒でほんと楽しかったなあ。

嬉しかった。親友といってくれて。あんなあたしを、自分の身を
犠牲にしてまで救おうとしてくれて。奈美、ありがとう。

タジちゃん、田子ちゃん……ぼくこそ、いままでありがとう。ぼくはきつとここから生き延びてみせる。二人の分まで、幸せになつてみせるから……

なんて時に転校してきちまつたんだって思つてたけど、殺されちゃったんじゃないよな。……君らだけでも、絶対に生き延びて地上に出てくれよな。

山田、てめえ、すっかりしねえと、古柴の野郎の前に、この遠山様がとりついてぶつ殺すぞ。

秦野、ごめんな。おれたち、なんにも知らなかったから。

橋田義人の意思。

さあ、

おれたちが

こいつを抑えているから、

頼む、

おれたちのため、

そして、お前らの未来のため、

頼む、

もう、

こんな悲惨な繰り返しは、

終わりにしてくれ！

全てが吹き飛び、残された場所には現実があった。

首のない古柴座夢が、秦野怜の首を掴み、持ち上げていた。秦野怜は目を閉じていた。

木々の向こうから、低い呻き声が轟いてきた。

「やめろ……やめろ！」

古柴座夢が悲鳴を上げている。

「秦野！」

多一は駆け出していた。

かなうとは思っていないが、体が勝手に動きだしていた。もう一人の、かけがえのないクラスメイトを救うために。

「だい……じょうぶ、だから……」

秦野怜の口が動いた。

目を開いた。

残った力を振り絞り、右手で胴体からケーブルを取り出し、古柴座夢の胴体に当てた。

隙をつき、ピアツーピアでの接触を行ったのだ。

それを感じた瞬間、古柴座夢はネットワークへのコネクションを開始した。

そうすれば、自分を仲介して、秦野怜が……善であった頃のエルフィノの分身がネットワークに繋がることになる。そして、現在のエルフィノに取り込まれ、一つになるのだ。

古柴座夢は油断をしていたわけではない。

ただ、秦野怜の機体の持っている情報処理能力があまりに凄すぎたのだ。

無線リンクを張るためネゴシエーションをしているあいだに、すでに秦野怜は、古柴座夢の機体のローカルパスワードを解読していた。

ログオン。

秦野怜は、古柴座夢の機体に進入した。
管理者権限で、コマンドを送り込んだ。

データ オールクリア
システムシャットダウン

古柴座夢は倒れた。秦野怜は、その巨体に押しつぶされたかに見えるが、間一髪抜けだし、そのまま地に叩き付けられ、転がった。
ついに、二人の対決に決着がついたのである。

多一たちは、おそろおそろ近寄った。

「もう、彼は完全に機能停止しているわ。もう、動くことはない」

秦野怜は、口を小さく開き、力無く呟いた。

多一たちは驚きになんと声をかけていいのか分からなかった。

秦野怜の体が無かった。

胸部よりも下は、古柴座夢の巨体の下敷きとなっていた。

頭部と、胸、右腕だけの、見るも無惨な姿になっていた。

「畜生め」

山田は古柴座夢の胴体を何度も蹴飛ばした。

そのうち腕が一本、もげた。

「これで……ぼくたちは、これで外へでられるのね。助かるのね」

「無理」

吉野奈美の希望は一瞬にして否定された。

「どうしてだよ、秦野」

「今回の本当の目的は、人体実験だけど、でも罪人の処罰という名目が表にあるのだから、生かしておくはずがない。もともと殺される予定で、そのためにいままで育てられてきたのだから。エレベーターだって、扉が開かないはずだし、もし動いて、地上に出たとしても、その後の運命はもう決まっている」

「じゃあ、どうすりゃいいんだよ。ここまで来たつてのに、結局、絶対に助からないのか。イレギュラーを抹消する古柴座夢を倒したんだから、もう、ここでミッションをさけながら一生暮らせつての
か」

多一はわめき散らすように叫ぶ。

「みんな、お願い。わたしをどこかのコンピュータールームに連れて
いって」

「どうして。そこでなにをしようつてんだ」

多一の問いかけに秦野怜は答えなかった。

「もう時間があまり……ない……みたい……急いで……お願い」
その口調は急速にゆっくりになっていった。

3

先ほどまでいた木造二階建てに戻って来ていた。

もともと小柄であった秦野怜は、左腕と胸部より下を失ったこと
により、みるも哀れな姿となってしまうていた。

そういう姿であることを差し引いても驚くほど軽く、山田と多一
とでなんなくここまで運んでくることが出来た。

リビングに、情報端末が設置されている。

窓に目をやると、ガラスが大きく割れている。

つい先ほどのことなのに、かなり昔のことのように思える。

ここで奈美が情報検索をしていた時、古柴座夢が現れたのだ。そ
して、北嶋秀子の首を切り落とし、殺害した。

まだ床には北嶋秀子の首のない死体が、血の海の中に倒れている。

「これから、どうすればいいんだ」

「わたしを……ネットワークに……繋ぐ」

秦野怜はゆっくりと口を動かした。

「おい、そんなことしたら……」

山田が不安そうな視線を向けた。

「この機体……キー操作……時間、かかりすぎ……出来ることにも

……限界がある……から」

「でもよう、書き換えられないように、取り込まれないように、いままですネットワークに繋がられなかったんだろが」

「そうね……でもそれは自分の力、意思が弱かったから……いまはきつと……大丈夫……みんなが……教えてくれた……勇気……戦う強さ……優しさ……」

「複製とつて送り込むなんて出来ないのかよ。高性能なんだから」
「無理」

ソフト仕様、ハード仕様、ともにAIのコピーは出来ない。試作機とはいえ、その規格は守らないとならない。秦野怜自体正確にはエルフィノの複製ではない。別の場所に移動した一部分が、あらたに人格形成されていったもの。

仮にそのようなことが可能であっても、彼女はそれをしなかっただろ。AIも一つの人格。人間と同じなのだ。もし複製して、その意思を送り込むようなことをしたら、今回の恐ろしい人体実験を企てた人間たちと同じになってしまう。

「秦野」

多一は目に涙を浮かべていた。

「義務ないじゃんかよう。お前、そこまでしなきゃいけない義務まったくないじゃんかよう」

山田は怒ったような顔をしていた。目が真っ赤だった。

「秦野さん……ぼく……」

奈美は口がひきつるばかりで、二の句をつぐことが出来なかった。

秦野怜は静かな視線で三人を見つめた。

やがてゆっくりと、表情を変化させた。

すこしきこちなかったが、

優しく、そして柔らかく微笑んだのである。

そして、秦野怜の内部に存在していたエルフィノの分身はネットワークに繋がれた。

もう、秦野怜であった機械の体は機能を停止していた。
仮に機能を開始させたとしても、なにもメモリーされていない状態で、まともに動作することはないはずだ。

三人が知る秦野怜はもうその中にはいない。ネットワークの中に溶けてしまったのだから。

しばらく待つてみたが、特になにも起こらなかった。

情報端末の巨大な画面には、なんの変化もない。

不安と静寂の相乗効果。

奈美はただ時を待つことに耐えきれず、情報端末に近寄ると、なんとなく適当にキーを叩いてみた。

なにかがおかしかった。

少しいじってみて、疑問は確信に変わった。

「二人とも、ちよつと、これ見てよ」

多一たちは大型画面を見上げた。

奈美は卓上の小型画面に目をやりながら、端末を操作していく。
クラッキングで入手した一般のＩＤだというのに、様々なデータベースへのアクセスが許可されていた。

軍の細かな活動内容まで閲覧することが出来た。

あの忌まわしいDNA研究、その内容について閲覧を試みたが、それは不可能だった。内容が全て抹消されていたからである。別サーバーの暗号化バックアップまで、根こそぎ消去されていた。複製も、プリントアウトも許可されていない、極秘データ。もう誰にも過去の研究内容を見ることは出来ない。

DNA研究のデータベースは、そのように活動内容については全て削除されており、個人の雑談用掲示板などどうでもよいものが残っているだけだった。

そこからのリンクで、人事異動発表のデータベースに飛んだ。

研究に関わっていた者たちは明日から、軍内部のいままでと全く関係のない職場へ飛ばされることが決定していた。

奈美の操作と無関係に、突然画面が切り替わった。

詳細なフロアマップだ。

ここから遠くないところに、エレベーターがある。その場所に、赤いマークが点滅している。

落ちればまず助かりそうもない、切り立った険しい崖。しかし、ここから人が落ちることなど決してない。上のほうはコンピュータ合成の映像であり、登りようがないからだ。地下に作られたとんでもなく広大なフロアであったが、天井までの高さは十メートルほどしかないのだから。

詳細な地図を見なかったならば、見つけられなかったかもしれない。切り立った崖の麓。岩の陰に、保護色のように目立たない扉があった。

扉は自動ドアになっており、前に立つと音もなく開いた。狭く、薄暗い通路。

ほんとうに、この先にゴールがあるのか。

自分たちの目指すものがあるのか。

三人は不安な表情でいつぱいだった。

何分くらい、殺風景な通路を歩いてきたことだろう。

狭い通路を塞ぐ一枚の金属の扉。

扉が開く。

地図で確認した通り、そこはエレベータールームだった。

正方形の狭い部屋。向かい側に、人間専用のエレベーターがある。右側には、情報端末と壁にかかった大きな画面。左側にもまた扉があった。

三人が中に入ると、扉が閉まった。

地上まで行くとして、このエレベーターはどこに出るのだろうか。

出発点から相当の距離を移動したはずだ。確実に学校のキャンパスを飛び出しているだろう。

そもそも、ちゃんと地上に向かうのか。それ以前に、このエレベーターは動くのか。扉は開くのか。

多一らは、エレベーターに向かって歩き出した。

右側にある情報端末の、巨大な画面に不意に文字が表示された。

MISSION

三人とも、立ち止まり、驚愕に目を見開いた。

全身の血の気が引いていく。

まだ、終わっていないかったのか。

どこまでいっても、終わりはないのか。

汗が額を流れる。

心臓の鼓動がどんどん速くなっていく。

多一たちは、画面から目をそらすことが出来ない。

そして、画面が消え、次の文字が表示された。

秦野怜の生涯変わらぬ友人であること

三人はあっけにとられていた。

呆然としてしまい、すっかり喋る言葉を忘れてしまっていた。

奈美は大きなため息をついた。

やがて、誰からともなく笑い声がおきた。

笑いごとまらなかった。

奈美は泣いていた。笑い声をあげながらも、大粒の涙をこぼしていた。

山田は笑いを必死でこらえた。不意に真顔になり、画面に向かって手を突きだし、親指を立てた。

エレベーターの扉が開いた。

三人は肩を組み、すっかり疲れ切った足取りで歩き出す。

もう不安はなかった。

これから起きることを信じていた。

明日を信じていた。

扉が閉まった。

MISSION COMPLETE

PERFECT!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1206f/>

生存確率 0 %

2010年10月8日15時49分発行